

2024 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2024)

# 目次

1. <a href="#">各科目についての報告</a> .....	2
2. <a href="#">2024年度 Placement Test実施報告</a> .....	161
3. <a href="#">2024年度日本語相談室実施報告</a> .....	164
4. <a href="#">2024年度立教大学漢字検定試験実施報告</a> .....	172
5. <a href="#">留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告</a> .....	173
6. <a href="#">日本語教育センターシンポジウム実施報告</a> .....	173
7. <a href="#">日本語教育センターニュースレター発行報告</a> .....	174
8. <a href="#">短期日本語プログラム報告</a> .....	174
9. <a href="#">センター員活動報告</a> .....	185
10. <a href="#">2024年度FD記録</a> .....	190

[2024年度日本語教育センター運営体制](#)

[2024年度日本語教育センター会議開催記録](#)

## 1. 各科目についての報告

### 2024 年度 J0 授業記録

#### コースの概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜春学期＞a クラス：瀧澤あゆみ、高嶋幸太、末松史

b クラス：佐々木瑛代、数野恵理

＜秋学期＞a クラス：武田聡子、森井あずさ、末松史

b クラス：瀧澤あゆみ、高嶋幸太、栃木亜寿香

c クラス：数野恵理、井上玲子、袁シュ

授業コマ数：週 3 コマ

履修者数：春学期 a クラス 19 名、b クラス 18 名

秋学期 a クラス 19 名（内、研究員 1 名）、b クラス 19 名、c クラス 15 名

使用教材：独自教材

#### コースの目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

#### 授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます

自己紹介	はじめまして/（私は）～です/～人です/専門は～です/どうぞよろしく/～さんは～ですか?/はい、いいえ/～さんは?/お仕事は?/お住まいは?/お国は?/Nが好きです、好きじゃありません
場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが…
買い物	～ありますか/いくらですか/～円です/～ください
レストラン	～、お願いします/Nで
許可を得る	Nでいいですか/Vでもいいですか
依頼する	Vてください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/Vます・ました/何をしますか・何をしましたか/Vたいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

## 結果と課題

<春学期>

(aクラス)

クラスメイトと和やかなムードで授業が進められ、楽しそうな様子で日本語学習に取り組んでいた。ひらがな・カタカナは、読めるようになることだけでなく、その読み方を聞いて文字が書けるようになることも、コース目標だったため、ひらがな・カタカナの復習時、ディクテーション（音と字形のマッチング練習）をはじめ、発音・読み練習、しりとりなど様々な活動を行い、少しでも「できた」「わかった」という達成感を感じられるような活動となるようにした。また、長音、促音の発音を授業内で丁寧に何度も扱った。ひらがな、カタカナで脱落してしまう学生はいなかったが、休みがちな学生や学習に消極的な学生は、文字を書いたり読んだりするのに時間がかかっていたため、どうフォローするかが重要だと思われた。授業後半テキストの読みやディクテーションに苦勞している姿も散見されたので、今後はモチベーションが維持できるような声かけや授業内での個別対応も早い段階から工夫していきたい。

ボランティアの参加時は、日本人学生がテキストにない表現や言葉を使用した場合も、「なんですか」と日本語で聞き返し、ボディーランゲージや英語も交えながら、コミュニケーションを続けようとする学生の姿が非常に印象的だった。日本語を学び、日本語を使って相手を理解しよう、自分の考えを日本語で伝えようという気持ちをもってくれている学生が多く、ボランティア参加の授業が複数回実施

されたことは良かった。課題は、全体で確認したり発表させたりする時間をもう少し長く設けてみることである。ボランティア学生とのインタラクションの時間を多く確保することも大事だが、早く終わったグループ、時間をかけてゆっくり進めるグループ、そして学生のレベルによっても進み具合は異なっているため、タイミングを見計らい「あと3分でまとめよう」等と声かけすることで、全体共有の準備をさせるなどしていきたい。

#### (b クラス)

毎学期、J0 では途中で教科書がひらがなに変わる際に、読めなくてクラスについていくのが難しい学生がいる。毎回かなのディクテーションクイズがあるが、教科書を見ながら練習しているだけの学生もいるため、今学期はディクテーションの練習として音声を共有し、自宅でもクイズ形式で練習できるようにした。また、前半でひらがなを覚えるのに苦労している学生には早めに声がけし、サポートをした。クラス全体でも、後半で教科書がひらがなになることを早めに伝えたこともあってか、ひらがなで書かれた練習でペアワークをしても、あまりクラス全体で進度にばらつきはなかった。旅行の思い出と最終スピーチも、全員がかなで原稿を書くことができた。動詞の活用はできても、形容詞の活用は苦手な学生が多く、言葉も覚えていないことが多かった。復習のアクティビティを何度かしたが、言葉を覚えておらず、い形容詞とな形容詞の区別も難しい様子だった。旅行の思い出と最終スピーチの原稿準備では、すべて「～でした」で形容詞の過去形を作ってしまう学生が多く、教科書の該当ページをひらいて考えさせても、自力ではわからない学生がいた。形容詞の語彙と活用については、今後スケジュールを見直し、一度に導入する量を調整していきたい。

最終スピーチは、クラス全体が集中して準備をすることができた。ペアで Q&A を練習する際に、スピーチ当日にもその質問ができるよう指示したので、Q&A の練習に集中して取り組み、当日も活発に Q&A ができた。

#### <秋学期>

#### (a クラス)

人数は多かったが、学期前半、学生たちは積極的に授業に参加し、学習意欲も高かったため、非常にやりやすいクラスだった。ひらがなやカタカナの学習も順調で、特にひらがなに苦戦する学生はほとんどいなかった。サバイバル日本語の学びを楽しんでいる学生が多く、全体的に非常に良い雰囲気に進んだ。しかし、ひらがなテスト後に参加者が減少する傾向が見られたことは残念だった。ただし、文字の導入が終わった後もクイズを続けたことで、学生たちが文字を忘れないようにするためのモチベーションを保つことができた。

12 月中旬からは急激に欠席者が増え、授業の半数が欠席となるケースもあった。体調不良による欠席は仕方がないが、そうでない学生も多く見受けられた。このため、授業の最初から、登録した以上はきちんと参加しなければならないということをしっかり説明しておく必要があると感じた。今後の課題とし

ては、途中まで順調に進んでいた学生が最後まで学び続けるための対策が求められる。一部、J0 レベルが簡単すぎて授業に参加しなくなる学生もいたため、エクストラワークなどを用意してより良い対応ができたのではないかと考えた。

一方で、テキストの進行に伴い、会話練習の中で語彙に対する理解が不足している学生が目立った。代入練習中に意味をよく尋ねられることから、語彙の定着が不十分だと感じた。ひらがな・カタカナテストのあとは、復習の仮名クイズの代わりに語彙のクイズを取り入れるなどして、定着を促進する方法を検討してもいいだろう。全体としては順調に進んでいたものの、欠席や学習の継続に関する課題が浮き彫りになったため、今後はその改善に向けた方策を講じる必要がある。

#### (b クラス)

学期を通して非常に積極的で、クラスの雰囲気も明るく、学生同士も学び合い支え合う姿勢を持った学生だった。そのためペアやグループ活動もすぐに仲間を見つけ真面目に取り組み、恥ずかしがらずに積極的に発表もした。日本語や日本文化への関心も高く、ひらがなとカタカナの学習も熱心に行い、学期末にはほとんどの学生が読み書きできるようになった。学んだ表現や語彙を用いて自由に文を産出する学生も多く、日本語でのコミュニケーションを楽しむ様子が見られた。疑問があればすぐに質問し、自分なりにメモを取って学びを深めていた。学生からの鋭い質問はこちらの学びにもなった。

学期終了後も日本語学習を続けたいという意欲を示す学生が多かったが、一方で、途中で欠席が多くなる学生も見受けられたため、そのフォローが今後の課題となるだろう。

#### (c クラス)

積極的に質問する学生が多く、授業内容以外にも、旅行中に使える会話や、日本人の友人との会話、サークル活動で使える表現を質問し、日本語を日常生活に活用しようとする姿勢が見られた。意欲的に学習していた学生からは「授業で勉強した日本語の表現を授業外で聞くことがあって、非常に役に立っている」というような発言があり、どんどん日本語を学ぼうとする姿勢が見られた。また、アプリを使って新しい日本語の語彙を覚えたり、漢字を勉強したりする学生もいた。

一方で、一部の学生は遅刻や欠席が目立った。学期のはじめに体調不良で欠席が続き、ひらがなを覚えるのに苦戦していた学生には早めに声がけをして対応した。オフィスアワーに来て仮名学習のコツを掴み、その後どうにかクラスについてこられるようになった学生もいたが、体調不良で度々欠席した学生は定着が難しかった。これらの学生も授業に出席した時には、クラス内の練習やアクティビティにきちんと取り組んでいたが、次第と学生間でレベルの差が開き、学期後半は、速くタスクが終わった学生が他のペアを待っている間、英語で私語をすることがあった。今後も仮名で躡く学生がいる場合は早めの対応が求められるが、よくできる学生には発展的なタスクに取り組ませるなどして、学期末まで全員のモチベーションを維持する工夫が必要となる。

## 2024 年度 J1 授業記録

### コースの概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：

<春学期> a クラス 富倉教子（文法 1）、小森由里（文法 2）、鹿目葉子（聴解会話）、高嶋幸太（読解・作文）、小松真帆（総合スキル）

b クラス 小森由里（文法 1）、数野恵理（文法 2）、任ジェヒ（聴解会話）、鹿目葉子（読解・作文）、富倉教子（総合スキル）

<秋学期> 長谷川孝子（文法 1）、末松史（文法 2）、鹿目葉子（聴解会話）、  
栃木亜寿香（読解・作文）、富倉教子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期 a クラス：10 名 b クラス：10 名、秋学期 12 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

聴解・会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

### 文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
---	------

プレレッスン	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Exchanging greetings</li> <li>• Learning some survival expressions</li> <li>• Learning the writing system of Japanese language</li> <li>• Learning basic numbers</li> <li>• Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence)</li> <li>• Learning basic words(Date、 Time expressions)</li> </ul>
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Noun sentence ～は～です</li> <li>• Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど</li> <li>• Noun modification(kinking nouns) ～の</li> <li>• Particle “also、 too” ～も</li> <li>• Particle(question marker) ～か</li> <li>• Interrogatives なに・だれ・どこ</li> <li>• Pronominal “one” ～の</li> <li>• ”please give me ---“ ～をください</li> <li>• Counterword ① ～円、個、才、ひとつ</li> <li>• Sentence ending particles ～よ、ね</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Polite speech and casual speech</li> <li>• い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。</li> <li>• Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも</li> <li>• い／な Adjectives as noun modifiers</li> <li>• Interrogatives どんな、どう</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。</li> <li>• Adverbs indicating ‘degree’</li> <li>• Explaining reasons ので、から</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Verb groups、 dictionary form of verbs</li> <li>• Polite and casual verb sentences</li> <li>• Particle を(Object marker)</li> <li>• ～は～を V sentences</li> <li>• Particle で(Location marker)</li> <li>• Particle で(Instrument marker)</li> <li>• Particle に／で(Destination/direction marker)</li> <li>• Mimetic words ① Eating、 drinking</li> </ul>



5	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Giving and receiving something ①</li> <li>• ～は Space/area/pass を V(motion verbs)</li> <li>• て form of verbs</li> <li>• Making requests ～てください／～ないてください</li> <li>• の : Noun equivalent marker</li> <li>• V て、V て、V。</li> <li>• Asking permission/Giving permission/prohibition ～てもいい／～てはいけない</li> <li>• Mimetic words ② Watching、seeing、speaking</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ～は Object に V sentence</li> <li>• Topic は V(Intransitive verbs)</li> <li>• Particle に(Time marker)</li> <li>• ～から～まで</li> <li>• Duration on time ～間</li> <li>• Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい</li> <li>• Time expressions まえに、あとで、てから</li> <li>• ～と思う</li> <li>• ～だろう／だろうと思う</li> <li>• Mimetic words ③ Condition of the body</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Sentence of existence and locatives いる、ある</li> <li>• Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階</li> <li>• だけ／しか</li> <li>• N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、neither)</li> <li>• N1 は A、N2 は B(Contrast は)</li> <li>• Noun と／や、Noun/adjective/verb て form、V-たり V-たり Adjective/verb し</li> <li>• ～かもしれない</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>• V-ている(Continuous action、state)</li> <li>• Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する</li> <li>• が used to describe a condition、scene before one's eyes</li> <li>• ～中(during、while、through)</li> <li>• もう／まだ</li> <li>• ～ませんか、～ましょう</li> <li>• Questions word + か／も</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～んです ①</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Giving advice ～たほうがいい</li> <li>・ Particle に(amount of frequency per time unit)</li> <li>・ Adverbial usage of adjectives</li> <li>・ Noun になる</li> <li>・ Conditional ① : と</li> <li>・ Chang of state、 condition(adjective + なる)</li> <li>・ Mimetic words ④ Pain</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ に(final destination)／を(point of departure)</li> <li>・ V-たことがある(experience)</li> <li>・ Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain</li> <li>・ Third person's emotion/feeling/pain/desire</li> <li>・ Conditional ② : たら</li> <li>・ Even if ～ても</li> </ul>

### 授業の方法

J1は週5日のコースであり、文法1、聴解会話、文法2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法2：文法1で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法1で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では習った文型や語彙を使って400～600字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

### 結果と課題

<春学期>

(aクラス)

文法 1：学期を通して日本語に対する興味と積極的に学ぼうとする姿勢が伺えた。毎回の授業で新しい表現や文法を導入するクラスであったが、単に受け身になって新しい情報を得るというより、それを其々が自分のものとして捉え、知っている知識や体験、母語との比較などから疑問に思うことなど常に質問を投げかけ、かつクラスメイトの質問に対しても互いに意見を述べ合うなど、毎回の授業は活発に行われており、個々の学びを触発していたと感じた。一方中盤動詞、形容詞の活用が入って以降、容易にこなす学生とそうでない学生に分かれていった傾向があった。全体的に初級日本語の概要を捉えた学生は多く見られるが、上記の理由で、最終的に基本となる文型を正確に使用することができない学生も数名見受けられた。今後は日本語に対する興味・関心を保ちつつ、複雑な活用などの学習および習得にどのように繋げていくかが課題である。授業では積極的に参加するだけでなく、学習者同士で自然に協力し合い、共に学び合う姿勢が全体的に見られ、活気のあるクラスだった。

文法 2：欠席が多い学生が 2 名いたが、真面目な学生がほとんどで全体的に出席率も宿題の提出率も高かった。本クラスの目的は文法 1 のクラスで導入された文法項目を書くことによって定着させることであり、授業ではワークシートで新しい文法項目を復習することが主になったが、学生同士でわからないところを教え合い、協力しながら学ぶ様子が見られた。ただ、コース終盤になると、遅刻する学生が若干増え、授業中も集中できない様子の学生がいた。それに連動して新しい文法項目も定着しにくくなり、中間テストに比べ、期末テストの結果は芳しくなかった。コース終盤まで学習意欲が維持できると、最終成績もさらに良いものになったのではないかと悔やまれる。コースを通して学ぶ姿勢が保たれるよう、今後は指導方法を工夫したい。

聴解・会話：欠席が多い学生もいたが、どの学生も授業中は真面目であり、疑問に思ったことは質問をし、積極的に日本語学習に取り組んでいた。会話活動では、既習文法を使って、オリジナリティあふれる会話を作り、クラスメイトと楽しく会話をしていた。授業後の感想には、「学ぶことが多かった、楽しかった」などの肯定的な意見がある一方、聴解が難しかったという意見もあった。今後の課題として、J1 のレベルに合う聴解教材を考えていきたい。

読解作文：読解では、お互いに理解確認をするピア・リーディングを取り入れるなどをして進めていったが、よく話し合いながら内容を吟味することができていたように感じる。また、作文では学んだ文法を積極的に取り入れようとする姿勢が見られ、学習項目の定着化を促すことができていたのではないと思われる。今後の課題としては、問題の確認や作文返却時のフィードバックなどだと思う。欠席者などに対しては学習者自身で内容を理解できるよう、わかりやすく留意点や修正点を記しておく、などの工夫も必要だと感じた。

総合スキル：このクラスは、日本語の運用能力の向上を目標とし、既習項目を使用した QA、ショートスピーチを中心に、自分の話したいことをより正確に表現できるよう、活動を行った。ショートスピーチでは、毎回テーマを決め、限られた時間の中で短いスクリプトを書き、練習を経て発表する、という流れで行った。また、スキット作成では、使用する文型を提示し、あ

る程度自由に配役やストーリーを考えさせ、短い寸劇を作成したのち、クラスの前で発表してもらった。学期の終盤には、トピックの書かれたカードを引き、その内容で1分間短く話すというストーリーテリングの活動も行った。毎回の授業で、自分の言いたいことをまとめ、相手にわかるように話すというスピーチ練習を繰り返し行った結果、最後のストーリーテリングでは、スクリプトを書かずとも、頭の中で言いたいことを文にいて算出することができるようになった学生が多く、非常に有益な活動であったと考える。クラスメイト同士で助け合うよい雰囲気のクラスであったため、発表を嫌がる学生もおらず、積極的に質問し合うなど、活気のある活動となった。また、適宜日本語母語話者であるボランティアにも活動に参加していただいたが、はじめは緊張していたものの、回を重ねるごとに、臆することなく日本語を使うようになった学生が多かった。今後の課題としては、様々な場面で自然にやり取りができるよう、インタラクティブな会話練習やロールプレイなどの練習もより多く盛り込んでいきたい。

#### (b クラス)

文法1：10名の履修生のうち1名が学期の序盤と終盤に体調を崩して欠席が続いたが、全体的には真面目な学生ばかりで、出席率も宿題の提出率も極めて高かった。毎回授業の冒頭で行った語彙クイズも総じて高得点だった。本クラスでは、PPTで新しい文法項目を導入したが、教員からの問いかけに対する反応がよく、学期を通して楽しく日本語を学習している様子が伝わってきた。授業中も積極的に質問をし、わからないところは学生同士で助け合いながら、学びを進めていた。小さい教室で10名がコの字型に座り、互いの様子を見ながら授業を受けていたことも、クラスを和やかな雰囲気にする要因の一つだったように思われる。

文法2：文法2は文法1で学習した項目を、書いて練習し、定着させるクラスである。途中、口頭練習も入れたが、基本的には各自のペースでワークシートの問題を解いていった。また、毎回ディクテーションでその課のキーとなる文をいくつか書き取る練習をした。履修者は10人で、机間巡視をして質問に応じたり、書いた内容を確認したりするのにちょうどよい人数であった。学期後半になると、文法項目が増え、習ったことを思い出すのに時間のかかる学生が増えたが、教科書を見返したり、質問したりしながら、集中力を切らさず熱心に取り組んでいた。習った文法や語彙を実際に使える場面を想定し、今後も教材をアップデートしていきたい。

聴解・会話：聴解・会話：本クラスは受講生の「聞く」「話す」力にレベルの差があったため、グループ編成が大きな課題であった。しかし、受講生全員が毎回非常に熱心に活動に取り組んでおり、受講生同士で互いの悩みを共有し合い、自ら自身の課題を克服しようとする姿がみられ、グループ活動を行ううえでの困難点はなかった。ただし、受講生の中には、自分自身の日本語に自信が持てず、常にグループメンバーに頼って発言をする学生がいた。主に産出活動（聞く、話す）を行うクラスでは、受講生の積極的な態度がより重要な課題となってくる。教師からの一方的な指導を求め、自

らの産出活動には消極的な態度をとる学生の意欲を高めるためには、どのような働きかけが必要なのかについて、今後さらに工夫を重ねていく必要がある。

読解作文：真面目に授業に参加し、クラスの雰囲気もとても良かった。読解ではペアワークを取り入れたが、お互いの持っている知識を共有しながら積極的に活動に取り組んでいた。作文では、日本語力の伸びが顕著に現れた。また、日本語を使って、自分の考えを表現することの楽しさも窺えた。授業後の感想では、「日本語を学ぶ楽しさを味わった」、「クラスメイトと交流が持てて良かった」などの肯定的な意見が聞かれた。今後の課題としては、読解を内容理解に焦点をあてるのではなく、「考える」こと、「視野を広げる」ことに結びつけられるような授業を行っていききたい。

総合スキル：a クラス同様、クラス全体の雰囲気がよく、お互いに協力し合いながら学び合う姿が頻繁に確認された。そのためか授業でも、質問したり、自分の意見を共有したりと、授業に積極的に参加をする学生が多く見られた。授業では発表活動に加え寸劇やストーリーを作り犯人探しなども行ったが、日本語を学び始めてまもない学習者であるにも関わらず、ターゲット文型や語彙の使用のみならず、その課題の内容も含めそれぞれが奮闘し、よい結果を納めていた。課題としては後半文型が複雑になってきたせいか、多少集中力や参加意欲が薄れてきているところを感じられたが、全体を通して学習者は前向きにかつ熱心に、そして快活に活動に取り組んでいた。今後は学習者のモチベーションを保持しながら、ターゲット文型の習得や、日本語での意思表示およびコミュニケーションが取れることを目標に、活動や日本人ボランティアとの交流の機会などさらに工夫していききたい。

#### <秋学期>

文法1：学生たちはお互いに協力しながら、熱心に授業に取り組んでいた。授業や日常生活で頻繁に使われる文法項目や表現、語彙については、徐々に定着が見られた。一方で、毎回多くの文法項目や表現を学習するため、一度理解した内容を忘れてしまうことが多かった。また、普段あまり触れる機会のない文脈や、英語には存在しない概念については、特に習得に時間がかかる傾向が見られた。特に既習項目が限られている学生にとっては、これらが学習の難易度をさらに高める要因となっていたと考えられる。今後の課題として、限られた授業時間の中で学生が達成感を得られるような練習の機会をどのように確保するかが重要となる。また、学生が楽しさを感じながら意欲的に取り組めるよう、さらなる工夫が求められる。加えて、教師間の連携を一層深めることで、より効果的な学習環境を整備する必要がある。

文法2：非常に楽しいクラスであり、学生たちの明るい雰囲気と積極的な姿勢が印象的だった。学生たちは授業中の取り組みに関して集中力を発揮し、活動にも熱心に取り組んでいたため、学びの時間を十分に楽しみながらも効果的に進めることができた。お互いに助け合いながら学びを深める姿が多く見られた。ただし、クイズの点数を振り返ると、一部の学生については予習が不足していたように感じる場面もあった。授業中の理解度は高く、課題への取り組みも丁寧であ

ったため、予習を促す工夫を取り入れることで、さらに学習効果を高められる可能性がある。  
来期に向けては、予習の重要性を学生たちにより強く意識させる方法や、予習状況を確認するための仕組みを導入することを検討していきたいと考える。

聴解・会話：個性が強く、ユニークな学生たちであり、クラスの雰囲気もとても良かった。毎回の授業を楽しもうとする姿勢が見られ、日本語でどう表現するのかを知りたいという強い意欲も持っていた。前学期をふまえ、J1 のレベルに合うような聴解の活動を取り入れたが、スケジュールの都合上、文法項目を導入する時もあったため、聴解時間が十分にとれたとは言い難い。今後の課題として、聴解時間が十分にとれるようなスケジュールを考えていきたい。

読解・作文：読解クラスでは、読解文に関する話題の確認、読解文の音読、内容の確認 QA、内容に関するディスカッションの順に進めていった。時間的に授業内で扱えない箇所は宿題とした。前半は内容理解も早かったが、後半になるにつれ難易度が上がり、理解に時間がかかる学生も複数名いた。そのため、クラスメイトと問題文を解いたりディスカッションしたりするピア活動の時間を適宜取り入れた。大多数の学生が既習文型を含むまとまった文を読み、理解することができるようになった。課題は、難易度が上がるにつれ読解文に向き合う意欲を失う学生もいたことである。読解文そのものへの興味を失わせないように、プレタスクとしてトピック理解を補助する活動を取り入れていきたい。作文クラスでは、内容と構成を確認し、アウトラインの作成を授業内で行い、作文は宿題とした。最初は書きたいことがまとめられず、アウトラインの作成まで個別指導が必要な学生もいた。クラスメイトとアウトラインの作成を行うピア活動を積極的に取り入れたところ、作文の作成までスムーズに進めることができた。課題は、添削した宿題の作文の返却にとどまり、十分なフィードバックが行えなかった点である。毎回の全体フィードバックとし、原稿用紙の使用方法やマス目について指導するにとどまり、時間的な制約もあり細かい個別指導をすることができなかった。今後はクラス運営を見直し、授業の最初にセルフエディティングやピアエディティングなどを取り入れることも考えていきたい。

総合スキル：今学期、学生達は終始授業に集中し、日本語学習や各活動に対し前向きに、かつ積極的に取り組む姿勢が大多数の学生に見られた。授業では様々なトピックや形式（ペア、個人など）で発表を行ってもらったが、そのいずれに対してもそれぞれ個々の学生の独自性や創造性が現れ、予想を上回るものが多く見られた。また日本人学生との交流を通してのインタビュー活動などでも、新しい言葉や分らない言葉などに臆せず、積極的に発話を行っている姿勢や、日本語を使用して話そうとしている様子が窺えた。言語習得としては全体的に正確性やその使用についてはさらなる練習が必要ではあるものの、授業で導入された文型を一生懸命使用しようとしている努力が確認でき、また概ね自分の意見や考えを伝えることはできていたようである。総合的に、このクラスは個々が自律して学習に取り組み、かつ日本語学習への熱意が感じられた。

## 2024 年度 J1S 授業記録

### コースの概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名： <春学期>長谷川孝子、森井あずさ、鹿目葉子

<秋学期>山口紀子、東平福美、鹿目葉子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 14 名、秋学期 12 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

### 文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

### 授業の方法

J1S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

## 結果と課題

### <春学期>

楽しみながら日本語学習をする学生が多く、授業が進めやすかった。コツコツと努力した学生が多く見られ、日本語力がかなり伸びたと思われる。特に作文は既習文型を用いて、600～800字程度のまとまりのある作文が書けるようになった。また、漢字に興味を持つ学生も多く、漢字学習に熱心であった。しかし、週に3日というスケジュールのため、学習した文法を使った練習や聴解練習のための十分な時間を確保することが困難であった。前述はJ1Sの課題である。今後は、文法導入の時間配分を考えて、定着に向けた練習をすること、また、各課で毎週聴解練習をすることを徹底したい。

### <秋学期>

今学期、途中1名が履修取り消しになり、体調不良の学生も1名いたが、残りの学生は最後まで真面目に授業に参加していた。クラスの雰囲気も良いことから、授業がスムーズに進められた。今学期は、日本語を学習することに楽しさを抱く学生や、自律的に学習できる学生が多く、熱心に学習に取り組み、課題の提出率も高かった。一方、授業ではインプット量が多いため、応用的な練習の時間が足りず、授業中には理解・産出ができて、なかなか定着や実際の運用につながらなかった。また、語彙や文法の宿題では、正確さに欠ける部分も多く見られたことから、テキストの文法だけではなく、授業内で応用問題を取り入れることが必要である。また、授業時間が限られており、授業内で聴解の練習時間を作るのが難しかった。日本人学生と話す機会を持ったが、十分とはいえないため、今後は、日本人学生と話す機会をできるだけ増やし、ネット上の聴解教材の紹介も行っていきたい。

## 2024年度 J2 授業記録

### コースの概要

J2は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙500）を身につけているものを対象とする。週5日、毎日スキル別（文法1、文法2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法1で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：<春学期> 富倉教子、小森由里、森井あずさ、泉大輔

<秋学期> 小松満帆、末松史、森井あずさ、泉大輔

授業コマ数：週5コマ（文法1、文法2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期17名、秋学期11名

使用教材：独自教材

### コースの目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に



必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については 1000 を目標に増やす。

文法 1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法 2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせて基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解作文：文法 2 で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

## 文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」 4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、Even though *Review のに、が/けど、ても

	7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. V-方 How to V</li> <li>2. Vながら V : Doing two things simultaneously</li> <li>3. Have something with/on、 possession、 own ～がある</li> <li>4. Obligation: Must / Have to ～なくてはいけない／なくてはならない</li> <li>5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ～ ～なくてもいい</li> <li>6. By (time) :までに / Until (time) まで</li> <li>7. Mimetic words ⑦ Weather</li> </ol>
4	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. When～: ～とき～</li> <li>2. Noun が要る・役に立つ</li> <li>3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・～のなかで一番</li> <li>4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応</li> </ol>
5	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Try doing something and see: ～てみる</li> <li>2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる</li> <li>3. Noun modifiers 名詞修飾</li> <li>4. Mimetic words ⑧ Nature</li> </ol>
6	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞</li> <li>2. Vて ある</li> <li>3. Intransitive Vている vs Transitive Vである</li> <li>4. Mimetic words⑨ : Sleeping</li> <li>5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける</li> </ol>
7	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Vて おく</li> <li>2. ～が V みえる・きこえる・する</li> <li>3. Giving and Receiving (favours、 some acts) ～てあげる・もらう・くれる</li> <li>4. Want someone to do some action: Vてほしい・もらいたい・いただきたい</li> <li>5. ～が・けど (けれども)</li> <li>6. Imitative words : Caught a Cold ?</li> </ol>
8	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. あいだ VS あいだに</li> <li>2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る</li> <li>3. い-adjectives derived from verbs Vにくい／Vやすい</li> <li>4. Expressing Purpose: ために・ように</li> <li>5. Review: Various expressions for purpose</li> <li>6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける</li> </ol>

9	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 伝聞 Hearsay、 Conveying information getting from another person、 media ～そうだ・ということだ・とのことだ</li> <li>2. V てしまう</li> <li>3. Review: V ている、V である、V てる、V おく、V てしまう</li> <li>4. [Question words] か / ～かどうか</li> <li>5. V1 ないで V2 without doing V1、 do V2</li> <li>6. Imitative words : Hitting、 Breaking</li> <li>7. Compound Verbs ③V なおす・ V かえす</li> </ol>
10	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ</li> <li>2. Decisions: ～ことにする・～ことになる</li> <li>3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている</li> <li>4. 比喩の表現 Expressing Resemblance、 Figurative expressions ～ようだ・みた いだ</li> <li>5. V-て いく・くる do V and come/go</li> <li>6. Imitative words : Animals、 Birds</li> </ol>

### 授業の方法

読解作文（月）、文法 1（火）、聴解会話（水）、文法 2（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行われた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。

毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズ I」を行った。

また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シート I」を宿題にした。

文法 2：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を

正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズ 2」を行った。また、新出文法の理解度を確認するために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行っ

た。また、毎回、各課の代表的な文型を使った文章のディクテーションを実施した。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シート II」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカシ

ョンを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロール・プレイ、スピーチ等を行った。また、日本人学生にボランティアとして参加してもらい復習と応用練習を行った。毎回授業のはじめには、新出文法を理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。

## 結果と課題

### <春学期>

文法1：今学期は大所帯ではあったが、履修者は個々に授業に臨み、またペアワークなどを通して学習していたようであった。授業では積極的に質問や教師の投げかけに対して回答してくる学生も少なくなかった。それらの質問や回答をもとに、既習項目を復習したり、さらにターゲット文型の理解や使い方を深めていったりしたことは、その当事者だけでなくクラス全体にとっても有意義だったのではないかと考えられる。学期中盤以降、学習者が導入された文型の意味と使い方を整理し、消化するのに難しさを感じている様子が少し伺えたため、後半は授業で扱った内容をまとめたものをクラスに配布した。一方導入された文型に対して比較的理解の早い学習者、またさらに授業では未習の文型を習得している学習者も一部見受けられた。学習者一人一人の努力もあり、正確性などには個人差はあるものの、全体的にはこのコースで導入された文型の概要は捉えられたのではないかと想像する。文法の導入という授業の主旨から難しいところもあるが、もう少し学習者主体のアプローチ（活動や課題など）を組み込んでみても良かったように思う。学習者の実態をより正確に把握するとともに、持っている能力をさらに引き出せた可能性も考慮できる。

文法2：17名が履修したが、4名がコースの半分以上を欠席しており、毎回10名程度の学生を対象に授業を行った。欠席が極めて多かった4名以外にも、全体的に遅刻や欠席が目立ち、無遅刻無欠席という学生は1名だけだった。コーディネーターが欠席の多い学生には頻繁に連絡したが、改善がみられなかったのは残念である。また、宿題の提出率も低く、遅れて提出する学生が多かった。ただ、授業中は熱心であった。本クラスの目的は、書く練習を通して文法1のクラスで導入された新しい文法項目の定着を図ることであるが、学生達は真面目にワークシートで練習をして文法項目を身に着けようとしていた。クラスの最後に新しい文型や表現を含む文のディクテーションを行ったが、毎回80%以上の得点だったことから、真摯に取り組んでいた様子が窺える。出席率、宿題の提出率の低さが最終成績に大きく影響したが、今学期のような学生達に、きちんと授業に出席し宿題を提出するという基本的な姿勢をどのように身に着けさせるかを今後の課題にしたい。

聴解会話：J2レベルが既習の学生と、そうでない学生が混在していたので難しい部分があったが、なるべくいろいろなペアやグループで会話をするように心がけたので、お互い教え合ったり確認し合ったりしてクラス全体の雰囲気もよくなっていったように思う。新しい文法が定着しないまま聴解会話をするのが難しい部分もあり、少しずつ復習を入れながら進めた。毎学期のことだが聴解

に拒否反応を示す学生も多く、効果的な聴解の練習方法をこれからも考えていきたいと思う。

読解・作文：読解・作文ともに読むこと自体や書くこと自体には熱心に取り組んでいたように思われる。読解については文法・語彙がなかなか定着していない学生に分かれていたため、読むスピードにも差があり、わからない語を読み飛ばしたり、文脈から推測したりするといったストラテジーがない学生もいた。自分の読解ストラテジーが確立している学生もいるため、互いにストラテジーの紹介をするということを行ってもよかったかもしれない。作文については、基本的にはモデル文に沿って書けている学生が多いが、構成を意識せずに思ったままに書いてしまう学生もいるため、文法・語彙や内容だけでなく構成にももう少し意識を向けられるよう指導していきたい。

総合スキル：本コースは全体的に遅刻や欠席が多く、レベル差も大きかった。また、文法・語彙がほとんど定着していない学生も多かった。そのため学期初期は様々な活動を行っていたが、学期中盤からは文法の運用練習・応用練習をクラス内で多めに扱うようにした。理解や産出の難しい文型については復習や学習者同士で教え合うということも行った。ビジターセッションに向けた準備などはそれぞれの学生が工夫を凝らし、実際にボランティア学生を迎え入れた際も積極的に学んだ語彙・文法を使って交流を試みる姿が見受けられた。正確性について課題が残るクラスだったため、大人数のクラスで文法・語彙の定着が低い場合の総合スキルクラスの進め方については検討が必要である。

#### <秋学期>

文法1：今学期の学生は非常に理解力が高く、また、授業前に進出文型の予習をきちんとしてくる学生が多かったことから、導入時にもスムーズに練習へと移行することができた。質問も的確かつ明確で、発言も積極的に行われ、全体に非常に良い雰囲気を進めることができた。授業運営では、J2は、初歩文型から初級後半へと発展する過程のレベルであり、毎回のクラスで導入する文型が多く、活用などが複雑化していくため、各文法項目にかける比重を調整し、学生の負担を軽減できるよう努めた。また、導入の際にはイラストや場面設定をできるだけ提示し、どのような場面で使用するのかという点を意識できるよう工夫した。文型理解は非常に早く、運用能力も高い学生が多かった一方で、活用や助詞などの細部で正確性を欠いたり、日本語文法の基礎で混乱をきたしている学生もおり、クイズやテストでなかなか点数に結びつかないこともあった。今後は、学生自身がそれぞれの弱みに気づき、改善していけるよう、それぞれの学生に合わせた導入や練習方法を考えていきたい。

文法2：学生の学習意欲は非常に高く、宿題やクイズへの取り組み、提出率、クイズの点数の高さ、授業中の集中力等、全体的に素晴らしかった。クラス全体のモチベーションが高かったため、学生同士がお互いに刺激し合い、学びを深められる良い環境を築くことができた。一方で課題として、このクラスの学生はすでに日本語でコミュニケーションを取ることに慣れているケースが多

く、その際に発生する誤用が定着してしまい、それを修正するのに苦勞する場面があった。また、活用の習得状況にばらつきが見られ、一部の学生は活用を覚えきれていなかったり、間違った形で記憶してしまっていた。特に形容詞や動詞の活用においてその傾向が顕著であったため、学期途中から活用の復習を重点的に行ったが、来期に向けては学期の初めから学生の活用の定着度をしっかり確認し、早い段階で指導を行う必要があると感じた。

聴解会話：人数もちょうどよく、レベル的に同じような学生が多かったので、非常にやりやすく、効果的な練習ができたように思う。冬になるにつれて体調を崩す学生が多く、欠席が多くなってしまったのが残念だった。全員あきらめることなく最後までクラスに来られたのでよかったと思う。

読解・作文：非常に熱心な学生が多かった。スムーズに授業が進むため、追加で準備した読解文も扱い、学習者同士で読解ストラテジーを共有するなどの活動も行った。時間をとって読み進める、問題に解答する、全体で精読というサイクルを繰り返したが、緩急をつけて進めたため、学生たちは授業に終始集中して取り組んでいた。作文についても、熱心に取り組み、構成を意識しつつオリジナルの内容を豊かな語彙で記述できる学生が多かった。大きな課題はなかったが、今回のように優秀な学生が多い場合、作文についてはもう少し応用的な内容、難易度の高いタスクも扱えるとよいのではないかと感じられた。今後の課題としたい。

総合スキル：総合スキルの授業では、日本語の運用能力の向上を目指し、ロールプレイ、ゲーム、インタビューなど、さまざまな活動を行った。授業の初めは学生たちが「です、ます調」でのロールプレイしかできななかったが、学期末には「です、ます調」とカジュアルな表現を状況に応じて使い分けることができるようになった。この変化は学生たちの成長を実感させるものであった。授業ではその週に扱った課の文法に合わせた活動をデザインすることが多く、特に即興的なアウトプットが求められる場面を意識していた。一方で、発表などについては授業内で対話活動を行いながら数回の授業にわたって準備を進める形を取ることで、学生たちの考える力を育て、完成度を高める活動も取り入れる必要があると感じた。

## 2024 年度 J2S 授業記録

### コースの概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日を進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞佐々木瑛代、泉大輔

＜秋学期＞瀧澤あゆみ、泉大輔、袁シュ

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 11 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本的活用、語彙 500）を身につけている者を対象とする。J2S コース全体の目標は、接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1,000 に増やすことである。

## 文型リスト

J2S で扱った文法項目は J2 と同様であるので、省略する。

## 授業の方法

週 3 コマを 14 週、計 42 コマで行った。語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使えるようにするための練習を行った。具体的には、1 課～10 課まで、各課を 3～4 コマで学習するというペースで進め、文法を 2～3 コマ、読解と作文を隔週で 1 コマずつとした。読解と作文は、隔週で行い、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

## 結果と課題

### <春学期>

今学期は、クラス内でレベル差があまりないクラスだった。基礎的な活用が苦手な学生はいたが、文型の導入でも意味や使い方がわからない場合は質問をする学生が多かった。また、既習の文型との違いを聞くと、日本語や英語で説明できる学生もおり、クラスメイトもその説明を聞いて理解を進めていた。誰かが説明できると、自然と拍手が起こるようなクラスの雰囲気だった。ペアワークやグループワークでは全員が積極的に話していた。自分の情報を使って話すペアワークでは、習った文法を使いながら、自分の性格やこれまでの経験、生活について、クラスメイトに積極的に伝える様子が見られた。J2S のレベルでは、最初の質問はできても、相手の話を聞いてフォローアップの質問をするのは難しい学生も多いが、今学期はペアワークの度に練習し、学期後半は教師が促さなくとも、ペア同士で会話を発展させることができるようになった。ただし、その課ごとに導入した文型は覚えていて、指定するとペアワークでも会話に使うことができるが、注意を促さないと、会話に集中しすぎて習った文型を使わずに話す場合もあった。また、次の課に進むと、前の課の文型は忘れてしまい、組み合わせでは使えないこともあった。ペアやグループで会話をした後には、レポートさせたり、もう一度同じ質問に全体で答えさせることで、定着を確認した。人数が 11 人とあまり多くなかったため、パートナーから聞いた

内容を全員レポートするなどの活動も定期的にできた。

#### <秋学期>

学生たちは学習意欲が高く、真面目に取り組んでいた。遅刻や欠席も少なく、宿題の提出率も良かった。多くの学生はポイントを素早く理解し、短文作成ができるようになった。導入文型が多かったが、予習もきちんとし、理解の早い学生が多かったので、スムーズに導入、変換練習等に進むことができた。できる限り全ての文型復習ができるよう工夫したが、問題数が多くなってしまったり、特定の文型練習ばかり多く扱ってしまったりと、2日目の文法練習には課題が残る。十分な時間をとって毎回聴解練習ができたので、期末試験の聴解練習においても全ての学生が高得点を取り、自信を持って回答を選んでいた一方で、自動詞と他動詞の区別や、似た文型（「ておく・てある」、「～るとき・～たとき」など）の区別は忘れがちであった。原因として、授業の進行が速かったことと、授業内の口頭練習が不足していたことが考えられる。今後は説明と練習の時間をバランスよく調整し、全員の理解度を維持できるよう心がけたい。

## 2024年度 J3 授業記録

### コースの概要

J3は日本語の基礎を習得している者(1,000語程度の語彙及び初級前半の文法等)、日常生活の基本的活動(買い物や依頼など)が日本語のできる者を対象とした初級後半のコースである。週5日授業が展開され、スキル別(文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル)に学習を行う。

担当者名：<春学期> 鹿目葉子（文法）、高嶋幸太（聴解会話）、沢野美由紀（読解）、  
保坂明香（作文）、瀧澤あゆみ（総合スキル）

<秋学期> 長谷川孝子（文法）、東平福美（聴解会話）、沢野美由紀（読解）、  
保坂明香（作文）、栃木亜寿香（総合スキル）

授業コマ数：週5コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）

受講者数：春学期14名、秋学期12名

使用教材：独自教材

### コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。



聴解・会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

## 文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようとする 3. V-ようとしたができなかった、V-ようとしてもできない 4. Fraction 三分の一、五分の一 5. Review : 条件 Conditional
5	1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ 2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture 3. ～の多く

	<p>4. ～以外、以内、以上、以下</p> <p>5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて</p> <p>6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに</p>
6	<p>1. 受身 Passive Verbs</p> <p>2. Direct Passive Sentences 直接受身</p> <p>3. Indirect Passive Sentences 間接受身</p> <p>4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence</p> <p>5. Compound Particle ② ～によって</p> <p>6. Sentence ending particles 終助詞</p>
7	<p>1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない</p> <p>2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止</p> <p>3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む</p> <p>4. Review : Expression for Cause、 Reason</p> <p>5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて</p>
8	<p>1. 使役 : Causative Sentences</p> <p>2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる</p> <p>3. ～のは～です (emphasizing)</p>
9	<p>1. 使役受身 Causative Passive Sentences</p> <p>2. Causative V-てもらう／くれる／あげる</p> <p>3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる</p> <p>4. ～ことに one's feeling、 emotion</p> <p>5. Noun のこと VS Noun</p>
10	<p>1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる</p> <p>2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions)</p>

## 授業の方法

J3は週5日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合スキルの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1000字程度の作文を書く練習を行った。

また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

## 結果と課題

### <春学期>

文法：教科書に沿って、文法を導入した後、基礎的な練習と文法項目を使った自作問題を利用して文法項目の定着を図った。自作問題を解く際、3つのステップを踏んだ。まず個人で問題を解く、次にペアで文法項目や答えを確認し合う、最後にクラス全体で答えを確認する、というステップである。その結果、ペアで話し合うことで、自分の理解度を再確認できただけでなく、相手に教えるという活動が更に自分の学習意欲につながったと思われる。今後の課題としては、緩急をつけた文法項目の導入方法や学生にとって効果的なフィードバックの方法を考えていきたい。

聴解・会話：タスクリスニング、ロールプレイ、ディスカッションなどのさまざまな活動を通じて練習したのだが、積極的に学んだ項目を使って言語運用しようとする姿勢が見られた。また、インタラクションを取る機会をできるだけ多く設けるように心がけていたのだが、学習者同士で活発にやり取りをすることができていた。今後の課題としては、クラスにいる学生内のレベル差である。発話や聴解が難しそうな学生に対してはレベル調整をしてタスクを提示する、レベルの高い学生にはさらに上の課題を提供するなど、学習者個々人に合った練習を準備し、提供する必要があると思った。

読解：今期はほとんどの学習者がJ3レベルにおける読解の目標をクリアすることができたように思う。文の構造や段落の構成をはじめ、何に注目しながら読めばいいか、設問への答え方など、回を重ねるごとに理解が深まり、よく読み取れるようになっていった。

難しいと感じたのは、読解に苦手意識を持ち、おそらく母語でもまとまった文章にあまり触れていないのではと思われる学習者にどう対応するかという点である。読解が苦手な場合、知らない語彙があるとそこでストップし、読み進められないことがある。そのようなことが減るよう、知らない語彙を調べておくことを全員に課したが、読解への苦手意識を持つ学生のほうがあまり語彙を調べてこない傾向にあり、逆に授業での理解度に差が生まれることとなった。今後は最低限調べておくべき語彙や表現をある程度ピックアップしておくなど考えたい。また、3行程度の短い文を読んで慣れるところから練習を始めるといった工夫も必要ではないかと思われる。

作文：今学期のJ3作文コースでは、文章作成は基本的に宿題とし、クラス時間は背景知識の活性化、ブレインストーミング、意欲づけ、そしてフィードバックに充てた。また、教科書の短文作成にも時間をかけ、学習事項の定着を図った。背景知識の活性化やブレインストーミングの際は、グ

グループで話し合いをさせ、既有知識を説明したり、その概念や用語を日本語に言い換えたりすることで、グループならびにクラス全体で知識と語彙が拡充できるよう努めた。また、論拠や文章構成を考える段階でも、グループ活動を取り入れ、学生が活動後に一人でアイデアと構成をつくれるようになることを狙った。実施は1回であったが、グループで一つの文章を作成する分担作文も取り入れ、その後に発表と質疑応答を行なった。

意欲づけの方法としては、明確な状況設定をし、書く理由と書く対象をはっきりと提示するようにした。また、この課の文章を書くとき、どのような力が身につけられるかといったゴールも示すように心がけた。

学生は学期開始当初より、自分の力で書くことの大切さに気づいていたようである。このため、クラスの準備段階で得た着想や語彙を生かし、多くの学生が自分の日本語で作文を書いていたように見受けられる。表現や語彙に誤りがあっても、日本語で自己表現しようとする姿が印象的だった。大半の学生はこのように課題に真摯に取り組み、フィードバックを生かし改善に努めていたため、学期後半にはある程度まとまった文章が書けるようになっていったが、一方で、一部の学生はなかなか文や文章を作ったり構成立てたりすることができず、ツールに頼る様子が見られた。先述した分担作文は、こうした取り組みへの改善策でもあったが、効果は限定的だったと言える。今後は個別フィードバックの充実はもちろんだが、授業活動や課題内容、伝え方にも工夫をし、考えを文章化できない学生達が日本語で自己表現ができるように支援していくことが肝要である。

総合スキル：総合スキルでは、日本語の総合的な運用能力の向上のために、既習項目をベースにした読解、聴解、会話（簡単なディスカッション、ショートスピーチ練習）、ライティング（短文作成やショートスピーチ原稿作成）活動を実施した。全8回の構成で、前週に学習した新出文法項目をメインとしたロールプレイ活動、またペアワークやグループワークを含む聴解・読解活動、そしてビジターを招きショートスピーチとグループでのディスカッション活動を行った。学生個人の活動（読解での個人の読みの時間、問いに答える時間、ライティング時の文作成時間等）も取り入れた上での、ペア活動・グループ活動を実施することができた。正答のある問題もあれば、そうでない問題もあり、学生間で正答を導き出すための話し合いをし、短文作成の内容チェックもクラス全体で行い、自由にフィードバックやコメントを言い合える環境を提供できた。一方、課題としては、タスクのレベル調整やディスカッショントピックの設定を十分に行う必要があるということである。その理由として、学生間での話し合いやディスカッションに、日本語だけでなく英語が使用されることが多く、学生同士のインタラクションを優先したため使用言語をコントロールすることが難しい場面もあった。学生は相手に伝えたい、共有したい、相手の考えを正確に理解したいという気持ちを持っていたため英語を使用したと考える。したがって、今後はタスクのレベルやディスカッショントピックを改善し日本語の発話が増えるようなタスク作りを行っていききたい。

## <秋学期>

文法：学生たちは、お互いに協力しながら熱心に授業に取り組んでいた。授業では毎回、多くの文法項目や表現を学習したため、一度理解した内容を忘れてしまうこともあった。しかし、他の J3 の授業でも同様の項目を繰り返し学ぶ機会があり、徐々に文法や表現が定着していったように思う。また、普段あまり遭遇しない文脈や英語には存在しない概念については、特に定着に時間がかかる傾向が見られた。しかし、これらの項目についても繰り返し練習を行うことで、徐々に理解が深まっていった。さらに、クラスメイトと協力して学び合い、楽しみを見つけつつ学習を進めたことで、学期の最後までモチベーションを保ちながら理解を深められたと思う。

今後も、学生が理解した内容を繰り返し復習できる機会をどのように提供するかが重要である。限られた時間の中で定着に必要な時間を確保し、それが達成感に繋がるような工夫が求められる。

聴解・会話：聴解会話クラスは、学生たちが大変明るく活発で、日本語で話すことを好む傾向が強かった。新規文法の導入の翌日に行われるこのクラスでは、新しい語彙や文法の定着を目的としつつ、ロールプレイなどの会話練習と聴解練習を半々で実施した。学生たちは文法の正確性に欠ける面があったものの、間違いを恐れず日本語で話そうとする姿勢は素晴らしいものであった。この積極性は高く評価できる点である。今後の課題としては、この前向きな態度を維持しながら、文法の定着をより強化することが必要である。学生たちのコミュニケーション能力と文法の正確性のバランスを取るための効果的な指導方法を検討し、実施していくことが求められる。

読解：今期は 12 名が受講した。日本語力にはややばらつきがあったものの、何も指示をしなくても、自ら課題に取り組む姿勢が見られるクラスだった。

授業では、テキストを読み、設問に答えた後で、グループで話し合いながら答えを考える方法で進めた。読むスピードや理解力に差があったが、学生たちは互いに助け合いながら読んでいた。今回のクラスはとても雰囲気良かったため、特にそこがうまく作用し、読むことが得意ではない学生も委縮することなく意見を述べていて、互いに切磋琢磨できていた。

今回、読解の問題に対する答え方のルールはある程度理解、定着したと言えるが、そもそも母語でもまとまった長さの文を読まなくなってきたようで、年々学生の読解力のレベルが低下しているのではないかと感じている。なぜ読むことが必要であり、このようなクラスで学ぶのかという点を受講生が認識することが最も重要なのではないか。今後はその点も考えて指導を行いたい。

作文：学期開始当初に学生の文章に不正確な産出が散見されたため、誤用を自己分析する活動を取り入れた。その際、恣意的な誤用の選択であると、類型に偏りが生じる可能性があるため、開始順に 10 の表現（または単語）を拾い上げ記述するよう伝えた（開始位置は任意とした）。学生の自己分析は正確に捉えているものと、不正確な推測の両面が見られたが、この活動によって原因を特

定または修正し、正確な産出へと繋げられた学生もいた。今学期もこうした正確性の強化を作文のクラスの目的の一つとして取り組んできたが、期末テストの結果を見ると、効果は限定的であり、活用、語彙選択、表記等に不正確な産出が見られた。今後も作文のクラスでは、正確な運用力が身につくように活動内容を検討し、実施していきたい。

一方で、正確性を重視しつつも書くことへの意欲づけをどう行なうかという点も、作文のクラスの課題である。書く前の準備段階に、当該テーマを学生の現実に近づけられるよう具体的な設定を提示したが、このテーマで自己表現をしたいという意欲を十分に引き出せないことがあった。今後は意欲づけや当該テーマについてのアイデアづくり、構成立て等の検討を、準備段階に時間をかけて取り入れていきたい。また、学生が何を書きたいかに耳を傾けるとともに、現代に求められる書く力とは何かということとの調整を図りながら、作文クラスのコースづくりをしていきたいと考える。

総合スキル：このクラスでは、日本語の総合的な運用能力の向上を目標として、J3 既習文型及び語彙を用いた産出活動を行った。具体的にはロールプレイや1分スピーチ、日本人学生へのミニインタビューといった活動や、既習文型とモデル会話文の確認後、会話文の作成・発表するスキットの活動を取り入れた。また、既習文型を含むタスクを読み、グループでディスカッションする活動を行った。毎回全員が何らかの形で発表する形を取った。最初は慣れない日本語での発表に戸惑う場面も見られたが、回を重ねるごとに上手く発表できるようになった。成果として、既習の文型や表現を身近な場面や話題や文脈の中である程度使用できるようになった。課題として、コミュニケーション活動が多いため、後半になるにつれて授業内でのパフォーマンスが疎かになる者もいた。また、ロールプレイ等の後で講師によるフィードバックも加えたが、発音や助詞のミスなどの細かい指摘をすることで、産出活動への自信の妨げになる恐れもあった。自己やピアによるフィードバックを取り入れ、日本語でのコミュニケーション意欲を向上させるような活動を取り入れていきたい。

## 2024 年度 J3S 授業記録

### コースの概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。

コースの詳細は、以下の通りである

担当者名： <春学期> 栃木亜寿香、任ジェヒ、小松満帆

<秋学期> 長谷川孝子、高嶋幸太、小松満帆

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）
------------------------

履修者数：春学期 9 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

## 文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

## 授業の方法

J3S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースを進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：毎課、読解と作文を 1 コマで扱った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 800~1000 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

## 結果と課題

### <春学期>

全体的に静かな学生が多いクラスであったが、授業中、あるいは授業前後に積極的に質問をするなど、意欲の高い学生が多く、また、授業内課題にも熱心に取り組んでいた。学期後半にはクラスメイト同士で助け合う姿も多く見られ、日本語でのペア・グループワークでも意欲的に話す学生が多く見ら

れ、日本語母語話者とのビジターセッションでも積極的に日本語を使ってコミュニケーションを取る姿が印象的であった。その一方で、自己評価の高さによるものか、クラス活動に積極的に参加せず、指名しない限り活動に参加しない学生もいた。学習意欲の下がった学生をどのようにサポートしていくのか、クラスでの動機づけの方法について、今後の課題としたい。

#### <秋学期>

秋学期は3名という小さいサイズのクラスであったが、全体に穏やかなクラスで、真面目に授業に取り組んでいる様子であった。学生によって得意不得意がかなり異なっていたが、学生同士の関係がよく、協力的に課題や活動に取り組んでいた。学期開始当初は、話すことが苦手でなかなか発言できなかった学生も、学期終わりには勉強した文型を使って話せるようになったという達成感を得ていた。また、きちんと出席している学生は宿題も確実に提出し、予習復習を欠かさず、わからないところは積極的に質問するという自律的な学習態度が身についていた。

学期中盤以降、遅刻や欠席の続く学生が出てしまったが、遅刻することでクイズが受けられなかったり、授業冒頭部分を聞き逃すなどで点数を落としてしまうことになるので、今後、遅刻の多い学生に対し、どのように意識づけをし、きちんと授業に出席できるよう指導していくのかを検討していく必要がある。また、聴解テストで苦戦している様子が見られた。週3日というインテンシブクラスで文型練習に取れる時間が少なく、聴解練習が不足していたことから、日ごろの授業でいかに聴解力を高める活動を増やしていけるかが課題である。

## 2024 年度 J4 授業記録

### コースの概要

J4 は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の4クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせ使用できるようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

### <J4 文法・文型>

担当者名：<春学期>小松満帆

<秋学期>井上玲子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期21名（PEACE7名、大学生の日本語4名、他10名）、

秋学期8名（PEACE2名、他6名）

使用教材：独自教材



## コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

## 文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	Part1	Part2
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受身</li> <li>・自発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～は～つつある</li> <li>・～は～（で／に）さえ～</li> <li>・Vさえすれば／Aさえあ（い）れば／Nさえ～ば～</li> <li>・～とすれば、～（こと）になる</li> <li>・（たとえ／仮に／もし）～としても～</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・使役</li> <li>・使役受身</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～にもまして～</li> <li>・（たとえ／仮に）～にしても～</li> <li>・いくら～にしても～</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尊敬語</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（Vた／A／Nの）まま、～</li> <li>・Vつつ～</li> <li>・～はVなり～</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・謙譲語</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Vことにしている／Vことになっている</li> <li>・～は～ことから～</li> <li>・～は～こととなると～</li> <li>・～は～ことなく～</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～ようにV</li> <li>・～ようにする</li> <li>・～ようになっている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～して、（考えさ／思い知ら）せられた</li> <li>・（無生物主語）が～を～させる</li> <li>・～は～だけではなく、～の問題だ</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Vたばかり／Vばかり／Vてばかりいる</li> <li>・Nばかり／Aばかり</li> <li>・Numberばかり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～からといって、～が必ずしも～わけではない</li> <li>・～ずに～</li> <li>・～のか（どうか）については～</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～が限られている／～を～に限っている</li> <li>・限りがある／ない</li> <li>・V（ない）限り／Nの限り</li> <li>・V（た）限りでは／Nの限りでは</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～原因は～ことにある／～のは～からだ</li> <li>・～と～では～が異なるので～</li> <li>・～や～は～のだから、たとえ～ても～ことはない</li> <li>・～や～は～のだから、もし～たら～</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Nに限って（はずがない）</li> <li>・Nに限り</li> <li>・V（ない）／Nに限る</li> <li>・Nに限らず</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・～は～ので、～ても、どうしても～てしまう</li> <li>・～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう</li> <li>・（無生物主語）が～に～を生じさせる</li> <li>・～たり～たりするだけでは～</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・～は～が～であることを利用して～</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ V よう (か)</li> <li>・ V よう と思う / V よう とする</li> <li>・ V よう がない</li> <li>・ V よう としている</li> <li>・ V よう としない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ～時に、～と / ～ても～</li> <li>・ 私は～て、～ことに気が付いた</li> <li>・ ～ (こと) は～ (のだ) から、もし～なら～</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ N (clause) という N</li> <li>・ N という N / Number という Number</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ～すると、～は～が～は～</li> <li>・ ～する時に重要なことは、～か (どうか) という こと (よりは / ことではなく)、～か (どうか) という (点 / こと) である</li> <li>・ ～ものとして (しまう)</li> </ul>

## 授業の方法

### <春学期>

プレレッスンを含む全 10 課の教科書を用い、毎週 1 課のペースで授業を進めた。授業の流れは、教科書およびスライドを使用して文型の導入、質疑の後、ワークシートにある空欄補充や短作文の練習を適宜行った。その後、教科書の練習問題を使用して、理解の確認および質疑を行った。習った文型を使つての短文作成を毎週の宿題とし、紙面にて提出させ、次回の授業にて返却、フィードバックを与えた。また、中間テストと期末テストも実施した。

### <秋学期>

毎回、翌週扱う課のテキストを授業までに読んできてもらった。授業では、テキストとパワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習問題を行った。そして、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を宿題にした。宿題は、翌週の授業で返却し、フィードバックは、新しい課の練習問題をしてもらっている間に、個別に行った。

## 結果と課題

### <春学期>

今学期は 21 名という大きいクラスであったが、実際には出席しない学生や途中で出席を取りやめた学生もいたため、最終的には 17 名となった。学生によって日本語能力に差があり、クラス全体で同じ活動を進めることが困難なこともあったが、個別に作業させ、フィードバックを行うなどして対応した。また、学生同士が非常に仲が良く、全体的に雰囲気の良いクラスであったため、助け合う姿がたびたび見受けられた。理解が難しい学生も積極的に教師に質問をしたり、クラスメイトに助けを求めするなど、協働できる空間となり、初中級という難しいステップにおいて、よい学びの場となったと感じた。一方で、遅刻や欠席の続く学生や、日本語レベルにより、クラスについてくるのが難しく、意欲が低下したり、そのせいで私語が増えたり提出物が遅れる学生もおり、クラスの意欲が削がれる場面もあつ

た。クラスサイズが大きく、また、日本語レベルに差のあるクラスで、いかに全体の士気を保ち、学生を取り残さないようにするか、今後も課題として考えていきたい。

#### <秋学期>

今学期は、特別外国人学生 6 名と、PEACE プログラムの学生 2 名が本コースを履修した。履修学生は、課で扱う文法・文型を予習して授業に参加し、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていた。このクラスは文法・文型のクラスで、クラス活動は練習問題が主であったため、個人で問題を解く作業が多く、グループでの活動の時間をあまり取ることができなかった。そこで、学生が自由に発言や質問ができるように、机間巡視して個々の学生に声掛けするなどして、クラスの雰囲気作りを心掛けた。また、学生が理解できていない文法項目については、クラス内でフィードバックの時間を設けて説明した。今学期は少人数クラスであったため、学生一人一人に確認しながらフィードバックをすることができた。秋学期は 12 月の授業が終了すると、約 2 週間の冬休みを挟む。授業再開の 1 回目の授業が復習で、翌週が期末試験というスケジュールになっているが、すべての課の復習が十分にできなかった学生もいたようである。学期中からクラスで扱った学習項目の復習を促してはいたが、もう少し具体的な説明が必要だったのかもしれない。履修学生にとって、このクラスで扱う文法・文型項目は難しいと感じる課もあるため、学期の初期段階から試験対策の意識づけを促す授業運営を行っていきたい。

#### <J4 読解>

担当者名：<春学期>武田聡子

<秋学期>武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 19 名（PEACE 6 名、大学生の日本語 4 名、他 9 名）

秋学期 4 名

使用教材：独自教材

#### コースの目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

#### 授業の方法

<春学期>

オリジナル教材のプレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を毎週 1 課のペースで授業を進めた。L9 と L11 を除く課では、毎週、自習の読解の予習（ワークシート）と授

業で扱った読解から語彙を5つ選んで例文を作成して提出するという課題を出し、授業では読解の音読、意味の確認、設問の答え合わせ、筆者の意図や要点について意見交換などを行った。L9とL11は速読を行い、授業中に配布し初見で読解を行った。前週に速読の読解内容の語彙を調べておくことが宿題になっていた。すべての課でクロスリーディング活動を実施し、語彙の確認だけではなく、主要な文型を確認し、時間に余裕があるときは、例文作成も行った。毎回授業の最初に、前週の授業で扱ったリーディングで練習した前週の語彙から10問、正しい語彙を選ぶという小テストを実施した。最後に、総まとめとしてすべてのユニットで学んだ語彙の復習と読解の復習をし、最終日は期末テストを実施した。授業は、教師からの一方通行の授業にならないよう、毎回ペアまたは3人～4人程度のグループで音読、答え合わせ、なぜその答えを選んだのかを説明し合い、その後、全体で確認する際、教員は各ペア・グループを指名し、発表をしてもらうなどした。受け身的な学習にならないよう、心掛けた。

#### <秋学期>

オリジナル教材のプレレッスンからL11まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を毎週1課のペースで授業を進めた。L9とL11を除く課では、毎週、自習の読解の予習（ワークシート）と授業で扱った読解から語彙を5つ選んで例文を作成して提出するという課題を出し、授業では読解の音読、意味の確認、設問の答え合わせ、筆者の意図や要点について意見交換などを行った。4人という小さいクラスであったため、同音異義語の読み物の際には、同じような分野の読み物を追加したり、同音異義語を使ったなぞなどを出したりなど、適宜教材を追加したこともあった。またPadletを活用し、アイスブレイク活動として、訪れた場所の写真を挙げてそこで何をした、どうだったかなどを書いてもらい皆でシェアし意見交換なども行った。L9とL11は速読を行い、授業中に配布し初見で読解を行った。前週に速読の読解内容の語彙を調べておくことが宿題になっていた。すべての課でクロスリーディング活動を実施し、語彙の確認だけではなく、主要な文型を確認し、適宜例文作成も行った。毎回授業の最初に、前週の授業で扱ったリーディングで練習した前週の語彙から10問、正しい語彙を選ぶという小テストを実施した。最後に、総まとめとしてすべてのユニットで学んだ語彙の復習と読解の復習をし、最終日は期末テストを実施した。

### 結果と課題

#### <春学期>

読解授業では、いつも漢字圏と非漢字圏に差が感じられる。今回も、漢字圏の学生は、読むのが早く、クイズもテストも早く提出するが、非漢字圏の学生たちは、時間はかかるものの、テストの結果は決してそれに比例するものではなく、きちんと結果を残すものもいれば、結果が伴わないものもいた。漢字圏の学生で口頭能力がJ4レベルに無い学生が若干名いたが、クイズやテストの結果もそれに伴いあまりいい結果ではなかった者もいれば、努力をし、いい結果を生み出した学生もいた。非漢字圏の学生で、漢字だけではなくひらがなやカタカナの音読スピードが遅く、読解力をかなり心配したが、毎回

きちんと予習をして授業についてこられるよう準備をしていた結果、クイズの点数も伸びていき、期末テストでは期待以上の結果を残した。このように努力でいい結果を生んだ学生もいた。一方、J4 よりもかなり上のレベルの学生もあり、クイズやテストをかなり早く終え、しかし結果も高得点という結果であった。ただその該当学生は、授業態度や出席率もよくきちんと授業を受けていた。しかし、本来の学生の力に合っておらず可能ならレベル相応のクラスに配置されるべきだと思われた。クラスの雰囲気はよく、どのペアやグループになっても協力的に活動に参加していた。ただし、数名はスマホなどで授業とは関係のないことをする学生もいた。そのような学生の注意を引きつけ、授業に自律的に参加させることは今後も課題である。しかし、期末テストでは、期待以上の結果を残したものもいた。授業での態度やコツコツと毎回の課題をこなしていた結果が期末テストに反映されたと言えるだろう。今後の課題は、実力差のある学生達への個別の対応だと考える。

#### <秋学期>

今学期は4名の学生の内、1名が漢字圏、3名が非漢字圏であったが、全員実力は近いものがあり、授業運営する上で、比較的スムーズに進めることができた。漢字圏の学生は、速読と意味の把握は早いですが、音読や内容把握では、他の学生も遜色がなかった。また、一部、遅刻や欠席、宿題を提出しないこともあり懸念されたが、後半に持ち直した。逆に後半失速気味となりパフォーマンスが低下してしまう学生もいた。今期は早期帰国で期末試験を受けられない学生がいたが、平常の課題やクイズなどで成績をつけることになった。期末試験を受けた学生たちは、それぞれの実力を反映した納得の結果であった。今後の課題としては、学期を通して体調を崩したりする学生へのフォローをし、最後まで授業を継続し終了できるようにうまく導いていくことだと考える。

#### <J4 作文>

担当者名：<春学期>井上玲子

<秋学期>藤田恵

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期9名、秋学期7名（PEACE1名、大学生の日本語3名、他3名）

使用教材：独自教材

#### コースの目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけではなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

## 授業の方法

### <春学期>

授業はテキストとワークシートを使用し、1コマ1課のペースで進めた。課に入る前週にテキストを配布し、新出語彙を調べてくることを宿題とした。授業の冒頭では前週に導入した文型で短文作成をするクイズを実施した。授業の前半はワークシートの例文を用いて2~3の新出文型を、PPTを使いながら表現の意味、用法を全体で確認した。その後は、ペア・グループで文型の練習問題をしてもらった。授業の後半は、例文を参考に、各課の作文のテーマに沿ったパラグラフ作成の準備を各自でしてもらった。作文は、翌週の授業で提出させた。添削をしたものを翌々週の授業内で個別にFBをした。

### <秋学期>

教材は今学期に改訂された独自教材を用い、1コマ1課の進度で扱った。毎回、ターゲットに合わせた表現の学習とモデル作文を読み、新規語彙を使った文作成と学習内容に沿った文章（パラグラフィティング）を書く課題を出した。また、学期中に3回長い文章を書く課題を出し、長い文章を書いた後にはピアエディティングの活動を行った。ピアエディティングの後にはリライトをし、教師への提出後に再度リライトを行い、1つの文章を複数回見直すことで完成度を高めることを目指した。

## 結果と課題

### <春学期>

春学期は、特別外国人留学生9名のクラスであった。履修学生は、クラス内での課題を一つ一つ真面目にこなしていき、毎回の作文の宿題もほぼ欠かすことなく提出した。

昨年度もこのクラスを担当したが、昨年度は、テキストとワークシートを授業当日に配布し、クラス内で確認する方法を採用した。しかし、テキストの例文で使われている語彙が履修学生にとって難しかったようで、クラス内では文型の説明の前に語彙の確認をしなければならなかった。そのため、文型の練習やパラグラフ作成の説明の前に、文型の導入に時間を割くことになってしまった。その反省を踏まえて、今学期はテキストを前週に配布し、語彙を調べてくることを宿題とした。また、語彙だけでなく、その課で扱う文型を可能な限り調べてくることを履修学生に課した。履修学生は、事前に予習をしているので、文型の導入の前に理解できているかどうかを確認しながら授業を進めることができた。予習の段階で理解できている項目については、クラスで簡単に確認し、理解できていない項目については、時間を取って詳しく説明した。履修学生の反応を見ながら文型の確認を行ったことで、文型確認の時間を短縮することができ、練習問題やパラグラフ作成の時間を多く作ることができた。

また、今学期もクイズと宿題の作文のフィードバック（FB）を個別に行った。練習問題やパラグラフ作成の時間にFBを行っていったが、時間を取って一人一人に確認しながらFBができたことで、学生にとっても文型理解の助けとなったようであり、教師にとっても学生の文型理解度の把握がさらに可能となった。今後も練習問題やパラグラフ作成、個別FBの時間を十分に確保できるよう、授業の進め方

を工夫していきたい。

#### <秋学期>

秋学期の J4 作文は、7 名の履修登録があったが、実際に学期を通して授業に出席していたのは 5 名であった。学部生と特外生、漢字圏と非漢字圏の両方がいるクラスで、属性も出身もさまざまであったが、クラス全体で協力し合って課題に取り組むクラスであった。

J4 レベルは、中級レベル相当でありながらも初級で学習する項目の復習が必要な学生が配置される。本クラスの履修者もその傾向が見られ、ある程度の中級レベルの表現が既習であっても動詞と形容詞の活用が不正確である学生や、体系的に日本語を学習したことがなく教室で日本語を学ぶことが初めての学生がいた。そのため、クラスの進度をそろえることが難しい場面があり、クラス全体での学習と個別指導とを適宜入れ替えながら進めるようにした。その結果、学生ごとの改善が必要な課題を、学生と教師の間で共有することができ、各自の目標に合わせた指導を学生が納得した上で行うことができた。一方で、コース全体の目標の達成にはやや届かなかった学生がいたため、この点は改善が必要であると考ええる。

J4 レベルでは、学生が持つ日本語学習の課題が複合的になりやすく、進度をそろえた指導が難しい場面もある。今後は、このような学生たちが集まるクラスにおいて、個々の課題を解決しながら、コース全体の目標の達成にも向かえるような授業運営について考えていきたい。

#### <J4 聴解・会話>

担当者名：<春学期>山内薫

<秋学期>小澤咲

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 18 名 (PEACE7 名、他 11 名)、秋学期 9 名 (PEACE3 名、大学生の日本語 3 名、他 3 名)

使用教材：独自教材

#### コースの目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

#### 授業の方法

##### <春学期>

スピーチ・発表 (20~25 分)・会話練習 (40~50 分)、聴解 (25~30 分) の 3 部構成で、学生の日本語力及び理解度に応じて、時間を調整しながら実施した。スピーチにおいては、スピーチ 2 回 (テーマ：

最近の出来事、旅行の思い出を伝える)の後、発表(インタビューのまとめ)を行った。スピーチでは、Formsを用いて他者へのコメントを記入し、相互フィードバック活動を行った。また、会話練習は、テキスト(3課分)に沿って進め、学生が会話文の内容や展開を理解しながら、相手の話に適切な反応ができるように練習を行った。さらに、聴解では、各週のトピックについての背景知識を確認した後、音声を複数回聞き、理解度を確認した。その上で、毎週の宿題として、音声データを聞き直し、宿題プリントの提出及び穴埋めクイズを実施した。なお、聴解は今学期より大幅に内容を入れ替え、コーディネーター教員の作成によるこども対象のニュースを基とする内容を扱った。また、期末テストは、聴解とロールプレイを2週に分け実施した。

#### <秋学期>

スピーチや発表、その準備のための活動(20~25分)・教材を使用した聴解及び会話練習(40~50分)、聴解(25~30分)の3部構成で、1コマの授業で適宜時間を調整しながら実施した。スピーチは学期を通して3回行い、初回は3分間で「最近の出来事」について、2回目は5分間で「旅行の思い出」について話すことを課した。3回目は調査発表で、学生が興味のあるテーマについて立教大学の学生にインタビューをし、結果を分析して報告する内容であった。また、会話練習は、教材『日本語初中級リスニング Alive』を使用して日常的な会話の聞き取りをし、聴解後に内容の確認や話の流れの推測、会話練習を行った。また、聞いた内容に関連したテーマでロールプレイを実施した。

聴解では、各週のトピックについての背景知識を確認した後、音声を複数回聞き、プリントを使用したクラスでのディスカッション・意見交換を通じて理解度を確認した。その上で、毎週の宿題として、音声データを聞き直し、宿題プリントの提出及び穴埋めクイズを実施した。期末テストは、聴解試験とロールプレイ試験を実施した。それぞれに1週を充て、2週に分け実施した。

### 結果と課題

#### <春学期>

学生18名(特外11名、PEACE7名)のクラスであった。特外11名の内1名は初回のみ出席、2名は5回目より連続出席、またPEACE6名の内1名は新学期より連続欠席であったため、学期末まで継続的に出席したのは14名であった。

大変協力的で、学生たちのやる気を感じられるクラスで、全体での活動、ペアやグループ活動など、終始、円滑に行うことができた。また、授業内容や教員の指示において理解ができない点が出てきた学生からは、授業中及び授業前後に積極的に質問が出てきた。加えて、教員からの問いかけにおいては、多くの学生が、率先して発言してくれた。

一方で、クラス内のレベル差が非常に大きく、教員の指示や説明に対する理解度や理解の速度、及び教材やクイズにおける難易度に異なりがあり、授業の活動や進行にも大きく影響した。レベル差に対する対応として、会話練習や聴解においては、教員が先に示した内容の概略や背景の情報などを活用しながら、取り組んでもらった。加えて、本学期においては、各回の宿題を提出する前に学生同士(ペア・グ



ループ)で確認し合うという活動を入れた。当該活動を通し、レベル差を超えた交流が生じ、双方に学習効果が上がったことが窺えた。

期末テストにおいては、皆、一学期間の授業活動での取り組みの成果が発揮された結果となった。課題としては、履修者数の関係で、期末テストにおける教員とのロールプレイが分刻みで実施され、学生によっては十分に表現できずに時間が終わってしまった可能性がある点である。今後、履修者数が多い場合における期末テストのロールプレイの方法を考えていきたい。

#### <秋学期>

特別外国人学生3名、PEACEプログラムの学生3名、異文化コミュニケーション学部の学生3名の計9名で構成されたクラスであった。このうち3名は休学等の事由により一度も授業に出席することがなかったため、授業は実質6名で進められた。

全体的におとなしいクラスであったが、学生たちは出席率および課題の提出率が高く、授業活動に対し積極的であった。きっかけを作るとそこから発話を始めることもでき、積極的に話そうとする姿勢が見られた。また学生たちのスピーチや発表への取り組みも積極的で成果物の完成度も高かった。少人数クラスであったため教員の目が届きやすく、こまめなフィードバックや修正ができたこともその一因であると考えられる。今学期は、学生の母語やこれまでの日本語学習歴等に起因し、得意・不得意が大きく分かれるクラスであった。毎週、聴解と会話のバランスをとりながら着実に練習を重ねていくことにより、聞き取りが苦手だった学生たちも、音声を聞きながら素早くメモをとり答案の形式を整えられるようになったり、発話の際に体裁を整えることが苦手であった学生も、発話の際のテンスや文体の統一に気を配る余裕が出たりと、それぞれの苦手分野において成長が見られた。

今学期は他科目と比較して少人数であったことから比較的細やかな指導が可能であり、それが効果的な学習にも繋がったと考える。次学期からも可能な限り、一人一人に寄り添う指導ができるようにしていきたい。

## 2024年度 「J5～J7 文法・文型」授業記録

### コースの概要

J5～J7の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週1回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5のレベルにおいては、日本語能力試験N2レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6のレベルにおいては、日本語能力試験N2、N1レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験N1レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく

力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

### <J5 文法・文型>

担当者名：<春学期> 小林千種

<秋学期> aクラス：鹿目葉子、bクラス：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 クラス 29 名 (PEACE 2 名、大学生の日本語 6 名、その他 21 名)
秋学期 aクラス 14 名 (PEACE 5 名、NEXUS 2 名、その他 7 名)
bクラス 15 名
使用教材：独自教材

### コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

### 文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions
3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが (に)、やはり (やっぱり)、どうせ、つくづく	

10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方
----	------------------------------

## 授業の方法

### <春学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。文型の導入においては、絵や写真をふんだんに取り入れ、文型の意味や使い方をわかりやすく示すことを心がけた。また、練習も単調にならないよう、ペアワークなどを適宜行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

### <秋学期>

#### (abクラス)

毎週1課ずつ授業を行った。授業では、各課の文法項目を提示し、意味と使い方について説明を行った。文型導入後は、定着を図るための練習問題を行った。練習問題の取り組み方として、個人で考えて問題を解いた後、ペアで各自の答えをチェックし、最後はクラスで正解の確認を行った。毎回の宿題は、学習した文法項目を使って短文作成を行った。

## 結果と課題

### <春学期>

30名と大人数でのクラスで終始にぎやかな雰囲気だった。声かけ等行ったものの、途中で日本語学習自体からドロップアウトする学生が何名か見られた。予習してくることが前提のコースではあったが、学生が予習する気配がなかったため途中で予習していない前提でクラス運営する方向性に切り替えた。課題としては、文法や文型の指導のみならずペアワークやグループワークを通して発話機会を増やすことで運用能力をさらに伸ばしていくような授業作りを心がけたいと思った。

### <秋学期>

#### (aクラス)

PEACEやNEXUSの学生を含め、14名が履修した。学生は真面目で熱心であり、授業にも積極的に参加していた。異なるプログラムの学生と一緒に学ぶことから、練習問題を行う際はピア活動を取り入れた。ピア活動では、お互い助け合いながら文法の確認を行うなど、協調性が見られ、雰囲気も良かった。短文作成の宿題は間違いがほとんど見られず、オリジナリティあふれる文を作るなど、宿題を楽しんでいるようにも思われた。今後の課題としては、似ている意味・用法のある文法項目を教える際、スムーズに理解ができるよう説明の仕方を工夫したい。

(b クラス)

熱心に取り組む学生が多く、参加度や課題の提出状況もよく、疑問点がある場合は積極的に質問してきた。中間テストでは文型の使い分けを正確に覚えていない学生もいたようで、日頃のパフォーマンスに比べると得点が低い学生がいたが、学期末は全体的に点数がよく、文型の使い分けもしっかり理解していることがわかった。ただし、漢字圏の学生の中には、この授業で学習した中級文型は正確に使っていても、活用など初歩的な文法の間違いをする学生がいた。初級文法の正確な運用は今後の課題としたい。

<J6 文法・文型>

担当者名： <春学期> 小林千種  
<秋学期> 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数： 春学期 14 名 (PEACE 2 名、その他 12 名)、 秋学期 10 名 (NEXUS 1 名、その他 9 名)
使用教材：独自教材

コースの目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型を理解する。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由・目的の表現」
2	「感情・心情・評価の文型」
3	「不快・非難・軽蔑の文型」
4	「判断・理性的評価を表す文型」
5	「推察・推量を表す文型」
6	「人や物の状態・性質を表す文型 1」
7	「人や物の状態・性質を表す文型 2」
8	「義務・当然を表す文型」
9	「その他の文型 1」
10	「その他の文型 2」

## 授業の方法

### <春学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。文型の導入においては、絵や写真をふんだんに取り入れ、文型の意味や使い方をわかりやすく示すことを心がけた。また、練習も単調にならないよう、ペアワークなどを適宜行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

### <秋学期>

授業はパワーポイントを使いながら、テキストに沿って1回に1課のペースで進めた。授業では文型の意味、接続の形、注意点、類似文型・表現との違いなどを説明した。例文は、テキストにあるもののほかに、類義表現が多く出てくる課では、その違いがわかるような例文も提示した。テキストの例文の語彙は未習と思われるものは、読み方と意味を確認した。その後、学習した文型を使って簡単な文完成問題の練習をした。毎回、学習した文型を使った短文作成や文完成問題を10文程度宿題にし、翌週フィードバックを全体及び個別に行った。

## 結果と課題

### <春学期>

熱心な学生が多く、クラスの雰囲気はとても良かった。分かりやすい授業を特に心掛けた。一方で、課題も見られた。文型を導入する際は、実際に使えるようになるために、「意味—形—機能」の3点をセットにして提示するように注意して進めたつもりであったが、活用等の知識が十分に定着しない学生も見られた。J6は扱う項目が多いが、学生が理解しやすく、かつ実際の場面で使えるようにするためにはどうすればいいのか、さらに模索し、授業を改善していきたい。

### <秋学期>

履修者10名のうち、1名がNEXUS、そのほかの学生が9名だった。全体的にまじめに授業に臨んでいたが、コースの中盤から体調不良のため欠席や宿題の提出が遅れ気味の学生が多くなった。予習としてテキストを読んできてくることを課したが、予習してくるのは一部の学生にとどまった。学習項目の文型・表現の理解は全体的によく、宿題の短文作成でも正しく使えていた。しかし、中間・期末テストの結果を見ると、文型の定着が十分ではなく、間違いが散見された。今後は予習の徹底と、授業で説明・練習を十分にとれるよう、時間配分等に留意して授業を準備したい。

## <J7 文法・文型>

担当者名：<春学期> 三浦綾乃

<秋学期> 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型や表現を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

## 文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	Lesson 1 「ながら、まま、つつ」
2	Lesson 2 意向形を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
3	Lesson 3 「ところ」を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
4	Lesson 4 「まで」を使った表現／とりたての助詞
5	Lesson 5 「時」を表す文型 1／似ている意味の使い分け
6	Lesson 6 「時」を表す文型 2／まとまりで覚えたほうが良い表現
7	Lesson 7 「時」を表す文型 3／覚えたほうが良い表現
8	Lesson 8 「時」を表す文型 4／覚えたほうが良い表現
9	Lesson 9 複合動詞／覚えたほうが良い表現
10	Lesson 10 副詞の呼応／覚えたほうが良い表現

## 授業の方法

<春学期>

毎週 1 課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用し、文法・文型の意味用法の説明・確認と練習を行った導入では、絵や写真を多く取り入れ、テキストに載っている例文以外にも紹介することで、文法・文型の意味やその文型が使用される場面を学生にわかりやすく示すようにした。また、練習も単調にならないよう、文法・文型を使ったペアワークの会話活動や、Padlet を用いた例文作りなどの練習を行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。授業では、導入よりも練習の時間を長く多くとりたかったので、学生には毎週の予習・復習を徹底するよう指導した。

<秋学期>

授業は1回に1課のペースで進めた。授業ではパワーポイントを使い、テキストに沿って、文型の意味、注意点、似ている文型・表現との違いなどをテキストの例文を使って説明した。5課～8課の「時を表す文型」には類似表現の文型が多く出ているので、違いを詳しく説明した。その後、学習した文型を使って、簡単な文完成の練習をした。毎回、学習項目の文型を使った短文完成問題を宿題にし、翌週共通の誤りについては、全体でフィードバックし、個別でもフィードバックした。

## 結果と課題

### <春学期>

春学期は少人数のクラスであり、学生一人一人の様子が把握しやすかった。学生達は真面目で出席率も良く、予習をしてから授業に参加してくれたため、授業中は練習に比較的多くの時間を割けた。また、少人数のクラスであることで、気軽に発言しやすい環境だったと考えられる。そのため、今学期の学生は意欲的で、文法・文型の質問が盛んであった。授業ではテキストの例文だけでなく、学生が使用場面をイメージしやすいような例文も積極的に導入に使ったが、学生からは「覚えやすかった」と前向きなコメントをもらった。J7の文法・文型は複雑な表現が多いが、それが学ぶ上で高いハードルにならないよう、今後も学生が興味を持って楽しみながら学習できるように工夫していきたい。

課題としては、時間配分が挙げられる。予定表で示していたテキストの内容が授業時間内に終わらないことがあり、翌週の進度に影響してしまった。練習時間を確保しつつも、予定通り文法・文型を導入できるように、効果的な方法を検討したい。

### <秋学期>

全員熱心に勉強に取り組み、出席率・宿題の提出率もよく授業を円滑に行うことができた。宿題の短文作成では、コース開始時は、接続の仕方などの文法や、文作成についての指示に注意を向けずに文を作ることがあり、種々の誤りが散見されたが、回が進むにつれて次第に少なくなっていく。テキストの後半は新しい学習項目や未習の語彙が多くなり、授業内にテキストの最後の部分が残ったり、十分な説明や練習ができないこともあった。この点を今後改善して授業を準備したいと考えている。

## 2024年度 「J5～J7 読解」授業記録

### コースの概要

J5～J7の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5、J6では説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの文章を取り上げ、読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、要約やディスカッションを行なう。J7では、より長い文章を読み、内容理解をした上で要約したりレジюмеを作成したりすることを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

## <J5 読解>

担当者名：<春学期> 黄慧

<秋学期> 保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 22 名（PEACE3 名、他 19 名）、秋学期 14 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

### 授業の方法

#### <春学期>

学期を通じて、説明文、エッセイ、新聞記事の投書、小説など、多岐にわたる読解教材を使用した。学生たちは文章の読み方のスキルを習得し、語彙や表現を増やすための活動に取り組んだ。事前に予習を行い、ペアまたはグループで輪読して内容を理解し、そのうえでディスカッションを行い、意見交換をすることで、深い理解を促した。授業では速読、再話、ジグソーリーディングなど、さまざまな読解方法を試みた。これにより、学生たちは多角的な読解力を養うことができたように思われる。毎回、宿題として語彙リストを提示し、授業の最初には語彙クイズを行うことで、新しい語彙の習得や定着を図った。さらに、予習のための事前課題や語彙リストを提示し、読解授業の内容理解を助けるように工夫した。

#### <秋学期>

秋学期の J5 読解クラスにおいても、コース目標にある読解力を育成するため、ウェブニュース、新聞の投書、インタビュー記事、新書、短編小説、手紙文等の多様な種類の文章を扱った。また、読み物の種類や読む目的に応じた読み方が身につけられるように、読解の前にはその読み物にとって適切な読み方を考えさせ、読む目的と必要なストラテジーを念頭に置きながら読解活動を行なうよう伝えた。このため、授業では精読と速読の両方を取り入れ、必要に応じて、時間制限の中で読む練習や、ツールを使って読む練習も行なった。また、学生個々の読解活動を中心に据え、読む前には背景知識の活性化、読解後には内容質問への解答やクラスメイトへの説明、ディスカッション等を行い、当該テーマについての知識や理解、考えが深められるよう図った。宿題としては、関連テーマの読解と解答、ならびに漢字語彙クイズの準備を課した。クイズは前週の読み物の中から選択して出題し、漢字語彙力の強化にも



努めた。

## 結果と課題

### <春学期>

2024年度春学期のJ5読解クラスは、「大学生の日本語B3（異文化）」6名と「PEACE5」3名を含む、合計22名の受講者で構成されていた。漢字圏の学生と非漢字圏の学生が一緒に学び、非常に熱心に取り組んでおり、学生間の交流も活発だった。クラス活動において自然に競い合いながら学ぶ姿勢が育まれ、活発なディスカッションに繋がった。毎週の漢字語彙クイズにも真摯に取り組み、全員が高得点を獲得するなど、成績も優秀だった。

学生たちは読むスピードが速くなり、斜め読みができるようになり、ペアでの読み合いによって理解が深まった。また、要約力が向上し、多様なジャンルの読み物を通じて語彙力がアップするなど、明確な成果が見られた。しかし、クラス内のレベル差が課題となり、特にJ3から上がってきた学生には教材が難しすぎるというフィードバックがあった。一方で、もっと長く複雑な文章を読みたいというフィードバックもあった。さらに、学生たちからはWeb上の読み物や日本人がよく読む最近の有名な作品をもっと読みたいという要望もあった。

今後の課題として、レベル差のあるクラスでもバランスよく学習できるようにすることが重要であると思われる。また、予習に十分な時間が取れない学生の負担を軽減する方法を模索する必要がある。今後は、より多様なテーマを取り扱い、学生たちの興味を引き出す授業を提供し、全員が成長できる環境を整えたいと考えている。

### <秋学期>

学期開始時、学生の興味やコースに対する期待、日本語での読解における目的と目標を聴取し、そのうえで、本コースを履修する学生にとって必要かつ興味を惹く読み物を、教材として扱うようにした。選択した読み物は比較的難しかったが、学生達は諦めることなく課題に向き合い、学期を通じて課題（語彙の意味調べや内容質問の解答）に真摯に取り組み、授業活動においても積極的に質問をし自身の考えを述べていた。期末テストでは、こうした努力の継続が結果として表れており、多くの学生がテストの内容を正確に捉えていることが見て取れた。また、学期末に実施したアンケートでも、学生から「推測しながら読む読み方を身につけた」「漢字語彙力が伸びた」といった声が聞かれ、学習者自身も読解力や語彙力の向上を感じていることが示された。さらには、言語学習において読むことが重要であるため、今後も継続して読解を続けたいという記述も一部見られた。

一方で、期末テストの記述式解答からは不正確な産出が見られ、クラス活動や課題で正確性を身につけられなかったことが課題として残った。読解のコースに求められる読解力の育成ができたことは、このコースの目標が一定程度果たされたと言ってよいだろう。ただ、読解を通して得た新たな知識や視点、考えの変容の産出は、重要な言語学習の機会である。今後はこの機会を生かし、産出も読解のセッ

トとして捉え、総合的な日本語力が身につくよう学習を支援したい。また、デジタル時代において、従前の読み方とは異なった読み方、ストラテジーが求められている。現代における必要な読解力と何かを考え、教材を選び、課題内容を検討していきたい。

## <J6 読解>

担当者名：<春学期> 栃木亜寿香

<秋学期> 山内薫

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名 (PEACE2 名、他 7 名)、秋学期 6 名 (PEACE3 名、他 3 名)

使用教材：独自教材

## コースの目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

## 授業の方法

<春学期>

説明文、新聞記事、小説など様々なジャンル及びスタイルの読み物を扱い、読解活動を行った。事前課題として読み物に対応した QA と漢字語彙調べを行い、授業開始時に漢字語彙クイズを実施した。その後グループまたはペアで QA の確認をした後、全体で読解文の内容理解の時間を取った。授業では読解ストラテジーの学習や接続詞への意識付けについて取り上げた後、課題と同じトピックの別の記事を初見で読解する活動を行った。その後、トピックに関するディスカッションをした。その他、分担読解の活動及び要約文の作成を行った。

<秋学期>

読解教材として、調査報告、新聞記事、社説、説明文、小説、意見文、新聞記事、及び随想を扱った。毎回、読解教材の語彙調べと読解を予習とし、授業では読解教材の各スタイルに応じた読解ストラテジーを学習した上で、読解文の内容理解を行った。予習においては、読解や設問の取り組み、語彙調べ、要約文の作成などを読解教材により調整した。授業活動としては、各自での黙読や全体での音読、内容確認のための質疑応答、要約や分担読解などを実施した。分担読解は、同一テーマの二種類の読解資料を用意し、二つのグループに分けた上で、まず、各グループで一種類ずつ読解をした。次にグループで情報交換をした後、異なるグループの人とペアを組み、情報交換をするという形式で行った。また、授業開始時の語彙クイズ及び学期末の期末テストを実施した。

## 結果と課題

### <春学期>

登録は9名であったが、後半は特外生1名の欠席が続き、最終的には実質8名の学生が参加した。全体的に非常に仲の良いクラスで、日本語で積極的にコミュニケーションを取り合い、ディスカッションも活発だった。漢字語彙クイズでは毎回高得点であったが、特に継承語としての日本語話者の学生に成績の向上が見られ、口頭での自己フィードバックでは、漢字の苦手意識がなくなったという声が聞かれた。

要約課題では、フィードバックの他、グーグルドライブを用いて他学生の要約文を読み、互いに学び合う環境を作った。分担読解の活動においては雑談にならないよう、必ず2つ以上の質問を課すようにした。

課題としては、学生により興味関心のある教材に差があり、集中を欠くことがあった点である。学生からは自分で選んだ記事を読んで紹介したいという声が多く出た。そこで最終回は学生が社説を選び、ペアを変えながら説明し合う活動を取り入れた。様々なジャンルや文体に触れるという趣旨の元で広く読み物を扱う工夫をしたい。

### <秋学期>

PEACE3名、特外3名の計6名のクラスで、その内、遅刻や欠席が続く学生が1名、また、年末の一時帰国のために欠席する学生が複数名いたが、学期末まで全員が揃い、出席時は皆積極的に授業に参加していた。日本語力にレベル差があり、漢字圏の学生2名は読解や要約をまとめることに慣れており、初見の読解資料を扱う回には常に先に終わり、他の学生たちを待つという状態であった。そのため、途中から任意の課題を増やすなどの対応を行った。当該学生たちにおいては、本クラスのレベルが易しいと感じている様子であったものの、毎回の課題に丁寧に取り組んでいた。本クラスでは、語彙や教材の読解など、毎回の予習が必要であったが、全員が予習にしっかりと取り組んできた。レベル差はあったが、予習がある回においては、学生間に大きな開きはなく、読解内容の確認やディスカッションなど、授業を円滑に進めることができた。

本クラスでは要約課題を3回出したが、担当教員のフィードバックをよく読み込み、次回の要約に生かす様子が窺える学生がいる一方で、重視しない学生がいた。その異なりは、期末テストの要約においても現れた。後者の学生が不真面目であったというわけではなく、当該学生が要約課題自体の意義を見出すことができなかつたことが要因であると考えられる。今後、読解と要約課題の関連性や要約課題の意義などをどのように伝えていけばよいのか、検討したい。

### <J7 読解>

担当者名：<春学期> 富倉教子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名、秋学期 7 名（PEACE3 名、他 4 名）

使用教材：独自教材

## コースの目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

## 授業の方法

### <春学期>

このコースでは今学期論説文を中心とする読解を行いながら、要約やレジュメの書き方などを学んだ。コースの前半は新聞記事の読解、要約やレジュメの作成を実施。新聞記事の社説では授業で大学の図書館にアクセスし、記事を探す方法を学び、実際に当該記事にアクセスしながら読解を行った。後半は様々な論説文や随筆などを読み、それぞれの設問に解答しながら深く内容を理解。履修者 3 名のうち 2 名は非漢字圏の学習者だったため、「読む」時間を少し長めに取ったり、最初教師が一読してから改めて読んでもらったりしながら行った。読解は基本的に 1) 読む前の活動 2) 黙読 3) 読解問題を解く 4) 解答・解説 5) 読み物に対する質問、意見、感想の流れで実施。また後半は期末試験も考慮し、似たようなフォーマットで前回の授業で読んだ内容に関するクイズ（読解問題）を設けた。さらに課題の一部として、各学習者が自由に記事を選び、レジュメを作成し、それに基づいて発表を行った。この課題は記事の紹介、自分の意見／感想、そしてクラスでの内容についてのディスカッション（ディスカッションの質問を提示することも発表の一部）という柱があり、その記事をどれだけ正確にかつ深く理解し、自分なりの意見や感想を持ちそれらを他者に伝え共有できるか、といった日本語のスキルも含め、様々な思考や能力が問われた。

### <秋学期>

さまざまなジャンルにおいて読解ができるよう、新聞記事や随筆、新書、短編小説などの読解文を取り上げ、授業を進めた。授業での読解以外にも、宿題として事前に課題を提示し、自主的に読解をしてきてもらったり、わからない語彙を調べてくるなど読解に必要な語彙力も同時に伸ばしたりもした。

## 結果と課題

### <春学期>

今学期 3 名と少人数ではあったが、いずれも学習に対してモチベーションが高く、授業に熱心に参加

をしていた。毎回の課題にもしっかりと取り組み、要約やレジюмеなども基本的な箇所は正しく捉えられていた。課題としては、やはり「語彙」であったように感じる。不明な語彙に直面した時にどこまで前後の文脈から推測できるか、また単純に「語彙」そのものをどれだけ認識し、使いこなせるかが問われた。それでも根気強く様々なものを読んだことは多少なりとも成果につながったように感じる。またそういった意味でも、全体にもう少し読む量を増やすことは今後の検討事項である。特にコース後半は自由課題の発表に時間を費やしたが、もう少し他の読み物を組み込んでも良かったように思う。一方自由に選択した記事の発表活動では学習者の健闘が伺え、記事を理解しまとめることだけでなく、自分の意見を明確に提示し、さらにクラスでの話し合いが盛り上がるような興味の引く質問を用意していたのには目を引いた。実際にこれらの話し合いは非常に盛り上がり、学習者も紹介された記事に最終的に興味を持つという結果も含め、日本語を使用して様々なトピックについて議論できたことに各自達成感を感じていたようであった。

#### <秋学期>

履修者が7名だったため、ピア・リーディングやジグソー・リーディングなどさまざまな形式で読解を行えた。また、クラスサイズも多すぎず少なすぎない人数だったため、全員とピア・リーディングでき、クラスメイトと距離感も縮められた。

今後の課題としては、読解だけだと単調になってしまうことがあるため、グループ・ディスカッションや本文の内容発表などの機会もより多く設ければ、より総合的な日本語スキルが身につくのではないかと感じられた。

## 2024年度 「J5～J7 作文」授業記録

### コースの概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

### <J5 作文>

担当者名：<春学期>aクラス：長島明子、bクラス：小松満帆

<秋学期>aクラス：黄慧、bクラス：栃木亜寿香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 aクラス8名、bクラス7名、

秋学期 aクラス12名（PEACE 6名、大学生の日本語4名、他2名）、

bクラス9名

使用教材：独自教材

## コースの目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

## 授業の方法

今年度は「テレワークの活用」「教材の配付方法」「学生時代に力を注いだこと」などのテーマで 800 から 1000 字程度の作文を書いたほか、要約やメールの書き方などを練習した。各クラスでは、テーマの導入とクラスメイトとの意見交換の後、構成や表現について学び、構成メモを作成した上で、作文を書くという流れで活動を行った。その後、教師からのフィードバックを受け、リライト活動も行ったが、クラスメイトとのピアチェックやセルフエディティングも取り入れた。課題は、宿題として提出するもののほか、書くスピードを上げるために、インクラスでの作文活動も行った。また、作文を書く際には、タイピングと手書きの両方を取り入れた。

## 結果と課題

<春学期>

(a クラス)

履修登録者は 8 名だったが、コースを終了したのは 6 名だった。学生はまじめに学習に取り組んでいたが、コースの後半になって課題の提出が遅れ気味になる学生が数名出てきた。作文は整った構成で、自分の意見を明確に述べることができ、よく考えて書いたことが窺えるものが多かった。要約も与えられた文章の内容を正しく読み取り、ポイントを押さえて制限字数内にうまくまとめていた。ただ、文法の誤りや語彙・表現の不適切な使用が散見されたので、今後は文法等の復習の時間も設けられるよう、授業を工夫したい。

(b クラス)

履修者は 7 名であったが、途中で出席しなくなった学生が出たため、最終的には 6 名のクラスとなった。意欲の高い学生と、コースの難しさから意欲が低下してしまった学生とに二分されてしまったが、全員が最後まで課題を提出し、あきらめずに学期を終えることができた。今学期は、なかなか新出語彙を使用せず、初級語彙の使用に終始してしまったり、あるいは難しい語彙を使おうと盛り込みすぎ、逆に言いたいことが伝わりにくくなるなど、語彙の使用に課題を感じている学生が多かった。また、書き言葉に慣れず、苦勞する学生もいたが、教師からのフィードバックを真摯に受け止め、努力した学生には改善が見られた。このレベルでは、初級から中級に上がり、語彙が各段に増えることによりストレスを感じ、意欲が下がってしまう学生が毎学期見られるが、そのような学生たちをいかに引き上げるかが課題だと言える。フィードバックの方法など、工夫していきたい。

## <秋学期>

### (a クラス)

この授業では、まずテーマに基づく作文を書くことを通じて、学生たちは自分の意見を論理的に構築し、表現する力を高めることができた。グループワークでは、クラスメイトとの意見交換を通じて、多様な視点を取り入れ、資料の内容や論点についてより深く理解することができた。また、作文の構成や表現方法を学び、構成メモを作成してから作文を書くことで、効率的に文章を組み立てる力も向上した。次に、ピアエディティングや自己エディティングを通じて、自分の作文を振り返り、クラスメンバーからのフィードバックを得ることで、改善点に気づくことができた。講師からのフィードバックを反映させてリライトを行った結果、作文の完成度が高くなり、表現力や文法の正確さにも改善が見られた。全体として、学生たちは作文能力だけでなく、要約技術や表現力、タイピングスキルなども向上したと考えられる。

一方で、このクラスには漢字圏出身や日本語ネイティブのルーツを持つ学生が多く、全体的に日本語の能力は高いものの、細かい文法や表現に関するミスが学期末まで続いた。これに対して、特定の文法や表現に絞った復習と練習を繰り返し行い、学生が正しい日本語を意識できるように指導することが求められる。また、学期後半にはモチベーションが下がる学生もいたため、モチベーションを維持するための工夫も重要であると考えられる。さらに、宿題の提出が遅れる学生がいるため、提出期限前にリマインダーを送ったり、提出を促すチェックポイントを設けるなど、学生が期限を守りやすい環境作りが求められる。

### (b クラス)

受講生は9名であった。作文の内容と構成の確認の後、書き言葉の練習や、誤りが多いコロケーションの修正の活動をした。自動詞と他動詞の区別があいまいな学生も多く、誤りを修正する活動は非常に有効であった。作文の作成について、前半は課題として提出したが、後半は授業内で手書き及びタイプで書く活動を取り入れた。また要約文の作成も扱い、各段落の重要箇所をまとめた。最初は1本の作文を完成させるのに多くの時間を要した学生も、後半には指定時間内に書き終えることができるようになった。書き出す前のブレインストーミングや作文の添削にはピアによる活動を多く取り入れた。その結果、アイデアや語彙・表現の共有をし、知識を高めあう姿が見られた。

上記活動の結果ある程度コロケーション等の誤りも減ったが、期末テストの段階においても完璧に修正されたとはいえない。修正後の定着のための継続的な活動が課題として挙げられる。

## <J6 作文>

担当者名：<春学期>aクラス：小松満帆、bクラス：数野恵理

<秋学期>aクラス：黄慧、bクラス：開講なし

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 7 名、b クラス 6 名

秋学期 a クラス 10 名 (PEACE 3 名、他 7 名)、b クラス 開講なし

使用教材：独自教材

## コースの目標

中級前半修了レベルの学習者がこれまでに学習した文型を使って、レポートや作文を書く力をつけることを目的とする。

## 授業の方法

学期前半は数値を説明する表現を学び、調査報告のグラフを見て結果をまとめ、考察するレポート(1200 字程度)、学期後半は引用のしかたを練習し、資料を読んで考察するレポートを書いた。今年度はテーマを新しくして、L1 では「情報機器の普及によって受けると思う影響」、L2 では「世代別の消費行動」、L3 では「災害時に外国人を取り残さないために」、L4 では「インターネット上での偽・誤情報の拡散とメディアリテラシー教育」というテーマを扱った。それぞれ、テーマを導入し、意見交換をした後で、構成や表現について学び、構成メモを作成した上でレポートを書いた。さらに、チェックシートを用いて自分のレポートを読み返して書き直したり、教師からのフィードバックをもとに書き直したりした。この他、期末テストに備えて、制限時間内に手書きで書く練習も複数回行った。

## 結果と課題

<春学期>

(a クラス)

履修者は 7 名であったが、途中から出席しなくなった学生がおり、最終的には 5 名のクラスとなった。非常に熱心かつ集中力のあるクラスで、教師からのフィードバックを真摯に受け止め、誠実に取り組んだことで、飛躍的に実力を伸ばした学生ばかりであった。今学期の履修者には継承語の学生もおり、日本語で長い作文を書いた経験がなく、書き言葉や漢字に苦労した学生もいたが、あきらめることなく課題に取り組み、大きく成長することができた。実際に、正規科目でも日本語を使ってレポートが書けるようになった等、自信もつけた様子であった。

全体的に落ち着いたクラスであったが、クラスメイト同士声を掛け合い、苦手なところを補足し合う、とてもよい雰囲気クラスであった。作文はともすると孤独になりがちだが、必要に応じて助け合える雰囲気を作ることができ、結果的に実力の向上につながったと言えるだろう。今後も、様々な日本語学習の背景を持つ学生たちに柔軟に対応し、指導していけるよう、さらに授業活動など模索していきたい。



(b クラス)

履修者 6 名のうち 1 名は単位が不要ということで途中から出席しなくなり、後半は 5 名となった。日本語力にかなり差のあるクラスだったが、学生数が少ないこともあり、口頭での個別フィードバックにしっかり時間を取ることができた。どの学生も熱心に取り組み、書き直しをする際も、積極的に質問し、よいものを書こうとする姿勢が見られた。

調査結果のグラフを見て特徴をまとめるという活動、資料を読んで論点を考える活動では、特徴をまとめたり論点を考えたりするのが苦手な学生もいたが、練習を重ねることで、少しずつ力を伸ばしていった。中級では日本語力とともに、分析する力、論理的に考える力、批判的に考える力も必要となるので、よい練習となったと思われる。

<秋学期>

(a クラス)

学生たちは授業に積極的に参加し、ピアエディティングや自己エディティングを行うことで、自分の文章を客観的に見直す力を養い、他者の意見を受け入れる柔軟性も身につけた。このような活動を通じて、フィードバックを反映させ、レポートの内容や文法、表現を改善することができた。また、グループワークやディスカッションを重ねることで、話す力と論理的に考える力も向上した。さらに、手書き作文や原稿用紙の使い方、アウトライン作成の方法を学ぶことで、文章作成の基本がしっかりと強化された。学生たちは学術的な表現や引用の方法も習得し、学問的な文脈で求められる日本語のスキルが向上した。また、グループワークを通じて学生たちは互いに励まし合いながら学びを深めることができた。

授業の課題として、まず学生間の理解度や進捗にばらつきが見られる点が挙げられる。学生一人ひとりの進度や理解度が異なるため、個別対応やサポートが求められる。次に、ピアエディティングの効果的な活用が課題となる。学生同士のフィードバックの質にばらつきがある場合、改善点が不明確になる可能性があるため、フィードバックの質を向上させる指導が必要である。また、ディスカッションに対する参加意欲にばらつきがあり、積極的に発言できていない学生がいるときもある。そのため、全員が意見を出しやすい環境を作ることが求められる。最後に、専門的な表現に不慣れな学生に対しては、段階的な指導を行い、確実に習得できるようにすることが重要である。

(b クラス)

開講なし

<J7 作文>

担当者名：<春学期>長島明子

<秋学期>森山仁美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3名、秋学期 7名（PEACE 3名、他 4名）

使用教材：独自教材

## コースの目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされる レポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

## 授業の方法

### <春学期>

授業はリアクションペーパーの書き方と 1500 字程度のレポート作成を 3 本行った。レポートはタイプしたが、手書きで時間内に 1000 字程度の作文を書く練習も行った。レポートについてはテーマに関連したテキストの課題文と資料を読み、内容についてグループや全体で意見交換をし、テーマへの理解を深めた。その後、各自が資料を探し、論点や構成を考えて構成メモを作成し、レポート作成へと進んでいった。ピア・エディティング、教師からのフィードバックの後、リライトを行った。フィードバックでは全体で共通の間違い等を確認し、個別では、その学生がよくしてしまう誤りを指摘し、意識化するよう促した。

### <秋学期>

秋学期も春学期と同様の方法で進めた。授業では、テーマに関する課題文と新聞等の資料を読み、内容についてディスカッションをし、テーマ理解を深めた後、各自が引用資料を用いてレポート作成をした。

## 結果と課題

### <春学期>

履修登録者の 3 名は意欲的に課題に取り組んだ。ピア・エディティングもお互いのレポートについて活発にコメントを出し合っていた。学生は文献を引用してレポートを書いた経験があり、資料の探し方にも慣れていった。引用のしかた、参考文献リストも概ね正しくできた。コース前半では問いがうまく立てられない、結論部分が足りない、引用がやや多いなどの問題が見られたが、回を重ねるにつれて改善されていった。最終的には、文献を引用してレポートや報告書を書くというこの授業の目標は、達成できたと思われる。ただ、文法や語彙で同じ誤りを繰り返し、なかなか改善できない学生もいた。この点を今後の課題とし、正しい使用が定着するよう授業を工夫したい。

### <秋学期>

秋学期の履修者は7名で、非漢字圏の学生もいたが、語彙力、漢字力ともに高かった。課題提出に関しては、ほとんどの学生が期日を守り、大変熱心に取り組むことができた。ディスカッションでは、学生同士で考えを深め、新たな視点を見つけることができたように感じる。また、レポート表現方法についての質問が多く出たので、それに対応しながら授業を進めた。

コース前半では、構成や見出しのつけ方、引用の仕方、表現方法についての課題があった。しかし、『Master of Writing』などを参考にし、技法や表現を繰り返し取り扱い、練習を重ねた結果、次第に改善されていった。今後は、間接引用の適切なまとめ方や本文のどの部分に引用を導入するのか等の引用箇所について、より意識できるよう指導や練習を工夫していきたい。

## 2024年度 「J5～J7 聴解・会話」 授業記録

### コースの概要

聴解・会話は、J5は初中級、J6は中級前半、J7は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週1回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

### <J5 聴解・会話>

担当者名：<春学期>aクラス：高嶋幸太、bクラス：保坂明日香

<秋学期>aクラス：森山仁美、bクラス：小林友美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 aクラス9名（PEACE2名、他7名）、bクラス9名、

秋学期 aクラス16名（PEACE4名、大学生の日本語3名、他9名）、bクラス15名

使用教材：独自教材、相本総子・宮谷敦美『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版

### コースの目標

初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

### 授業の方法

<春学期>

(aクラス)

発表活動としては、グラフの説明と時事問題というトピックを設定し、それぞれショートスピーチを

行った。また、テキストを用いて聴解やロールプレイなどの練習を実施した。授業の始めには、前の週の復習としてディクテーション・クイズも行った。あわせて、テキストの課が終わるごとに、ミニドラマを作成し、教室でそのスキットを発表した。

#### (b クラス)

J5 聴解会話のクラスでは、ディクテーションクイズ、スピーチ、上記教材を使用した聴解および会話練習を1コマの授業で時間調整をして行なった。スピーチは学期を通して2回実施した。初回は3分間でグラフの説明、2回目は5分間で時事問題について発表することを課した。発表後には当該テーマについてディスカッションを行なった。聴解のクラスは教材の流れに沿って進め、「勧誘」「許可」「提案」の機能を重点的に練習した。また各課の終了時にはロールプレイの会話を作り、翌週のクラスで発表し、その後クラス全体で内容や表現を検討した。3回のロールプレイ作成のうち、2回の授業活動にボランティアが参加し、自然な会話の流れや日本語の表現を学生に提案した。期末試験は、聴解テストとロールプレイテストを別の日に実施した。

#### <秋学期>

聴解は、「勧誘」「許可」「提案」を取り扱った。ウォーミングアップとして、各テーマにある質問をクラスメイトで話し合い、意見を共有した後、CDを聞いて答えを確認した。また、「聞き取り練習Ⅰ」では、CDを聞いて各問題に答え、聞き取りのポイントや重要表現についても説明した。そして、毎回学習した箇所から、5つの文を選択してディクテーションを行った。一方、会話はショートスピーチとして、「グラフの説明」と「時事問題の紹介」を行い、また、テキストで学習した重要表現を使ったロールプレイやミニドラマの発表も行った。宿題として、ミニドラマとショートスピーチの準備を課した。

### 結果と課題

#### <春学期>

#### (a クラス)

グラフや時事問題などについて発表するだけでなく、クラスメイトから多岐にわたるトピックのスピーチを聞くことができ、またさまざまな人とロールプレイをすることができた。今学期においては、ボランティア学生を2度募集したのだが、学生ボランティアがあまり多く集まらず、aクラスとbクラス合同でボランティアとの交流授業をした。その結果、ほかのクラスの学生による発表を聞くこともでき、お互いのクラスにとってよい動機づけになったと思われる。今後も2セクションでクラスが進行する場合は、合同クラスで授業をする機会を適宜設けてもよいのではないかと感じた。

#### (b クラス)

今学期の J5 聴解会話コースは 2 セクション体制で、b クラスには 9 名が配置された。a クラスとは常に連携をとり、授業の進め方や評価等について話し合いをして、クラス間で齟齬が生じないように配慮した。

学期前半は授業活動や課題に意欲的に取り組んでいたが、徐々に一部の学生に意欲の低下が見られ、欠席や遅刻が目立ち、課題の未提出や遅延も見られるようになった。全体的に見ると、会話よりも聴解を苦手としていたようである。

意欲づけのための方法としては、学生の現実に即したロールプレイの実施を試み、従来の教材にあった設定を部分的に変更した点である。効果については今後検証されなくてはならないが、学生の現状に合った練習は今後も取り入れていくとよいと思われる。合わせて、教材についても、修正された新版の使用を引き続き検討されたい。

課題として大きく残る点は、スピーチを聞き手にわかりやすく伝えるための工夫が不十分だったことである。学生には、スピーチをする際は聞き手の理解力を想像し、わかりやすく伝えることが重要であること、そのための手立てについて説明を重ねたが、言葉のリストのサポートや平易な語彙への言い換え、理解確認等がなされず、一方的な印象のスピーチが散見された。学習者にとっては、こうした想像や調整は難しいのかもしれないが、各々が自身のスピーチを振り返り、考え、改善に努めるとよかったと思う。この点、引き続き意義を強調していきたい。

もう一点の検討課題は、ボランティアを交えた活動の内容である。活動を通して自然な表現や語彙を身につけることも重要であるが、J5 のレベルであれば、テーマである時事問題やそれを通して考えたことをボランティアに伝え、話し合いによって考えを深めることができるかもしれない。ボランティア参加の授業活動についても引き続き検討をしていくとよいだろう。

## <秋学期>

### (a クラス)

秋学期のクラスは、16 名が履修登録したが、途中から 2 名の学生がクラスに参加しなくなった。全体的に熱心に取り組んでおり、スピーチや時事問題の発表に関しては、入念に準備して発表に臨む様子が見られた。また、1 回目の発表でフィードバックされたことを 2 回目の発表に生かそうとする学生が多く、学期の中での上達が顕著に見られた。聴解についても、学期当初はディクテーションで正確に聞き取ることができない学生もいたが、練習を重ねるうちによく聞き取れるようになっていった。一方、課題もある。会話練習ではフォーマルな場面とカジュアルな場面での表現の使い分けについても学習したが、スピーチスタイルを一定に保つことが難しい学生が多く見られた。フィードバックを工夫するなど、学生への意識づけの方法を見直していきたい。

### (b クラス)

非常に熱心な学生が多く、活発で明るい雰囲気のあるクラスであった。聴解においては、全体的によく聞き取

れており、使用教材はレベルに合っていたようだ。会話のミニドラマでは、協力的に課題に取り組み、各ペアで様々なアイデアを出し合いながら、会話を作成することができた。発表の際は、上手に演技をしながら会話をし、クラスで盛り上がりを見せた。その一方で、活用や表現の正確さなど、細部に意識が向かない学生もいた。そのため、先学期同様、会話のスク립トを OHC に映して、フィードバックを行った。今後も、正確さが身につくようなフィードバックの仕方について考えてきたい。

## <J6 聴解・会話>

担当者名：<春学期>a クラス：高島幸太、b クラス：小林友美

<秋学期>a クラス：袁シュ、b クラス：小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 6 名 (PEACE2 名、他 4 名)、b クラス 8 名

秋学期 a クラス 7 名 (PEACE3 名、他 4 名)、b クラス 5 名

使用教材：独自教材、瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク、鎌田修他『中級から上級への日本語なりきりリスニング』the Japan Times

## コースの目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話では、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、プレゼンテーションにおいては、アンケート調査を行い、その結果について比較しながら考察を行うことを目標とする。

## 授業の方法

<春学期>

聴解では、隔週でニュース音声を聞きつつ、内容把握をし、最後にクラスで話し合いをするという形式で進めた。会話では、普通体で話している音声を聞き、それを踏まえて、会話練習を行った。また、自身の会話を分析するという活動も取り入れた。ほかにも、毎週ディクテーション・クイズをしたり、課が終わるごとに扱ったテーマに関してミニ発表を実施したりもした。あわせて、賛否に分かれて討論を行うディベートを合計 3 度行った。

<秋学期>

(a クラス)

授業では、聴解練習・会話練習、ミニ発表、ニュースの聴解練習、会話観察練習、ディクテーションクイズ、ディベートを行った。

学期前半は、『日本語なりきりリスニング』の教科書を使い、2週間ごとに1課のペースで聴解練習と会話練習を進めた。毎回、教科書の練習問題に出た音声聴いてくるのが宿題で、それをもとにディクテーションクイズを実施した。ミニ発表は、教科書の練習で扱ったテーマで、ペアになり会話を発表する形で行った。ニュースは、テキスト教材の3本と、生ニュース2本を扱った。生ニュースの授業ではビジターセッションを行い、日本人学部生をクラスに招いて、学生と一緒に聴解練習をした上で、ニュースに関連した話題についてディスカッションを行った。

学期後半は、学生に自分たちの会話やビジターとの会話を録音してもらい、それを観察して振り返る活動を行った。また、ディベートを導入し、肯定・否定・司会などの役割を分担して実際にディベートを体験させた。期末テストはabクラス合同で行い、聴解テストと会話テストの2種類を実施した。聴解テストではニュースの聴解、会話テストではディベート実技を行った。

#### (b クラス)

授業前半は会話練習、後半はディベート活動を行い、それと並行してニュースを使った聴解練習、ディクテーションの宿題およびクイズを実施した。ニュースの聴解練習では、3回は市販教材から抜粋、2回はインターネットニュースを用いて生ニュースを聞く練習を行った。会話練習では友達会話や自然なあいづち、リアクションなどを中心に練習を行い、一部のディクテーション練習を宿題とし、同箇所を用いて翌週にディクテーションのクイズを実施した。また、日本語母語話者の大学生をビジターとして招き、自然会話を録音させ、自らの話し方の観察をさせた。ディベートでは、肯定と否定のグループに分かれ、論拠を示しながら、理論的に話すことを目的として練習したほか、ディベートに必要な司会、ジャッジ、タイムキーパーなどの役割についても学んだ。期末テストでは、ニュースを聞く聴解テストと、ディベートの実技の2つを実施した。なお、後半のディベート活動および期末テストは2セッション合同で行った。

### 結果と課題

#### <春学期>

##### (a クラス)

聴解では、さまざまな教材からニュースを聞き取ったのだが、「スマホアプリの銀行」「羽田空港」など学生にとってなじみのあるテーマで、活発に話し合いをしている様子だった。また、会話練習では、今学期では新たに自身の会話を分析するという活動を行ったが、学生ボランティアとも積極的に会話を楽しんでいる様子が窺えた。

ディベートでは、実技①と実技②で合計3回討論を行った。特に実技②では同じ論題で肯定側・否定側の両方を経験する形式を取り入れたのだが、物事の利点と問題点を両面から論じるという練習ができたので、次回以降もこの形でディベートを進めれば、より論理的に話す練習になるのではないかと感じた。

#### (b クラス)

8名のクラスであったが、欠席が目立つ学生がおり、学期終了時は7名となった。履修者同士の仲が良好で、非常によい雰囲気の中で授業が進められた。本クラスは様々な活動が盛り込まれているが、履修者はそれぞれの活動で、学びを得られたようだ。特に、今学期導入した「会話を観察しよう」では、自己、他者の会話分析を通し、自身の口頭表現能力育成の向上に繋がれたと感じる。また、ディベートでは、論理的な会話の仕方を学ぶことができたようだ。aクラスとの合同授業により、肯定・否定・ジャッジ等の役割を複数回体験することができた点もよかったと思う。ただ、ディベート実技の際、準備したワークシートに目を落としがちで、アイコンタクトや相手を意識した話し方に課題があったため、今後は、活動導入時に強調し、意識付けができよう工夫したい。

#### <秋学期>

##### (a クラス)

学生は全員真面目に取り組んでいた。最初は少し静かなクラスだったが、ペアによる会話練習やミニ発表を通してリラックスできるようになり、雰囲気が明るくなってきた。教科書を扱う授業では、多くの学生は素早くポイントを掴み、音声を理解できた。その上で、会話練習では音声に関連する話題でクラスメイトと自然にやり取りできた。また、ディベートにおいて全員は参加意欲が高く、協力的な姿勢を示した。期末テストのためのディベートでは、積極的にグループワークに参加し、しっかり準備して実技に臨んだ。

一方、いくつかの課題も見られた。学期の前半では、学生間でレベルの差があるため、練習中に他の学生を待っている間、別の作業をしていた学生がいた。そこで、全員の授業への参加意欲を維持するために練習内容を調整した。また、普通体での会話には自信がある学生は、丁寧語に切り替えると不慣れになり、フォーマルな場合で多様な表現を使うことが難しかったという状況が見られた。最後に、会話観察の練習では、練習の目的とメリットが十分に伝わっておらず、参加意欲が低い学生もいた。今後は、普通体と丁寧語の使い分けや、各種タスクの目的や重要性を明確に説明し、授業の進行や練習方法を工夫していきたい。

##### (b クラス)

5名という小さいクラスであったが、学生同士の関係が非常によく、お互いに認め合い、サポートし合うことで、相互に成長する、とてもよいクラスだった。クラスの雰囲気がよいことで、質問や発言が活発に行われ、適宜話し合いをしながら進めていくことができた。また、教員のコメントや指導を真摯に受け止め、次にはそれを改善しようとする前向きな姿勢が見られた。

コースの前半は話し言葉、後半は堅い表現を使ったディベート活動を行ったが、それぞれに得手不得手があり、カジュアルな話し方になかなかシフトできない学生や、堅い表現を話し慣れない学生もい



た。しかし、それぞれが自分の弱点に気づき、そこに意識を向けて練習に取り組むことができた。一方で、課題としては、学期の途中でカジュアルな会話練習からディベートという堅い活動へのシフトの仕方が挙げられる。何を目的に活動を行っているのかをより明確に提示し、学生が混乱せずに、スムーズな学びと練習が行えるよう、指導に工夫が必要である。

## <J7 聴解・会話>

担当者名：<春学期>山内薫

<秋学期>平山紫帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名、秋学期 7 名

使用教材：独自教材、生教材、荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤真理子『日本語超級話者へのかけはしーきちんと伝える技術と表現—上級から超級へ』スリーエーネットワーク

## コースの目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

## 授業の方法

<春学期>

授業は聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解においては、社会問題に関する動画から、新型コロナウイルスの影響を受け変革した冷凍食品開発業界、産業再生機構、カップラーメンの開発、訪日外国人に対する新たな攻略という 4 つのテーマを視聴した。なお、DVD の順序はテーマの親密度の軽重及び内容の難易度を考慮した上で決定した。また、DVD 視聴前には、配布した語彙リストを活用しながら、内容把握と語彙や表現の確認を行い、視聴後は、課題として内容要約と意見文の提出、及び全 6 回の語彙クイズ（ディクテーション、語彙の読み、語彙を用いた短文作成）を実施した。一方、会話においては、他者に伝わるような表現や展開を学んだ後に、各課のテーマと構成に基づいたプレゼンテーションを行うことを課題とした。期末テストは、プレゼンテーションと DVD の内容要約・意見文を 2 週に分けて実施した。

<秋学期>

授業の前半に聴解、後半に会話という 2 部構成で進めた。聴解では、経済や社会問題がテーマの動画を視聴した。今学期は、未活用資源の有効活用、インバウンド観光事業の取り組み、スポットワー

ク、カップラーメンの開発という4つの内容を取り上げた。授業では、まずキーワードを語彙リストで確認し、動画を視聴した。そして、内容の確認を行った後、グループに分かれてディスカッションを行った。また、翌週には前回視聴部分の語彙クイズを行うとともに、各テーマが終わるごとに、内容の要約と意見文の提出を課した。会話は、教材を使用して語彙や表現を確認し、ロールプレイとプレゼンテーションを行った。

## 結果と課題

### <春学期>

3名のクラスであったが、活発に意見を交換し合うことができ、常に活気のあるクラスであった。3名とも、期限通りに課題提出があり、出席率も大変よく、体調不良以外の欠席はなかった。

聴解と会話の難易度も3名とも合っており、問題なく理解できているとともに、新学期から学期末に向けて、3名それぞれに日本語力の上達が見られた。また、6月末に一度、学生ボランティア2名を交えたディスカッション活動を行ったが、通常の授業とは異なる緊張感と満足感を得られた様子であった。

2回のプレゼンテーションにおいては、3名とも主体的に準備に取り組み、それぞれの興味関心を通じた深いテーマでの発表ができていた。加えて、2回目の発表では、1回目の発表後に渡した教員からのフィードバックを生かすことができ、3名とも、聞き手に配慮した工夫が加えられていた。今学期の学生は自律的に課題に取り組む学生で、また、積極的に意見を出せる学生であったため、少人数でも円滑に授業活動を進めることができたが、今後も学生の様子をみながら、学生ボランティアの参加の機会やDVDの内容などを検討していきたい。

### <秋学期>

明るく熱心な学生が多く、終始和やかな雰囲気の中で進めることができた。学生たちは自分の意見を明確に述べるだけでなく、他者の意見にも真剣に耳を傾ける姿勢があり、毎回、意義のあるディスカッションが展開された。日本人学生ボランティアが参加した際も、積極的に意見を交わしながら理解を深めることができていた。

一方で、聴解の生教材の選定には課題があった。今学期は学生の関心やトピックのバランスを考慮し、テレビ番組を4本視聴したが、テロップの多い番組とほとんどない番組が混在し、難易度の差が大きくなりすぎてしまった。今後は、難易度を段階的に上げながら、無理なく着実に聴解力を向上させられるよう、より慎重に教材を選定していきたい。

## 2024年度 J8 授業記録

### コースの概要

J8は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える

学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

## <日本の社会と文化A>

担当者名：<春学期>長谷川孝子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期10名

使用教材：独自教材

### コースの目標

社会問題、芸能文化など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

### 授業の方法

今回のコースでは、次の3つのトピックを扱い、それぞれに関連する動画を視聴した。

1. 観光：知恵泉『江戸の観光大作戦！仕掛け人のプロデュース戦略とは？』
2. 働き方：ガイアの夜明け『令和流・・・次世代の育て方』
3. ポップカルチャー：カンブリア宮殿『秋元康 激流を攻略せよ』

各トピックについて、まずビデオ視聴を行い、その内容を理解した後、小グループでの活動を展開した。グループ内でテーマと問いを決め、各学生が興味のある資料を読み、グループ全体で1つの発表としてまとめた。

トピック1およびトピック2では、各グループに1名の授業ボランティアが加わり、小グループ内での発表を行った。最終プレゼンテーションでは、全体へ向けての発表を行った。発表では授業ボランティアが参加し、コメントやディスカッションを通じて貢献してくれた。

### 結果と課題

各テーマについて、学習者自身が問いを立て、答えを見つけるために資料を読み、発表するという過程を繰り返した結果、情報検索力や思考力が向上したと思われる。特に、発表内容の一貫性に気を付けるようになり、発表の質が高まった。また、教師や授業ボランティアからの指摘を発表に反映させることで、回を重ねるごとに日本語での表現力も向上した。

すべてのトピックにおいて、グループでの活動を中心に展開したが、無理のない計画だったため、全員が協力し合って進めることができた。また、各学生の興味を探りながら授業を進めたことも、良い結果に繋がった理由の一つだと思う。今後も、協力することの楽しさを感じられるよう、引き続き授業の工夫をしていきたい。

## <日本の社会と文化B>

担当者名：<秋学期>山口紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 13 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

時事問題など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

### 授業の方法

日本社会の時事問題を取り上げ、それに関するニュース映像を見て、内容をまとめたり、グループでディスカッションをして理解を深める。その後、関連するテーマでグループ・プレゼンテーションを複数回行い、日本語で発信する力を鍛える。またその際は客観的数値データの引用を求める。最後にまとめとして、学期中に扱ったトピックから一つを選んで個人プレゼンテーションを課す。

今学期は①社会②経済③政治④科学技術の4つの分野に着目し、それぞれのトピックとして①オーバーツーリズム問題、②起業家の社会的責任、③国民が政治に期待すること-政治はそれにどうこたえるか、④私たちの思い描く理想の未来-今後求められる科学技術-、を取り上げた。

### 結果と課題

各トピックは3週にわたって取り扱った。まず第1週目にトピックに関連するニュース映像の視聴とワークシートを用いた内容理解、グループディスカッションを行った。2週目にディスカッション内容をクラス内で共有したのち、ペアやグループに分かれ、各チームの発表準備に充てた。3週目はグループ・プレゼンテーションで、事前課題としてレジュメとスライドの提出を課した。

人数が多く、発表に時間がかかり、その後のディスカッションの時間は十分にとれなかった。また授業内での準備作業の時間もかなり圧迫され、多くは授業時間外の課題となった。

最終プレゼンテーションを含め5回の発表は忙しすぎるのではないかと心配したが、最終授業での振り返りによると、授業の進度・難度・課題の分量については適度だと感じている学生がほとんどだっ

た。ただし、発表を減らしてディスカッションに時間をかけたいという意見も少数ながらあった。この点は履修者数により臨機応変に対応すべきだと思う。

この授業を受講したことにより、ニュースを聞き取る力・プレゼンテーション力の向上に加え、深く考える力が成長したと答えた学生がとても多かったのは成果である。全員が「授業目標は達成した」と評価した。

今後の課題として、グループワークの得意でない学生と、チームメンバーとのフォローをどうするかということがある。「チームメイトと協働できる」ということを授業目標の一つに加え、授業開始時に学生に周知し意識させる必要があると考える。

## <日本の社会と文化C>

担当者名：<秋学期>小林友美

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 13 名
使用教材：独自教材

### コースの目標

日本の企業風土、日本的経営、日本式サービスなど日本での就職に関心がある学生にとって有用なトピックをとりあげ、それらの知識を獲得すると同時に、高度な文型や語彙を増やし、日本語による受発信力をつける。

### 授業の方法

授業の方法 「日本の企業風土」「日本的経営」「日本式サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

### 結果と課題

今年度の履修者は 特別外国人留学生 6 名、正規院生 3 名、正規学部生 4 名の計 13 名が履修したが、自己都合で履修を取り消した学生が 1 名いたため、実質 12 名で授業が展開された。今回は、J8 レベル以外に J6、J7 レベルの履修者もおり、日本語レベルや所属、専門分野が異なる履修者間で双方向の様々な学びがあったように感じる。特に、ビジネスデザイン研究科の履修者からは、専門的な視点から意見や質問があり、他の履修者により刺激になったようだ。しかしながら、研究科の授業が忙しくなったという理由で内 2 名の欠席が多かった点は残念であった。大半の履修者は、出席率、課題提出率が良好であり、熱心に授業に参加することができた。レジュメ作成の未経験者もいたが、クラスメイトとの活動や教師のフィードバックを通し、回を重ねるごとにコツを掴んでいったように感じる。全体的に積極性には欠ける雰囲気であったため、今後は、主体的な学びを促せるような工夫をしていきたい。

## ＜社会の中の日本語 A＞

担当者名：＜春学期＞任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 25 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

社会言語学的側面から日本語の多様性についての理解を深めるとともに、大学での学びに必要な日本語運用力を向上させる。

### 授業の方法

配慮表現や若者ことばなど、日本語の特徴的な側面を取り上げ、論文を読んだり複数の事例に触れたりした後、ディスカッションしながら、理解を深めていく。また、学んだ語彙や表現などを使用した文章の作成などを通して、より高度で自然な日本語運用能力を身につける。最後には、テーマに関するトピックについて自分で調べたものをプレゼンテーションし、さらにレポートにまとめる。

### 結果と課題

今学期の受講生は正規学部生 20 名、正規大学院生 1 名、特別外国人留学生 4 名で、25 名の出身は主に中国、台湾、韓国であった。

今学期は本コースの目標である「日本語の多様性に対する理解」と「大学での学びに必要な日本語運用力の向上」のために、敬語、配慮表現、若者ことば、擬音語・擬態語という 4 つのテーマを取り上げ、教師による説明だけでなく、論文読解やディスカッション、プレゼンテーション、アンケートならびにインタビュー調査の実施など、さまざまな活動を取り入れた。本コースは特に学部留学生にとっては初年次教育で身につけたプレゼンテーションの仕方や日本語文章の作成方法などを振り返り、復習する場としても位置付けられているため、各活動において、そのような練習ができるような活動も取り入れた。なお、初回のオリエンテーションにて、受講生にはさまざまな教室活動に主体的、積極的に参加することが求められることを伝えた。

その結果、学期のはじめに、グループ活動に参加するのが苦手だと言っていた受講生や、正しい日本語の使い方は 1 つのルールを暗記すれば解決すると思っていた受講生の授業態度や日本語学習に対する意識に変化が見られた。グループ活動が苦手だと言っていた受講生は、他の受講生が日本語の間違いを恐れず、主体的にさまざまな活動に参加する姿に勇気づけられ、学びのプロセスを楽しむようになったと言っていた。また、正しい日本語の使い方のためにはルールの暗記が最も大事だと思っていた受講生は、学期中に日本人ボランティアに実施した敬語や若者ことばの使用意識に関するインタビュー調査か

ら、コミュニケーションを行うときの状況や相手との関係などを考慮し、適切だと思われる表現をその都度判断していくのが重要だという気づきを得たと言っていた。また、さまざまな選択肢から、適切だと思われる言語表現や非言語表現を選択し、自己表出できる人になりたい、とも言っていた。このように、受講生は本コースの多様な活動を通して、日本語に対するさまざまな捉え方に触れ、さまざまな気づきを得たと思われる。

ただし、個人で練習問題を解くことには積極的に取り組んでいるが、ペアやグループ活動には学期末までなかなか慣れない受講生もいた。このような受講生に教師がどのように介入をしていくべきかについて、今後さらに検討を重ねていく必要がある。

## <社会の中の日本語 B >

担当者名：<秋学期>袁シュ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 10 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

役割語、インターネットの日本語など、社会言語学的側面から日本語についての理解を深めるとともに、日本語による受発信力をつける。

### 授業の方法

今学期は若者言葉、メールと SNS の文体、呼称語、役割語の 4 つのテーマを取り上げた。授業ではそれぞれのテーマについて講義を行った後、以下の活動を実施した。

- ① 異文化比較に関する話し合い
- ② 日常生活における日本語を観察して発表する活動
- ③ 論文または新聞記事の批判的読み

若者言葉の授業では、日本語と学生の母語の若者言葉を比較した上で、留学生による若者言葉の使用や、若者言葉に見られる仲間意識について意見交換を行った。メールと SNS の文体の授業では、SNS における誹謗中傷の事件に関する談話番組の抜粋を見て、SNS のマナーについて議論した。宿題として、実際に教員宛に依頼のメールを送付する練習を行った。呼称語では、日英対照の談話番組の抜粋を見て意見を交換した後、映画『すずめの戸締り』の日本語字幕と英語字幕を確認し、呼称語の異同を分析した。役割語の授業では、日本語と学生の母語の役割語を比較した後、アニメや小説に登場する典型的なセリフを翻訳するグループ活動を行い、その感想をクラスで発表した。

期末テストとして、授業で取り上げた 4 つのテーマから 1 つ選び、学生自身の興味をもとに問いを立て、パワーポイントを使って研究構想を発表した。期末レポートでは、発表内容を文章化し、発表時の

質疑応答で得た改善点もまとめることを課した。

## 結果と課題

履修登録をした学生は10名だったが、そのうち1名は途中で出席しなくなり、期末テストにも参加しなかった。他の9名は、終始真面目に取り組んでいた。グループ活動では、学生たちが積極的に異文化体験や日本語・韓国語・中国語の異同について議論し、いつも熱心に意見を交換していた。少し静かで口数が少ない学生もいたが、教員から質問すると、深く考えており、興味深い意見を持っていることがわかった。特に、日常生活における呼称語や役割語を観察して発表する活動と、期末の最終発表では、全員が興味深い内容を紹介し、鋭い問題意識と思考力が伝わってきた。

一方で、課題も見られた。欠席や宿題の遅れ提出が続いた学生には早めに声をかけて対応したが、サポートの仕方を工夫していきたい。また、授業での発言において、少し消極的な姿勢が見られた学生もいた。教師が介入して励ましたが、今後は学生のモチベーションを高め、主体的に参加してもらえよう授業運営を改善していきたい。さらに、深く考えているものの、発表やグループ活動では分かりやすく伝えることができず、悩んでいる学生もいた。今後の対策として、より早い段階で発表の仕方やグループ活動の参加方法などを具体的に紹介することが考えられる。

## <論文読解の技法>

担当者名：<春学期>（池袋）小林友美、（新座）保坂明香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）6名、（新座）1名

使用教材：独自教材

参考教材：浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、1997

## コースの目標

様々な分野の学術論文を読み、日本語の学術論文の構成をつかむとともに、論文で用いられる様々な表現を理解することに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

## 授業の方法

（池袋）

初回到論文の基本的な流れや構成要素を確認し、第2回には、自分の専門分野の学術論文を担当論文として紹介した。授業では、「序論」、「本論」、「結び」、各部の役割や要素、表現を確認し、練習問題をした後、共通論文と担当論文を分析した。各回で、「担当論文シート」をまとめ、ペア・グループで共有、ディスカッションをした。本クラスでは、クラスメイトの担当論文を交換してコメントをする読解活動を2回実施した。最終課題として、担当論文についての詳細なレジюмеを作成し、口頭発表と質疑



応答を行った。

(新座)

毎回の授業では、論文読解に必要な表現および言葉を、序論、本論、結び、先行研究、引用、研究方法の論文を構成する部分に分け、導入し、運用練習を行った。また、実際の論文を見ながら、構成や表現を確認した。

それと並行して、学生が自分の専門分野に関係のある担当論文を1本選び、それぞれ構成や内容、表現等を読み取り、レジュメを作成した。最終発表では、そのレジュメを用いて、担当論文の内容を報告した。本クラスは履修者が1名だったため、担当論文以外にもう1本論文を読み、同様の流れをとった。

## 結果と課題

(池袋)

履修者は6名で、1名は自己都合により不履修となったため、実質5名のクラスであった。2年生から4年生の学生達で、学部も様々であり、内1名は大学院進学希望者であった。

出席率、課題提出率がよく、各課題に熱心に取り組む学生達であった。全員、専門分野が異なったため、担当論文の分野が様々であったが、クラスメイトの論文に関心を示し、相手を尊重しながら読解活動やディスカッションをする姿が印象的であった。また、レジュメ作成では、書き直し作業を取り入れたことにより、レジュメの書き方や情報の選択が改善され、効果的な練習になったようだ。最終発表では、専門の異なるクラスメイトが理解できるように発表準備をするよう指示したが、説明を補足したり、用例を用いて発表することができた。今後の課題としては、担当論文の選定の仕方が挙げられる。担当論文の中には、担当論文シートの項目に当てはまらないものや、授業で扱う表現が少ない場合があった。論文によっては、そのようなことがあることは都度、説明していたが、本クラスは分析活動が主であるため、論文の候補を複数用意してもらい、その中から分析を前提とした論文の選定をする必要を感じた。

(新座)

履修者が1名であったため、学期中は終始、学生のペースに合わせて授業が進められた。当該学生は日本語で書かれた論文を読むための語彙力、読解力を備えていたため、担当論文の読解とレジュメ作成、修正、発表後に、やや難しい内容の論文読解に挑戦したが、作成したレジュメからも、その文献に対する十分な理解がうかがえた。一方で、漢字の読みが不正確なことがあったため、その点において注意をするように伝えた。

教材は論文の構成に沿って計画的に用意されていたため、今学期も過去の教材を踏襲する形式で流れに沿ってコースを進めた。学生はこれまで、論文を構成する要素やそれぞれの要素で用いられる表現についてあまり意識をしてこなかったが、授業を通して意識化されたと述べていた。教材の内容は学生の必要性に一致していたと言えるだろう。

課題として挙げられることは、履修者が1名だったことにより、相互の学びがなく、他分野の論文に触れる機会が限られていた点にある。履修者が少ない場合は、教員が様々な分野の論文を紹介することが重要であるが、ボランティア参加型の活動を取り入れもよいかもしれない。例えば、ボランティア学生から現在読解または作成している論文の説明を受ける、履修生が発表する際に質問やコメントを述べてもらう、論文検索や活用の方法を聞く、大学にあるライティングサポートについて情報交換をする等である。履修者が少ない場合の活動について検討し、このような状況においても、同等の学習効果が狙えるよう授業活動を考えていきたい。

## <論文作成の技法>

担当者名：<秋学期>（池袋）平山紫帆、（新座）開講なし

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期（池袋）3名

使用教材：浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版，1997.

北原保雄監修（独）日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計画作成法』凡人社，2009.

## コースの目標

卒業論文や学術論文など、レポートよりも長く学術的な論文の書き方について学ぶことに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

## 授業の方法

学期の前半では、モデルとして設定した論文を使用して、学術論文の構成や型、表現について分析した。そして、各自の専門分野や関心に合った論文を探し、同様に分析する活動を行った。分析結果は適宜クラスで発表し、意見を述べ合う活動を行った。

後半は、各自が設定した研究テーマに関する研究計画書を作成した。授業では、まず研究テーマについて考え、先行研究を収集し、研究課題を設定して研究目的や動機・背景、研究意義を書くというように、段階的に進めていった。学期末には、各自が作成した研究計画書をクラスで発表し、ディスカッションを行った。

## 結果と課題

今学期の履修者はわずか3名であったが、どの学生も熱心で、授業や課題に積極的に取り組んでいた。このコースでの学習を通して、論文の書き方に関する基礎知識は十分身に付いたと思われる。一方で、今学期の履修者の中には、その学生が所属する学部の授業の特性上、レポートを書いた経験がほとんどない学生がおり、授業を進める中で、アカデミックライティングの基本について説明や確認を

しなければならないことが度々あった。学生の知識や経験に大きな差がある場合に、どうすればどの学生の学びも深めていけるかを、今後はさらに考えていきたい。

また、今学期も履修者から専門的な内容に関するアドバイスを求められることがあった。内容に深く関わる部分については専門の先生に相談することが必要であるが、学生の中には、相談できる先生が身近にいない学生もいた。こうした場合の対応や、論文作成の「技法」と内容とのすみわけをどうするかは今後の課題である。

(新座)

開講せず

### <キャリアの日本語A>

担当者名：<春学期> (池袋) 沢野美由紀、(新座) 和田晃子

<秋学期> (池袋) 鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 (池袋) 12 名、(新座) 2 名、秋学期 (池袋) 7 名

使用教材：『立教就職ガイド 2026』

『外国人留学生のための就活ガイド』

(参考資料『外国人留学生のための日本就職オールガイド』)

### コースの目標

日本の就職活動の全体の流れや要点を理解するとともに、エントリーシートの書き方（効果的な構成、適切な文体や語彙等）、面接で求められる日本語（適切な応対、マナー）など、実質的な日本語スキルの獲得を目指す。

### 授業の方法

<春学期>

(池袋)

日本での就職を希望する学生を対象に、就職活動の流れを説明したうえで、自己分析や業界・企業分析の方法、エントリーシート、履歴書の書き方、面接のポイントの順に実践的なスキルを磨いた。毎回これらに関する課題に取り組み、クラスメイトや教師のコメント、フィードバックを受けて書き直す作業を行った。それらに加え、年々時期が早まっている現状を知るため、就職に関する新聞記事も積極的に紹介した。

また、現在の就職活動や企業の状況について、ゲストスピーカーによる講義をお願いした。

(新座)

日本で就職を希望する学生に、就職活動の流れを伝え、自己分析、業界分析、エントリーシート、志望動機などのトピックで学習し、さらに面接練習を実施した。毎回授業内容を課題にし、時間をかけて再び取り組めるようにした。また、事前に質問内容をお伝えした上でゲストスピーカーをお招きし、現在の就職活動の状況や留意点を教えていただいた。

#### <秋学期>

スケジュールの内容にそって授業を進めた。授業では内容説明だけではなく、就職活動に関する情報も提供した。また、授業内容の理解を深めるためにシートやビデオを使用したり、ペア活動なども取り入れた。さらに、各学生に合わせた宿題のフィードバックをし、最後の授業では、実際の就職面接を意識した面接試験を行った。

### 結果と課題

#### <春学期>

##### (池袋)

今期は12名が履修、約半数は就活に関する知識をあまり持ち合わせない状態からのスタートだった。留学生用の資料を用いながら、自己分析やエントリーシートの書き方など、どのように進めればいいのかを紹介したが、何をどうアピールするかを始め、日本と自国の文化的な違いに戸惑っている学生も見られた。毎回の課題を互いに確認したり、意見交換をすることにより少しずつ就職活動への理解を深めて言っていたが、考え方が変わり、真剣に課題に取り組む学生が増えたのは、ゲストスピーカーの講義がきっかけだったと言える。企業が求める人材や企業選びのポイントなどについての話を聞いたことで、自分たちがすべきことが明確になったようであった。

今回の反省と課題としては、全体的に受身で、最初のころはなかなか発言する学生がおらず、意見交換が活発に行われるまでに時間を要したことである。その時々メンバーにもよるが、次回以降はクラスの雰囲気づくりをもっと考えたい。

##### (新座)

今学期の履修者は、3年生1名、4年生1名の、計2名であった。4年生はまさに就職活動中で、直面している状況を話してもらった。また、学生が少なかったため、毎週就職活動の報告を行い、振り返る時間を設けた。就職活動中の4年生が短期間で内定まで到達したのは嬉しいことであったが、通常はこのようには進まないだろうことも3年生には話し、十分な準備が必要であることも繰り返し伝えた。3年生は、自分の経験を、ガクチカや志望動機にどのように書いていけばよいかを、何度も書いていくうちに書き方を理解していったようである。

ゲストスピーカーには、二人が今向き合っている問題について伺うことができ、非常にありがたかった。必要な資料の書き方についての指導ポイントが非常に大切なので、教員もさらに研究を続けていきたい。

### <秋学期>

日本での就職を考えている学生や就職活動に関する知識や情報を得たい学生が受講した。授業では就職活動に関する知識やスキルを得ただけではなく、ゲストスピーカーの講義を通して就職活動の現状を知る機会が得られたと思う。授業後の感想では、「ESの書き方を学んだ」、「自分を改めて知る機会が得られた」、「就職活動に関する有意義な情報が得られた」、「就職活動に向けた準備ができる」など、肯定的な意見が聞かれた。今後の課題としては、就職活動に関する情報だけではなく、企業を知る機会が提供できたら良いと考える。

### <キャリアの日本語B>

担当者名：<春学期>（池袋）数野恵理

<秋学期>（池袋）小林友美、（新座）和田晃子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期（池袋）7名、秋学期（池袋）4名、（新座）1名

使用教材：独自教材

### コースの目標

就職試験で出題される日本語関連項目について学びながら、日本で行われる就職試験を理解する。また、数多くの問題に触れることによって日本語や日本文化・社会についての知識を増やす。

### 授業の方法

#### <春学期>

初回授業では、日本の就職活動に関するオリエンテーションを行い、筆記試験（SPI）の言語分野、非言語分野、性格検査がどのようなものかを解説した。非言語分野と性格検査についても少し問題を解かせたが、2回目以降の授業では言語分野を扱った。

毎回宿題を課して、事前にワークシートの問題を解いて来させ、授業ではその答え合わせや解説を行ない、次の授業の冒頭でクイズを行った。また、文学作品については、1人2作品ずつ調べたことを発表させた。第13回の授業では一学期に学んだ内容について模擬テストと答え合わせをし、復習が必要な分野を認識させ、第14回の最終日に期末テストを実施した。

#### <秋学期>

（池袋）

就職試験の国語分野、常識分野の試験問題を数多く解き、日本の就職試験の傾向を知ると同時に、対応スキルを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末に

は学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。

(新座)

就職試験（SPI）の言語能力の分野において、実際の問題に接することで解読のストラテジーを培った。出題範囲は、同義語・反意語・同音異義語、二語の関係、ことわざ・慣用句・故事成語、難読漢字・間違えやすい漢字、部首・カタカナ語・複数の意味、四字熟語、敬語・文法、文学作品、文章並び替え、読解問題（短文・中文・長文）である。毎回、宿題として次週の学習内容に取り組んでくるようにし、授業では、答え合わせと共に説明を行った。授業の最初には、理解の定着を見るために、前回の授業内容を小テストとして行った。最後の二回は、模擬試験と期末試験を行い、模擬試験で理解が未熟な項目を認識させて、翌週の期末試験で実力を測った。

## 結果と課題

<春学期>

履修登録は7名だったが、1名は誤って登録したということで、実際に受講したのは6名であった。出席率がよく、どの学生も宿題をしっかりとやって授業に臨んだ。文学作品は1人2作品ずつ調べて発表したの、12作品についてその内容や時代背景を聞くことができ、ただ暗記しようとするよりも記憶に残ったのではないかと思われる。漢字の読みは苦手な学生も多く、模擬テストの結果はよくない学生も複数いたが、復習すべき項目が明確となったようで、期末テストでは点を伸ばす学生が多かった。SPIの言語分野は覚えなければいけないことが多く、大変だが、興味を持って取り組めるよう、今後も指導法を工夫していきたい。

<秋学期>

(池袋)

秋学期は、正規学部生4名が本科目を履修した。日本での就職を志望している学生が大半であったため、全員、大変熱心に授業に参加していた。授業では、宿題で実施してきたワークシートの答え合わせを解説しながら進めたが、自身の知識や自国の類似表現、文化を紹介し合いながら進めるなど、教師と履修者のみならず、履修者間の双方向のやりとりが活発になされ、よい学びに繋がったようだ。遅刻や欠席が数回あった履修者は、授業開始時の小テストが受験できずに成績に影響があった点は残念であった。また、試験の出題範囲が広いためか、復習が十分にできていなかった履修者もいたようだ。履修学生にとって難しいと感じる項目については、スケジュールに余裕がある回に復習の時間を設けるなど、テスト対策に向けた工夫をしていきたい。

(新座)

今学期の履修者は、4年生1名であった。当該学生はまさに就職活動中で、自身の就活でのSPI受験の難しさを話してくれた。学生1名ということで、学生にもやりにくさがあったと思うし、学生同士の

交流や情報共有もできなかったことは残念である。本人の話を聞くと、他科目の課題に熱心に取り組んだり、サークル活動も活発に行ったりしていた一方、本科目の予習や復習の力の入れ方が不十分だったように思う。就職活動をしている学生であるのに、SPI 問題への意識づけをうまくできなかったことが課題であった。今後は、SPI は就職活動の重要な柱の一つであることをさらに伝え、学生が授業に全力で臨めるように工夫したい。

### <ビジネスのための口頭運用力 A>

担当者名：<春学期>（池袋）保坂明香、（新座）和田晃子

<秋学期>（池袋）泉大輔

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期（池袋）17 名、（新座）1 名、秋学期（池袋）5 名

使用教材：独自教材

参考：

（池袋・新座）

『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』、『BJT 模試と対策』

（新座）

『新装版商談のための日本語』、『新装版ビジネスのための日本語』、

『改訂版留学生のための就職内定ワークブック』

『上級レベルロールプレイで学ぶビジネス日本語』

### コースの目標

日本語の談話の特徴について理解を深めるとともに、敬語や待遇表現など、日本企業で働く際に必要となる口頭運用力を身につける。

### 授業の方法

<春学期>

（池袋）

会議、電話応対、商談の 3 つのビジネス場面を設定し、必要とされる語彙ならびに表現や、構文さらには談話レベルの口頭運用力を身につけられるよう、説明と練習を行なった。本コースで以前より使用されている教材に沿って授業を進め、必要に応じて教材に変更を加えたり資料を追加したりした。また補助教材として、動画や就職活動用のウェブサイトを用い、非言語行動やマナー、身だしなみについても説明をした。

クラスではメカニカルな口頭練習から始め、モデル文の中に含まれる表現に着目させ、ロールプレイへと繋げた。また、「使用教材」の欄にある教材を用いた聴解練習も毎回取り入れるようにした。

学期中3度ロールプレイテストを実施し、学期末には聴解の期末テストを実施した。学期を通じて新座のクラスと連携をしたが、テストの作成も担当教員が分担して行なった。

(新座)

ビジネス場面における会話について、「会議」「電話対応」「商談」という場面に分けて、学んでいった。授業は、①ビジネス場面の聴解練習、②会話練習というように進めた。会話練習の該当トピックが終わった後に、ロールプレイテスト(計3回)を行った。このテストの新座キャンパスでの実施方法は、事前課題により自分で会話の運びを考えておき、教員を相手にロールプレイを行った。

<秋学期>

本授業では、1回の授業で①ビジネス場面の聴解練習、②会議、商談、電話対応などのビジネス場面における会話練習を行った。また、学習者の理解度に応じて、日本企業の商習慣の説明、敬語の復習、ビジネスや冠婚葬祭におけるマナーの指導についても適宜扱った。①は教材を用いた聴解練習の中で、営業、人事、総務、経理、決算に関する専門的な用語や日本企業特有の仕組みについても解説を行った。②では、ビジネスによくある場面にに基づき、必要な表現を導入しつつ、ロールプレイを通して実践練習を重ねた。

## 結果と課題

<春学期>

(池袋)

クラス内に日本語能力のレベル差はあるものの、全体的に日本語力の高い学生が多く、教材で扱われている内容は、一部の学生にとって易しすぎたようである。このため、メイン教材に類似した発展練習、敬語の学習、非言語行動の学習、聴解練習等を多く取り入れ、レベルの高い学生のニーズにも応えられるようにした。一方で、このような練習を行なうと、ビジネスの語彙や表現をまだよく知らない学生には負担が大きかったため、スクリプトをスライドで見せる、正答を学生に板書させる、内容質問で確認する等を行ない、語彙や表現を習得できるようにした。また、先に会話を見せて、どのような談話構造になっているかを説明させ、表現だけではなく、談話の流れや機能にも注意を向けさせた。

学期を通じてこのような練習を重ねることで、学生はビジネス場面での基本的な語彙、表現、談話構造や所作を身につけられたように思う。敬語学習も強化したため、既習事項の復習と確認に繋がったようである。ロールプレイのテストでも、言語のみならず非言語行動に意識が向けられている様子が見られた。しかし、今学期の授業で扱われたのは、ビジネス場面によくある3つの状況(会議、電話応対、商談)のみで、この他にもビジネスには様々なシーンが存在する。また、授業では言語形式や語彙、表現の学習が中心になりがちだったが、実際に学生がビジネス場面に対応するには、社会文化的な知識や理解を深める必要がある。本当の意味でのビジネス口頭運用力を身につけられるよう、どのように授業を計画していけばよいか検討を重ねたい。



(新座)

学生は、日本語能力の高い1名であった。アルバイト先で敬語を使うので、授業で扱うトピックと同じ場面に遭遇することもあるようで、真剣に授業に臨んでいた。アルバイトで実際にあった場面について話してもらい、その会話がどのように発生したのかに気付いてもらった。会話だけではなく、そのトピックに含まれる言葉の背景も併せて扱い、自分事として身に付けていた。日本語能力が高くて細かいたところまで知らないこともあり、今後も上級者にとって気が付きにくい学習ポイントを増やしていきたいと思う。

1名であるため、授業が早く進む場合、日本の企業で外国人が遭遇するケースを取りあげて、教員と二人でなぜそのようなことになるのか話し合うこともあった。学生数が少ない場合もあるので、練習量を増やして効果的な進行になるように、工夫をしていきたい。

<秋学期>

今学期の学生はアルバイト経験のある学生を含めビジネス表現をほとんど知らない学生が多かった。しかし、どの学生も非常にまじめに授業に臨み、授業中に提示された新しい表現を覚え、積極的に使おうとする姿勢が見られた。教員の工夫として、日本でのビジネスにおける背景知識も詳しく取り扱うことで、表現の暗記にとどまらず場面や意図に合わせて適切に使用できるよう実際のビジネス場面も提示することに努めた。

課題としては、今学期の学生は比較的大人しかったため、学生同士のロールプレイや会話自体が非常に盛り上がり活発になったりするという事はなく、全員が落ち着いてタスクに臨むという状況であった。誠実に取り組んではいるが、もう少し学生の主体性を引き出す工夫ができたのではないかと思うため、今後の課題としたい。

## <ビジネスのための口頭運用力 B>

担当者名：<春学期>長谷川孝子

<秋学期> (池袋) 平山紫帆、(新座) 開講なし

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名、秋学期 2 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力を、ソリューション・デザイン型活動を通して身につけ、より高度なビジネス日本語運用能力の獲得を目指すとともに、日本でのビジネスの進め方への理解を深める。

## 授業の方法

### <春学期>

初回の授業で「ソリューション・デザイン (SD) 型活動」の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動では、教師は各班を移動しながら活動を見守った。授業の最後には、班ごとに会議の報告をさせるとともに、クラス全体に対して、口頭表現のフィードバックを行った。

案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンテーションを行った。プレゼンテーションはフィードバックのために録画し、翌週各学生が自身の録画を見ながら振り返りをする活動を取り入れた。教師から全体へのフィードバック、個別フィードバックも行った。

また、この活動とは別に、ビジネス語彙の短文作成を宿題として課し、添削して返却、それらの語彙に関するクイズも行った。

### <秋学期>

授業の進め方は、初回の授業で「ソリューション・デザイン (SD) 型活動」の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動では、教師は活動を見守り、注意すべき口頭表現を記録した。授業の最後には、代表者に会議の報告をさせるとともに、クラス全体に対して口頭表現のフィードバックを行った。そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そして質疑応答の内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼンはフィードバックのために録画し、翌週、録画を一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回の授業でビジネス語彙に関するプリントを配布し、翌週、語彙クイズを行った。

## 結果と課題

### <春学期>

学習者は全員 3 年生以上で、日本語運用能力は高いものの、ビジネスに関する知識や経験がほぼなかった。そのため、会議の状況や発表内容を明確にイメージするためには、準備にかなりの時間を要したようだ。2 回のグループ活動を通じて、小さな意見の食い違いなどもあったが、相手の意見を尊重しながら困難を乗り越えようとする姿勢が見られた。

毎回、繰り返し状況を確認し、会議や報告で何が求められているかを学習者に考えさせながら授業を進めた。本コースでは、SD 活動を軸として、商品開発や問題解決に関する語彙や知識、会議の進め

方、会議での表現、報告の仕方とその意味など、実に様々な内容を取り扱った。今後は、限られた時間と学習者の既存の知識量を考慮し、授業でどこまで扱うべきかを整理する必要があるだろう。

#### <秋学期>

今学期は履修者が2名で、1グループのみの活動になった。しかし、学生たちは協力し合いながら終始熱心に活動を進めていた。積極的に意見を述べるとともに、相手の意見もじっくり聞くことによって議論が深まり、最終的にユニークな商品や効果的な解決策を提案することができていた。

また、このクラスでは、毎回の授業や発表の後にフィードバックを行っているが、今学期の学生は2人とも、指摘されたことを次に活かそうとする姿勢が顕著に見られた。そうした高い意識によって、どちらの学生も口頭運用力が大幅に上達した。

一方で課題もある。今学期は1グループのみの活動となり、教師以外の意見を取り入れる機会がなかった。ボランティア学生を募集したが、様々な理由で叶わなかった。今後、履修者が少ない場合には、ボランティア学生に確実に参加してもらい、多様な意見が得られるようにしていきたい。

#### <ビジネスメールと文書>

担当者名：<春学期>（池袋）泉大輔

<秋学期>（池袋）森井あずさ、（新座）保坂明香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）8名、秋学期（池袋）6名、（新座）3名

参考教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネスメール・ビジネス文書 適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』スリーエーネットワーク  
川島冽（2008）『5分で送信 ビジネスメール速書き文例集』すばる舎

#### コースの目標

日本語の書き言葉によるコミュニケーションについての理解を深めながら、ビジネスメール、報告書、依頼状などの様々なビジネス文書の読み方、書き方について学び、使えるようになる。

#### 授業の方法

##### <春学期>

本授業では、①前回の課題へのフィードバック、②教科書に沿ってビジネス表現の導入および練習、③次回の課題の説明を行った。①では、学生が作成したメールの文面に個別にフィードバックを入れて返却した後、クラス全体でもメールの文面を共有し、良い点と改善点を説明した。②では、教科書に掲載されているビジネス表現を取り上げて説明しつつ、関連する表現にも派生させながら指導を行った。③で

は、課題であるメールを書く上で設定されているビジネスシーンについてクラス全体で理解を深めるとともに、①～③の指導の際、文法・語彙的な言語面の助言だけではなく、担当教員の企業経験に基づき、ビジネスマナー、日本企業における商習慣、就職活動で使える表現についても適宜説明を行った。受講者数が8名と比較的小さいクラスサイズであったため、一人一人へのフィードバックの時間、クラス内でのディスカッションの時間を長く設けることに努めた。

#### <秋学期>

(池袋)

教科書に従い、様々な文書やビジネスメールを学んでいった。それぞれの課に課題があるので、クラス内で一部を書き、残りを宿題として次回の授業までに提出してもらった。

(新座)

本コースでは、教科書に沿ってビジネスメールと文書の表現や知識を導入し、課題を作成させ、その後課題に対し書面・口頭の両面でフィードバックを行なった。教科書は1週間に1課のペースで進め、課の前半部分を授業で扱い、後半部分を翌週までの宿題として課した。

課題管理には共有ドライブを用い、その中に学生ごとのフォルダを作成し、課題を提出させた。学生間ではアクセスできない設定にしたが、授業では作成された課題を全体で検討する時間を設けた。また、必要性が認められる際には、適宜、敬語や同音異義語の学習や、就職活動およびビジネスマナーについての説明を取り入れた。

ここ数学期は、初回のクラスで、日本の就職活動や立教大学のキャリアセンター支援を紹介し、キャリアセンターの積極的な活用、センター実施イベントの参加を促している。今学期もこうした説明を行ない、イベントに参加した場合は、学びや気づきを報告書としてまとめるよう指示した。最終課題としては、授業課題に類似した設定のもとでメール文と文書を作成し提出することを課した。

### 結果と課題

#### <春学期>

学生が作成したメール・文書に対して個別のフィードバックを行い、全体で共有するという流れを繰り返したため、学期初期と比較すると学期終盤はビジネス表現や文章のポイントに気をつけながら作成できるようになっていった。今学期の学生は遅刻・欠席をすることがほとんどなく、欠席する場合もあらかじめ教員にメールを出して（そのメールの文面も授業で学んだことを活かして）事情を説明できていた。また、授業中の学習態度も極めて勤勉で、言語表現のみならず日系企業の企業文化や商習慣に対する理解を深めようとする意識が高かった。そのため、教員からの一方的な解説などにとどまらず、受講者同士が積極的に発言・議論を行い、切磋琢磨する雰囲気もあいまって、学期終了後には全員に成長が見られた。また、少人数クラスであることから、一人一人のメールや文書を隅々までクラス内で確認することができ、細かなニュアンスの違い、使用場面や話者の意図などについてディスカッションを取

り入れながら授業を進めることができた。特に、教員が会社員だった際の実務経験に基づき、ケース学習を行うことでより真正性の高い事例について学生たちに考えてもらう活動を取り入れた。実際に日本企業への就職を考え、就職活動中の学生も多く、自分が会社員だった場合にどのように対応するのかを実践的に思考する力の涵養を目指した。

課題としては、クラス内でビジネス表現に精通している学生が多く、ややタスクが簡単と感じられたようであった。より発展的な追加タスクなどを用意できると、さらに教育効果が高まったと思われる。

#### <秋学期>

(池袋)

最初はビジネスメールに慣れていない学生たちだったが、学びが進むにつれ、すぐにビジネスにふさわしいメールを書くことができるぐらいまでレベルアップしたと思う。毎回答え合わせのようなことをしたが、答えから遠いという学生はほとんどおらず、みんないい文書が書けるようになっていた。今後の課題としては、ある程度敬語やビジネスメールを知っている学生にもう一步深く学ぶことができるような教材やタスクがあるといいと思う。

(新座)

使用教材では具体的なビジネス場面が設定されているため、学生は状況を理解したうえで場面に身を置いてビジネスメール・文書の作成ができたようである。今学期の履修者3名はすでに十分な日本語運用力とメールを書く力に加え、日本のビジネス習慣についての理解があったため、タスクの指示に沿った適切なメール文を書いていた。そのため、文法や表現の軽微な誤り、語彙選択のミス、日本語としてのかつビジネス場面における不自然さを修正することが今学期の課題であった。40にも及ぶメール文・文書作成を通して、学生らが不自然さを修正し、正確に書けるようになったことは、最終課題からも窺い知ることができた。今学期の積み重ねの成果であり、コースに対してもその成果を評価できるが、一方で、コースワークの多くをメール文作成とフィードバックが占めることについては、今後検討を行なってもよいかもしれない。現在、ビジネス関連の書籍や動画等の多種のコンテンツ利用が可能であり、情報も日々更新されている。このような書籍や動画を教材として併用するのも一案だろう。また、初回クラスのように、自身の就職について考える活動や、就職活動やキャリアセンターへと結びつける時間をもっと設けてもよいかもしれない。さらには学生ボランティアの参加によって、メール文修正や就職活動の情報交換の機会を取り入れることも、留学生への就職支援に繋がるだろう。今後、本コースがより実践的で動的な学びの場となるように検討を重ねたい。

## 2024年度 Japanese Language and Japanese Culture A、B:

### Japanese Language and Japanese Society A、B 授業記録

#### コースの概要

J0 から J3 レベルまでの特別外国人学生を履修対象とし、日本語という言語に関連する文化的・歴史

的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

## <Japanese Language and Japanese Culture A>

担当者名:<春学期>任ジェヒ

授業コマ数:週 1 コマ

履修者数:春学期 39 名 (GLAP5 名、他 34 名)

使用教材:独自教材

### コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

### 授業の方法

日本の伝統文化から現代文化に至るさまざまなトピックに触れることができるように、今学期は1) 地理と観光、2) 県民性、3) アニメとマンガ、4) お祭り、5) 年中行事、6) お笑い、の6つのテーマを取り上げた。今年度より J0 から J3/J3S レベルまでのゼロ初級・初級クラスの学生のみ履修が可能となったため、授業は主に英語で行った。教師による講義だけでなく、日本人学生とのディスカッション、インタビュー調査、Kahoot や Slido を用いたクイズ、ゲーム、短冊作りなどの教室活動を行い、受講生の積極的な参加を促した。また、日本のグローバル企業に長年勤めているゲストスピーカーを招き、日本のビジネス文化や日系企業のグローバル化についてお話を聞き、ディスカッションする時間も設けた。学期末には学期中に扱ったトピックを受講生独自の視点から考察した内容でプレゼンテーションを行い、その振り返りに基づき、最終レポートを作成してもらった。

### 結果と課題

昨年度まで特別外国人留学生は誰でも本クラスが履修可能だったが、今学期からは J0 から J3/J3S レベルまでのゼロ初級・初級クラスの学生にのみ履修資格が付与された。とはいえ、今学期も JL&JC と併置科目の GLAP「大学生の日本語」の受講生が 5 名いたため、受講生同士が日本語のレベルを気にせず、それぞれが考える日本語の文化や社会について自由に発言できるような空間作りを第一に工夫した。昨年度多くの受講生から学習意欲の向上に繋がったという評価をもらった Kahoot や Slido を積極的に使用したり、グループ活動を多めに入れたりするなどして、学生同士が互いの観点や考えを楽しく学び合いながら、互いの文化的背景についての理解も深められるようにした。その結果、39 名という比較的大人数でのクラスではあったが、受講生一人ひとりが周囲からの評価を気にして発言を控えるといった否定的な姿はあまり見られず、むしろ受講生同士が励まし合い、互いに積極的な参加を促すような

姿がよく見られた。日本の文化に興味を持っているという共通点で知り合えた仲間と一緒に学んでいく、ということが本クラスでなく、日本語学習全般に対する動機付けになったようである。

なお、今学期は、昨年度課題として挙げていたグループでのミニプレゼンテーションは実施せず、1学期を通して学んだことを個人で発表するプレゼンテーションのみを2回に分けて行った。今学期はグループ活動を多めに入れたため、個人での発表を最終課題として課したが、どちらの形態が1学期の学習成果を可視化し、受講生のさらなる学習意欲の向上に役立つかについては、さらに検討を重ねていきたい。

## <Japanese Language and Japanese Culture B>

担当者名:<秋学期>任ジェヒ

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期27名（GLAP4名、他23名）

使用教材：独自教材

### 授業の方法

コースの目標を達成するために、今学期は1) 冠婚葬祭、2) 日本の教育、3) 日本の伝統的な遊び、4) 日本の歴史、5) 日本の労働（ビジネス文化と就職活動）、6) 日本のジェンダー問題、7) 日本のスポーツ、8) 日本のお正月、の8つのテーマを取り上げた。春学期と同様に、J0からJ3/J3Sレベルの特別外国人留学生のみに履修資格があり、オリエンテーションにて主な使用言語は英語だと伝えていたため、授業は主に英語で行った。授業の前半では主に講義を行い、後半では理解の深まりにつながるさまざまな活動を実施した。たとえば、日本の伝統遊びの体験、受講生同士のディスカッション、日本人学生ボランティアへのインタビュー調査、KahootやSlidoを用いたクイズ、ゲームなどである。また、昨年度と同様に、箏曲家を招き、日本の伝統音楽や伝統楽器についてお話を聞いた後、お琴の体験をする時間も設けた。学期末には、学期中に扱ったトピックを受講生独自の視点から考察した内容でプレゼンテーションを行い、その振り返りに基づき、最終レポートを作成してもらった。

### 結果と課題

今学期の受講生は特別外国人留学生が23名、GLAP学部生が4名だったが、他の学期に比べると受講生間の日本語レベルに差をあまり感じない学期だった。取り上げているテーマに関連する日本語の表現について質問が出ると、ほとんどの受講生が「私もそれが知りたかった」と共感をしてくれる雰囲気であったと思われる。学期末の振り返りにも、疑問点について心的な負担を感じずに発言できたことが、良かった点として挙げられていた。また、今学期は日本の文化を「日本語で」どのように説明するかについても興味、関心を持っている受講生が多かったため、各テーマについてワークシートなどを用いてことばの習得や練習もできるように工夫した。本クラスはいわゆる文法や語彙の学習を目的としたものではないが、日本語と日本の文化、社会は切り離すことができないため、受講生の学習意欲を高

め、日本の文化に対する理解を深めるには良い方法だと考えた。その結果、最終プレゼンテーションで、テーマに関連している重要な表現は日本語で発表をする姿が多く見られた。

今後も受講生の興味関心にそって、教室活動やそこで用いる教材などを、柔軟に修正していきたい。なお春学期に課題として挙げたプレゼンテーションの形態については継続課題として、来年度も引き続き検討を重ねていく必要がある。

## <Japanese Language and Japanese Society A>

担当者名:<春学期>小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 34 名（PEACE 9 名、GLAP 5 名、他 20 名）

使用教材：独自教材

### 授業の方法

地域方言、社会方言、名前の変遷、ボディーランゲージ、日本語の表記体系、日本の教育制度など、日本語および日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。授業は、冒頭にそれぞれのテーマについて 5 問ほどの質問を学生に投げかけて考えさせた後、講義を行いながら質問の答えを示すという形式で進めた。授業後半には、各テーマについて日本と学生の国を比較させ、類似点および相違点についてグループでディスカッションさせ発表させるなどして、学生の積極的な参加を促した。また、ビジターセッションを 3 回設けて日本人学生と交流する機会を取り入れた。3 回のセッションでは、授業で扱った「地域方言」「若者言葉」「男言葉・女言葉」「名前(ファーストネーム)」「教育制度」について日本人学生にインタビューさせ、その結果をインタビューシートにまとめて提出させた。さらに、ゲストスピーカーとして神職を招き、神道や神社について講義をお願いした。その翌週の授業では、ゲストスピーカー宛てに礼状を書く活動も行った。期末レポートは、ビジターセッションで扱ったテーマの中から 1 つを選ばせ、リサーチクエスチョンを考えてインタビューなどの調査を行い、日本と学生の国を比較して考察させた。

### 結果と課題

履修者数は 34 名で、その 4 割が本コースを必修科目として履修している正規学部生、6 割が選択科目として履修している特外生であった。特外生は自らの意思で履修しているため総じて熱心で出席率も高かったが、2 名の学生が途中で履修を断念し、また一度も出席しない学生が 1 名いた。正規学部生の中にも一度も出席しない学生が 2 名、2 回しか出席しなかった学生が 1 名おり、結局最後まで出席したのは 34 名中 28 名だった。

これまで本コースを履修する学生は真面目で積極的だったが、今学期は正規学部生の中に授業態度に問題のある学生が目立った。授業中に断りもなく退室してなかなか戻って来なかったり他の授業の資料



を読んでいたりし、注意してもコース終盤まで態度は改まらなかった。一方で、特外生はいずれのテーマであってもディスカッションにも発表にも熱心に取り組んでいた。コース最終日の振り返りから、学生たちが地域方言、若者言葉、日本の教育制度に特に興味を持っていたことがわかった。今学期から本コースが履修できる特外生は初級の J3 レベルまでになったことから、日本語や日本社会に関する学生の知識がほぼ均一なものとなり、指導しやすかった。

しかし上述のように、授業態度の悪い学生が増えたため、講義のクラスを少なくし活動のクラスを増やすなどして、学生が前向きに取り組める授業内容にする工夫をしていきたい。

## <Japanese Language and Japanese Society B>

担当者名：<秋学期>小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 34 名（PEACE 10 名、GLAP 4 名、他 20 名）

使用教材：独自教材

### 授業の方法

授業では、日本語と日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。テーマは、日本の祝祭日、人称詞、家族と家族間呼称、敬語、短歌・俳句、色・動物のイメージ、日本の食生活、衣生活、住生活、現代日本の社会問題などである。毎回テーマについて講義をしたうえで、クラスでディスカッションや発表をさせて学生の積極的な参加を促した。ビジターセッションを 4 回設けて日本人学生に参加してもらい、色・動物のイメージ、呼称や敬語についてインタビューする活動を行ったり、短歌・俳句を作るという体験学習も行ったりした。また、ゲストスピーカーとしてビジネスパーソンを招き、日本のビジネスについての講義をお願いした。期末レポートでは、コースで扱った中から 1 つトピックを選択させ、日本人を対象に調査を行い分析考察させた。

### 結果と課題

授業では日本語や日本社会に関するさまざまなテーマを取り上げたが、リアクションペーパーから学生がどのテーマにも興味を持って取り組んでいたことが読み取れた。また、コース終盤で提出させた振り返りシートから、敬語や日本のビジネス、日本の社会問題、色と動物のイメージに学生たちが関心を持ったことがわかった。特に敬語に興味を持った学生が多く、期末レポートでも敬語を取り上げ、リサーチクエスチョンを考えて日本人学生にインタビューしたものが半分以上を占めた。初級レベルの学生が大半で敬語は未習ではあるが、敬語に関連してクラスで取り上げた日本社会のヒエラルキーや、尊敬している相手へのみ敬語を使うわけではないという敬語の運用が日本社会の特徴の一つと捉えたようである。

30 名ほどの大きなクラスだったためか、大半は真面目に授業に臨み熱心であったが、態度の悪い学生

もいた。ほとんどの学生は日本語についても日本社会についても知識が少なく、どのようなテーマも新鮮に受け止めていたが、数名の中級・上級の学生には既習の情報もあったようである。今後は、さまざまな背景の学生を惹き付けられる授業内容を工夫をしたい。

## 2024 年度 日本語演習 授業記録

### コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習 1 は J2 レベル、演習 2 は J3 レベル、演習 3 は J4 及び J5 レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習 1 では「アニメ／日本の歌」、演習 2 では「映画／まんが」、演習 3 では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習 1～3 の詳細は以下の通りである。

### <演習 1>

担当者名：<春学期>小松満帆

<秋学期>小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名、秋学期 7 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

### 授業の方法

毎回の授業で、アニメを軸にテーマを設定し、教師による講義を行った。扱ったテーマは、アニメと歴史（日本社会とアニメ史の関連、アニメに見る女性像の変化）、アニメと社会（アニメに見る社会問題）、アニメと音楽（アニメソングの変遷）、アニメと経済（アニメツーリズム、推し活）、アニメと言語（役割語）、アニメと文化（アニメに見る食文化）である。毎回の授業では、テーマについてのブレインストーミング、教師による講義、ディスカッションの流れで進め、毎回の授業後にリアクションペーパーを提出することを課題とした。また、好きなアニソンについて書くミニ作文、中間発表（アニメの聖地巡礼地の紹介）、期末プレゼンテーション（好きなアニメの紹介と分析）、期末レポート（期末プレゼンテーションと同内容）を課した。

## 結果と課題

### <春学期>

履修者によってアニメを観る頻度は異なっていたが、全員がアニメを観る、という学生だったため、講義への理解やディスカッションでは全く問題なく進めることができた。J2/J2S という初級レベルの学生ではあったが、日本語で話したい、もっと日本語を聞きたい、という意欲の高い学生たちだったため、講義中はほぼ日本語のみを用いたが、しっかりと理解し、できるだけ日本語で意見を述べようとする学生が多く、結果として日本語力も大きく伸びた学生がほとんどであった。また、学生同士の仲が非常によく、互いによく助け合い、遠慮なく様々な意見を交換し、盛り上がることの多いクラスだった。

アニメを題材として、日本社会について学ぶことを目的としていたため、時にテーマや語彙が複雑になることもあったが、語彙リストをつけることで、理解には問題がなかった様子であった。また、リアクションペーパーからは、アニメを観て楽しむだけではなく、そこから日本について深く理解し、考えることができた、という点についての肯定的な意見が多く、アニメを娯楽として観るだけではなく、アカデミックな視点で観ることによる学びが大きかったように見受けられた。

今後の課題としては、アニメを観ない学生が履修した場合にも対応できるよう、内容を工夫していく必要があるだろう。また、初級の日本語レベルでできることをより学生たち自身が意識していけるよう、課題なども見直していこうと考えている。

### <秋学期>

秋学期は7名が履修したが、うち1名は途中で出席を停止したため、最終的には6名のクラスであった。アニメを観る頻度には春学期同様差があり、アニメをほとんど観ないという学生も1名いた。そのため、アニメに関する基本知識が不足していることもあったが、教員が適宜情報を追加したり、クラスメイトが声掛けをするなど、授業の運営には支障なく、学生本人も高い意欲を持って学期末まで授業に参加し、学びに対する達成感があったと話していた。また、学期開始当初は、発言の量に差があり、話さない学生はほとんど話さないといった場面も見られたが、徐々に打ち解け、最後には活発に意見を交換し、非常に雰囲気の良い中で活動を進めることができた。

秋学期も、英語による語彙の説明等のサポートにより、授業内容の理解には全く問題がなかった様子で、リアクションペーパーでは、テーマに対し深く考察した内容を書いてくる学生も複数見られた。また、日本語で話そうという意欲の高い学生が数名おり、その影響から、他の学生たちも徐々に日本語での発言を増やし、学期最後には、自分の日本語力が伸びた、というコメントをほとんどの学生が残した。また、自分の好きなものについて日本語で話せたこと、自分の日本語力で、思っていたよりもより多くのことを話せると気づいたなどの日本語使用に対する前向きなコメントも見られた。

今年度の授業活動を通して、学生たちが日本語によるインプットをしっかりと理解し、自信をつけていたことがわかったが、今後は、アウトプット活動についてもより検討し、よりよい活動内容を考えてい

きたい。

## <日本語演習 2>

担当者名：<春学期>泉大輔

<秋学期>泉大輔

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 8 名、秋学期 8 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの作品を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

### 授業の方法

<春学期>

授業は、日本の文化社会に関するテーマごとに、事前活動、本活動、事後活動の 3 つを 2～3 週にわたり実施するという構成で行った。

事前活動では、テーマに関するマンガを部分的に読み、背景知識の活性化を行った上で、このテーマについて学習・議論するために必要な語彙・表現を確認する。また、このテーマに関して知っていること、自文化ではどうであるのかについてクラス内で共有をする。必要に応じてテーマに関する文章を読んだり動画を視聴したりしながら、日本の社会文化に関する知識と理解を深めていく。さらに、翌週の本活動に向け、テーマに関する調査・準備を行う。その際、教員は適宜必要な日本語の表現などについてフォローを行う。本活動ではボランティア学生を招き、各学生がテーマに関して、日本と自文化を比較し、そこからわかったことを PowerPoint 資料にまとめて発表を行う。クラスメイトやボランティア学生からの質疑を通して内省を促す。その後、少人数のグループに分かれて発表内容について議論したり、テーマによってはボランティア学生とともに協働タスクに取り組んだりしてもらった。事後活動では、本活動を各々振り返り、教員から個別にフィードバックを行った。

<秋学期>

基本的な進め方は春学期と同様であるが、扱うテーマが異なる。

## 結果と課題

### <春学期>

クラスの雰囲気非常好く終始和やかに進んだ。また積極的な学生が多く、ビジターセッションではボランティア学生と有意義な交流を行っていた。留学生1人に対して日本人ボランティアが1人以上つくことが多く見られ、学生が「日本語をツールとして」積極的に自己表現する様子が見えた。初めは1人で話すことや、通常のJ3/J3Sよりも多く日本語を使う環境に戸惑い、緊張する学生もいたが、学期の後半にはかなり流暢に自分の考えを伝えられるようになっていた。課題としては、課題としては、毎学期のことではあるが、マンガやドラマの扱いが挙げられる。アニメを頻繁に視聴する学生は多いものの、マンガやドラマに親しんでいる学生は少なく、特にマンガのセリフの流れやコマ割りの構造を理解するのに苦戦する様子が目立った。これらの教材の活用方法については、今後さらに工夫を加えていきたい。

### <秋学期>

事前の課題や準備を丁寧に進め、本活動では入念に調査・考察した内容を発表する学生が多く見受けられた。その結果、日本の社会文化に対する理解が深まるとともに、自文化の新たな一面に気づいたという意見が聞かれた。また、ボランティア学生との交流を通じて、同じ日本人学生でも社会文化に対する見方が異なることを実感したという声もあり、学生が多角的に文化を捉えられるようになったことがうかがえた。一方で、一部の学生は準備や分析が十分でなく、比較の精度が低いものもあったが、それでも既習の文法や語彙を活用し、積極的に発表に取り組む姿勢が見られた。課題としては、プレゼンの仕方や資料の作り方などに工夫の余地があり、なかなか自分の思うように表現できない学生が多かった。そのような方法論についても指導ができているとより効果的なビジターセッションや発表になっていたと思われる。今後の課題とする。

## <演習3>

担当者名： <春学期>数野恵理

<秋学期>aクラス：数野恵理、bクラス：任ジェヒ

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期34名（PEACE9名、他25名）、

秋学期 aクラス14名（PEACE7名、他7名）、bクラス12名

使用教材：『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』アスク出版、

『日本語多読ブックス』大修館書店、『きまぐれロボット』角川つばさ文庫 など

## コースの目標

プレイメントテストでJ4、J5レベルにプレイされた学生を対象とする。これまでに習った日本

語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

## 授業の方法

### <春学期>

演習 3A では短歌、俳句、短編小説を扱った。多読用の読み物「かぐやひめ」、「時そば」、「風呂敷包み」、「海幸山幸 日本の神話」、「注文の多い料理店」、「蜘蛛の糸」、「杜子春」、「吉備津の釜～雨月物語より～」、「走れメロス」、「おちくぼ物語」のほか、星新一のショートショートなどを扱った。指定した読み物を読んだあとで、内容把握のためのワークシートの質問に答えて、印象に残った場面や感想を書かせたあと、グループと全体で確認した。J5 の学生と早く終わった J4 には、手書きであらすじも書かせた。全員で同じ読み物を読んだ回もあったが、2 つの読み物から自分に合ったレベルの読み物を選んで読み、同じ読み物を読んだ者同士で内容確認をしたあとで、別の読み物を読んだクラスメイトにあらすじを説明する活動をした回もある。学期末には各自が読みたい本を選んで読み、その読み物について紹介した。

### <秋学期>

演習 3B では多読用の読み物「鶴の恩返し」、「まんじゅうこわい」、「馬小屋の火事」、「むじな」、「耳なし芳一」、「鼻」、「蜘蛛の糸」、「杜子春」、「日本の神話」、「クリスマスキャロル」「高瀬舟」のほか、星新一のショートショートを読んで、内容を確認したり、ディスカッションをしたりした。全員で同じ読み物を読んだ回もあったが、レベルに合った読み物が読めるよう、J4 と J5 で異なる読み物を読ませた回もある。別の読み物を読んだクラスメイトにあらすじを説明する活動では、読み物を読んでいない相手や日本語力が低めの学生にも理解してもらえるよう、4 コママンガを描かせ、それを見せながら話をさせた。また、J5 の学生と早く終わった J4 には、手書きであらすじも書かせた。

演習 3B では、3A の短歌、俳句のかわりに川柳と谷川俊太郎の詩を扱い、川柳や短い詩を書いて発表する活動を行った。学期末の最終発表では春学期同様、各自が選んだおすすめの読み物を紹介した。

## 結果と課題

### <春学期>

2022 年度まで演習 3 の履修者は 10 名程度だったが、2023 年度から正規学部生である異文化コミュニケーション学部の J4、J5 の学生が増え、さらに PEACE プログラムの J4、J5 の学生も必修となったことから履修者が急増し、2024 年春学期には履修者 34 名となった。

学生数が増えたため、最終発表も時間を短縮して行い、質疑応答の時間も省略したが、そうすると発表を聞く学生の態度も消極的となり、集中力も続かなくなるという問題があった。また、J4、J5 の学生が履修する科目でもともとレベル差はあるが、今学期は 2/3 が漢字圏の学生となり、漢字圏と非漢字

圏の学生の読解力や読むスピードの差がかなり開いた。そのため、J5の学生のほか、J4でも読むのが速い学生には手書きであらすじを書かせたり、追加の読み物を読ませたりして対応した。レベル差と学生数の多さにどのように対応していくかは引き続き課題としたい。

#### <秋学期>

##### (a クラス)

近年、併置科目の履修者数が増えており、2024年度秋学期は初めて2クラス体制で授業を行うことになった。春学期は最終発表の時間を短縮して質疑応答も短縮したが、秋学期は以前のように十分な時間を確保することができ、お互いの発表を集中して聞き合うことができた。また、今学期は宿題のあらすじやワークシートなどについて、廊下で個別にフィードバックする時間を設けたことにより、それぞれの学生のニーズに応えることができた。読み物は2023年度秋学期の演習3Bとほぼ同じものを扱ったが、J4の学生にとってやや難しかったものや、学生があまり関心を示さなかったものは別の読み物に変更した。今後も学生が自分のレベルに合った読み物を楽しんで読み、積極的にディスカッションにも参加できるよう、クラスで扱う読み物は必要に応じて見直していくとよいだろう。

##### (b クラス)

bクラスの受講生は12名で、そのうち3名がJ4レベル、9名がJ5レベルに配置された学生だった。授業ではレベル別違う読み物を扱う週もあったが、全受講生が同じ読み物を読む週もあった。このような状況の中、1) J4レベルの学生3名が疎外感を感じることなく、楽しく授業に参加できる環境をどう作るか、2) 全受講生が同じ読み物を読むとき、レベル差にどう対応するか、という2つの課題があった。

1)のためには、それぞれが読んだ読み物について紹介し合うグループ活動や、読み物についての感想を共有するペア活動を毎回取り入れるようにした。ペアやグループはなるべく毎回違う学生と交流ができるように組み、お互いの話で印象に残ったことや良かった点など、必ずフィードバックをするように指示した。また、J4レベルの3名がJ5レベルの学生に読み物の紹介をするときは、特定の1名だけが負担を感じることがないように、協力を促した。2)のためには、ペアやグループ活動を行うときに、口頭での説明だけでなく、黒板や電子機器などを利用したお絵描きや画像の紹介など、言語以外のリソース、ツールも活用するように促した。J4レベルの学生が自身の語彙力や文法の知識が足りないことを懸念していたため、日本語以外のツールの利用により、多少は心的負担を減らしてあげることができるのではないかと考えた。

以上の2つを試みた結果、学期末プレゼンテーションの準備をする日、12名の受講生がお互いをサポートし、積極的にアドバイスし合う姿がみられた。また、J4レベルの学生がJ5レベルの学生をリードするような姿もみられ、日本語のレベルを意識せず、積極的に活動に参加していることがわかった。

今学期は受講生同士の交流とクラスの雰囲気作りに注目したあまりに、個々に対するフィードバック

にはあまり時間をかけることができなかった。あらすじの提出など、宿題があったときは翌週にフィードバックを行ったが、その週に共通してみられた文法の誤りを全体に向けて説明した後、それぞれが読み物を読んでいるときに、個々に対するフィードバックを短く行ったため、不十分だと感じる学生もいたと思われる。正しい文法・文型の使用を目標とする科目ではないが、この点については、今後さらに工夫をしていきたい。

## 2024 年度 総合日本語 4～6 授業記録

### コースの概要

J4～J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

### <総合日本語 4～6A>

担当者名： 保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 14 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

### 授業の方法

総合日本語 A コースは、読解でテーマについての知識を得て、ディスカッションを通し考えを深め、作文や発表で学んだことや考えたことを表現するという流れをとっている。今学期も従来同様に「観光地」「祭り」「江戸しぐさ」の 3 つのテーマを扱い、これらのテーマを用いて言語を運用することによって、日本語能力が向上するように図った。

読解は宿題として課す場合と授業内で読ませる場合の両方があったが、いずれもまずワークシートに解答させ、その後全体で内容確認をする形式にした。なお、このクラスで使用されるいくつかの教材には、ルビ振り、平易な語彙への言い換え、語彙リスト等、レベル差への配慮がなされている。また、学生が自分の日本語レベルに合った教材を選択できるように、レベル別の教材も用意されている。

読解の内容確認の後はディスカッションを行ない、クラスメイトの考えを知り、自分の考えが深められるよう時間を設けた。その活動の後に、考えたことと調べたことをまとめて発表したり文章にしたりした。学期中に 5 分程度の発表を 3 回、作文と書き直しを 2 回実施し、学期末には書いた内容について最終プレゼンテーションを行なった。



このクラスには TA が参加しているが、主な業務として、ディスカッションへの参加、作文のフィードバック、学生の個別作業中のフォローなどにあたった。

## 結果と課題

今学期は J4 から J6 までの全ての学生が履修していたが、学生間に学び教え合う様子が見られた点は、このクラスならではの意義であり、学習効果であったと考える。だが、教材の中にはそれ自体に難しい部分があったり、あるいは、協働作業をする素材としては難しかったりするものもあるため、使用教材は再度見直しを図ってよいだろう。また、教員にも教材をより良く使う工夫が求められる。教材使用の工夫とともに、レベル差に対応できる教材や、レベル差を生かした授業設計について考えていきたい。

先述のように、このコースでは、読解のワークシート(3回)、作文と書き直し(2回)、発表(4回)があるが、一学期間の課題の量として若干過重なように思われる。これが影響したためか、一つ一つの課題に十分に時間をかけられなかったようで、学期中盤に準備に欠ける発表が散見された。このため、クラスで話し合いをもち、問題を振り返り、学生自ら問題点と改善点を挙げ、多くが改善に至ったことは、大変に意義のあることであった。しかし、教師側としては、適切かつ実施意義のある課題を精査していく必要がある。この点も課題と捉え、改善に努めたい。

## <総合日本語 4～6B>

担当者名：三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 14 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

## 授業の方法

本授業は VTR を素材とし、「デジタルリテラシー」「若者の消費行動と価値観」「イクメン」の 3 つのテーマから現代日本を考えた。各テーマは 3 週または 4 週に 1 つのペースで学習を進めた。1 週目はテーマの導入・ウォーミングアップ→事前に配布した語彙リストの言葉の意味を確認（意味を調べてくるのは宿題で、次回授業で発表）→VTR を視聴→内容確認を行った。VTR は前半と後半に分けられているため、2 週目は 1 週目と同様の流れを繰り返した。3 週目はテーマについてディスカッションをしてクラスで意見を共有し、さらに発展的な活動として作文を書いたり、グループ発表をしたりした。各

テーマの終わりには学習した語彙や表現を復習するためのプリントを配布した。最終課題のプレゼンテーションは、授業でメインとして扱った3つのテーマの中から関連するトピックを学生が自分で決め、プレゼンテーションを行った。

## 結果と課題

やや学生数が多かったが、昨年度と同様に TA が授業に参加してくれたため、適宜学生をフォローしながらスムーズに授業を進めることができた。真面目な学生が多く発言も活発で、課題にも真剣に取り組んでいた。ディスカッションやミニ発表などの活動を多めに実施したので、学期末の振り返りでは、この授業を通して、聞くことや話すことが上手になったと語る学生が多かった。授業で扱ったトピックは、やや古いものもあったが学生からは好評であった。

学生は概ね熱心だったが、やや遅刻や欠席が多く、1限の開始時間になかなか学生が揃わないこともあった。学期の始めから欠席が続いた学生もあり、その学生は不合格となってしまった。今学期は学生が多かったため、最終プレゼンテーションの発表を2週に渡って行ったが、準備の時間が減り、スケジュールがややタイトになってしまった。発表の話す練習も含めると、2週ほど準備の回があれば良かったと思う。しかし、他の週もすでに内容が詰まっているため、調整は難しかった。また、作文課題のFBも履修者が14名となると、授業時間内に個別のFBの時間を設けるのは困難であった。そのため作文課題のコメントにFBを詳しく記入したものの、読まない学生もいるので、教師が個別に口頭で伝えたほうが効果的だと思った。今後の課題として、履修者の人数に合わせて、どのようにスケジュールを調整していくかを考えていきたい。

## <総合日本語4～6C>

担当者名：保坂明香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期8名

使用教材：独自教材

## コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

## 授業の方法

総合日本語Cコースでは読解を軸にコースを進めているが、今学期はテーマである「若者」と「日本に暮らす外国人」について、特に現代における社会問題にフォーカスを当てクラスで扱った。学生達は読解後に、読んだ内容をクラスメイトに説明したり、内容についてディスカッションをしたりし、その

後、作文または発表という産出活動を行なった。作文はテーマ「若者」が読み物についての意見文、「日本に暮らす外国人」については、在留外国人のデータについて説明、考察する内容である。作文には教師がフィードバックを提供し、書き直しも提出させた。この他に宿題として、読解のワークシートや発表準備を課した。

このクラスは J4,J5,J6 の異なるレベルの学生がともに学ぶクラスであるため、通常、読解教材に言語面でのサポート（語彙を平易にする、振り仮名をつける等）をしているが、このクラスにおいては日本語能力のレベル差があまり認められなかった。そのため、教材にはサポートを取り入れなかったが、クラスで読解をする際に、学生がわからないところを一緒に読む、説明をする、質問に答える、読みの困難をともに検討する等をして、学生の読解活動を補助した。

最終課題としては、インタビュー調査を実施した。冒頭に説明した 2 つのテーマから学生が 1 つを選択し、関連した内容で調査のテーマを考え、質問項目を作成し、その後、クラスボランティアにインタビューを実施して、その結果を報告した。

なお、このコースには TA が 1 名参加し、ディスカッションへの参加、作文や発表へのフィードバック、発表時の学生への質問、学生の個別作業中のフォロー等の授業補助にあたった。

## 結果と課題

学期を通して比較的難易度の高い教材を扱ったが、学生達は諦めずに読解によく取り組んでいた。また、発表や作文の内容もアカデミックなものが多く、当該テーマについてよく考察しそれを表現しようとする姿勢が課題から伝わってきた。発表は流暢で質問への対応力もあった。質疑応答も活発に行なわれることが多く、発表後に質問やコメントを受けず困っているクラスメイトに対し、質問をひねり出してあげるような配慮も見られた。これらのことから、本コースならびに学生達は概ねコース目標を達成したと言えるだろう。

一方で課題として残るのは、ツールの使用が疑われる「産出」が何度か見られたことである。現在、総合日本語 C コースは、読解→話し合い→発表または作文という流れをとっているが、この機械的な流れには 2 つの問題点が挙げられる。まずは、流れの中で課題量の調整が十分になされていないため、後半に負担が集中し、学生が能力を十分に発揮できない点にある。この点については、学生の語学力の向上にとって有効な課題内容を質と量の両面から検討し、内容を精査する必要があるだろう。もう一点は、発表・作文以外の産出の仕方や評価を検討し、学生がツールに頼らない（頼れない）方法を考えることである。一案としては、先述した配慮（仲介）やコミュニケーションに対して評価を与える、あるいは、教師やクラスメイトからのフィードバックをどの程度受け止め、改善に繋がったかを評価する等ができるかもしれない。引き続き検討を重ねたい。

## <総合日本語 4～6D>

担当者名： 小澤咲

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 17 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

## 授業の方法

クラスでは、視聴覚教材 DVD 「しばわんこ和の心」を軸とし、ディスカッションや発表、作文などのタスクを通じて「日本の四季」、「日本の伝統行事」などのテーマについての理解を深めた。1 課「冬」、2 課「春」、3 課「夏・秋」の順に学び、それぞれの課ごとに担当したことばの意味を調べて発表した。その上で、グループディスカッション、ミニ発表や作文など、内容に応じた様々な活動を通して日本語の総合的な運用力向上を目指した。学期末にはそれぞれの関心のあるテーマについての最終プレゼンテーションを実施した。

## 結果と課題

今学期は履修者の人数が多く昨年度の 3 倍弱となった上、日本語 4 から 6 までレベルの異なる履修者が混在し、また支援対象となる学生も複数名いたため、それぞれが理解しやすいように留意しながら進める必要があった。全体にとって無理のないクラス運営になるよう考慮し、その中で履修者の様子や人数に応じ、発表スケジュール等も調整した。

クラスへの参加態度は大部分がとても積極的であった一方、一部には遅刻・欠席が目立つなどやや受動的な学生もいた。しかし、積極的な姿勢で発言し活動に取り組む学生からまずは発言を引き出すことで、クラスの雰囲気は活発になり、受動的な学生も参加しやすい環境になっていったように思う。クラス活動では学生同士でのディスカッションや共同発表などの課題も課し、異なる背景・知識を持った者同士、互いに助け合いながら理解を深めるように留意した。発表形式は OHC も使ったが、OHC ではクラスの中央に立って発表することが困難であったことなどから、後半は学生も使い慣れた PPT の使用を中心とした。その場合、人数が多いことから円滑な発表のため事前にファイルを提出させるなどの工夫が必要となった。発表の際にはレジユメも冊子形式で配布し、聞き取りや語彙に不安のある履修者にとって、クラスメイトの発表内容理解の手助けとなった。

クラスを通じ、何気なく見落としがちな年中行事についての知識を得、また学習を通して理解を深める中で日本の四季の楽しみ方についてもより関心と理解が深まったようである。今後もこの科目では、日本語を学ぶだけでなく、日本文化への理解とその楽しみ方を学ぶことで、教室の外の実際の日本文化を味わう一助となるようにしていきたいと考える。

## 2024 年度 漢字 授業記録

### コースの概要

J4以上の学生が履修することができるクラスである。学生は自分で漢字のレベルを選択し、学期中2回ある立教漢字検定に向けて、その範囲の漢字語彙を学習する。

担当者名：＜春学期＞ 三浦綾乃

＜秋学期＞ 小澤咲

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 15 名、秋学期 30 名

使用教材：独自教材、立教漢字検定テキスト

### 授業の方法

#### ＜春学期＞

授業は立教漢字検定のテキストを用いて、各履修者が決めたレベルのテキストに沿って学習を行った。テキストは初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とした。授業は、(1)前回の FB→(2)クイズ→(3)協働学習（漢字発見など）→(4)個別学習（ワークシート）の順に進めた。クイズは毎回のミニクイズに加えて、テキストが終了した後に実施するまとめクイズがあった。また、履修者は好きな漢字語彙を選んで、ポスターを作って発表した。発表のポスターは授業内で作成した。協働学習の「漢字発見」では、履修者は宿題として自身の学習レベルの範囲にある漢字を教室外で見つけて来て、授業内で2～3名のペア・グループになって読み方、意味、用例などを発表した。個別学習は、テキストに対応したワークシートを行った。ワークシートはできるだけ授業内で教師が添削するようにし、完成したものを Canvas に提出させた。ワークシートとクイズのための予習・復習を毎回の宿題としていた。授業の最終回は、プロジェクトの発表に加えて自分の名前の漢字を考える活動、今年目標となる漢字を考えて発表する活動と、コースの振り返りを行った。

#### ＜秋学期＞

立教漢字検定のテキスト（初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G）を用い、各学生が選んだレベル、分野に沿って学習を行った。授業は1学期中に2回実施される漢字検定のスケジュールに合わせて進めた。テキストに沿ったワークシートを中心に個別学習を行い、また毎回の授業開始時に、前回のクラスで学習した漢字のクイズを実施した。協働学習の「漢字発見」では、授業内で4～7名程度のグループになって教室外で見つけて来た漢字について読み方や意味、用例などを発表した。その他、アクティビティとして、自分の名前を漢字にして各漢字の意味やその漢字を選んだ理由をまとめる

「私の名前の漢字」、熟語を漢字パズル形式で学ぶ活動、今年一年の自分の目標を漢字一字や熟語に込めて発表する「今年の漢字」を実施した。

## 結果と課題

### <春学期>

履修者は15名だったが、うち2名は欠席が多く、課題の未提出やクイズの未受験が続き最終的に授業に来なくなってしまった。今までの漢字クラスでは、初級の履修者が授業内容についてこられずに履修を諦めてしまうことが課題になっていたが、今学期からは中級の学生が対象の授業となったため、テキストのレベルについていけない学生は少なくなった。しかし、自分の実力よりも高いレベルのテキストを選んでしまい、毎週のワークシートの内容が消化できず、クイズで得点できない学生もいた。日本での生活や他の授業・宿題との両立を考えると、少し簡単だと思うレベルを選んだほうが無理なく学習を続けられると思った。レベル決めの際は、この点をより強く学生に伝えたい。

この授業は学生によって学ぶテキストが異なり、ワークシートの個人作業の時間が長い。昨年度の課題を踏まえ、今学期は協働学習の時間をやや長めに取り、漢字発見の他にクラス全体で漢字の成り立ちや部首について考える活動を行い、学生からは好評であった。しかし、学期末の振り返りコメントから、学生は学生同士が一緒に考え、同じ漢字を練習したりする活動をさらに多く希望していたことが明らかとなった。「ワークシートを簡単にしてほしい」、「クイズを少なくしてほしい」という声もあった。この授業の目標の一つは立教漢字検定試験に合格することで、授業内のクイズやワークシートも重要なタスクである。学生が想像する漢字授業と実際の授業の間にギャップがあるため、オリエンテーション時に、授業の目的と授業内容をよく周知することが必要だと感じた。また、14週の中で漢字学習に対するモチベーションが下がってしまう学生もいるため、学生のモチベーションを保ちながら学習を促せるよう、授業内の活動や宿題の内容・量については今後も検討していきたい。

### <秋学期>

履修者は総勢30名となり、大人数が入れるように教室変更が必要となり、また学期中も履修者それぞれへの個別の対応には工夫を要した。しかし、途中で脱落者が出ることなく、履修者全員がクラスの最後まで履修を続けることができた。

「漢字発見」ではそれぞれに漫画や小説、日常生活の中から漢字を見つけてきて、楽しみながら友人と共有することができていた。クラスでは主に立教漢字検定のテキストに沿ったワーク学習を実施したが、その時間については特性のある学生への考慮もあり、クラスがうるさくて集中できないという学生には耳栓の使用も許可した。学生それぞれの学び方を尊重し、ワイワイ友人と助け合い、話しながら勉強したい人、自分一人で黙々と学びたい人など、それぞれのやり方とペースを守って勉強ができるように留意した。中には同じレベルを選んだ人がおらず一人きりで学ばなければならないため時折大変そうにする学生もいたが、それでも自分が理由を持って選んだ漢字を学び通そうとする姿勢が継続してみら

れた。

教員は、全ての活動についてクラス内において紙媒体で添削を行い、必要に応じて直接クラス内で指導した。今学期は概ね自律的に学ぶことのできる学生が多かったとはいえ、毎週の漢字学習の課題量は相当なものであり、クイズの点数も安定せず上下し続けながらも、一生懸命食らいついて学期末まで漕ぎ着けた様子が見られる。今後も、学習モチベーションを維持しやすいように、学生それぞれの状態に可能な限り目を配りながら、サポートしていきたい。

一方、教員一人で行う大人数の学生への添削や対応には、時間的な制約や限界があった。今学期は学生たちの理解や協力的な姿勢もあり大きな問題が起きることはなかったが、もし今後も大人数の履修となる場合は、TAの使用等も検討し、学生対応に使える時間を増やし、より効率的に指導ができるように工夫する必要もあると考える。

## 2024年度 Business Japanese I/Business Japanese A 授業記録

### コースの概要

Business Japanese I/A は、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。Business Japanese I は J4, J5 レベル、Business Japanese A は J6, J7 レベルの学生を対象とする。

### <Business Japanese I>

担当者名：小松満帆、富倉教子、長谷川孝子、小森由里

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 2 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

### 授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンを育成するというコースの目的達成のため、ビジネス場面で使用される日本語力を向上させるべく、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習、談話レベルでの運用力を高めるためのプロジェクト活動、プロジェクトの発表場面として、セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションを柱としてコースを展開した。

授業は、①朝のロールプレイ、②オリジナル教材を用いてのキーフレーズの導入ならびに会話練習／ゲストセッション準備、③帰りのロールプレイという流れで実施した。①と③では、出勤および退勤時

に同僚や上司と交わされることが想定される場面を提示し、日常会話をより自然に行えるよう練習した。②では、商談、会議、電話応対等のビジネス場面で適切に対応できるよう、表現や語彙の導入と練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやりとりを想定した応用練習を行った。また、敬語を含め、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的な社内文書やビジネス文書、メールの書き方などの基本も学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴解練習も取り入れた。

学期中 6 回実施したゲストセッションでは、コース前半は顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品・新戦略の提案を行った。セッションは毎回録画をし、後日フィードバックを行った。

## 結果と課題

学生 2 名は、いずれも出席率が高く、授業中も熱心に取り組んでいた。毎日のクラスだったが、中弛みすることなく、最後まで適度な緊張感を保ちながら学んでいた。毎回のロールプレイも楽しみながら練習し、新しく学んだ表現や文型を使ってゲストセッションで実践を繰り返すことで、ビジネス場面で使用する日本語力が飛躍的に向上し、それが大きな自信に繋がったと思われる。

コース開始時には、それぞれ、コミュニケーション力や文法力など、言語学習における得意不得意が異なっていたが、全く異なるタイプだったことが功を奏したようで、互いの強みに刺激を受け、良い影響を与え合いながら学んでいく様子が見られた。また、いずれも自主的かつ自律的に学習を行う学生で、毎回集中して授業に取り組み、意見交換や質問も積極的に行い、協働しながら成長していく姿が印象的であった。

ゲストセッションでは、緊張感を持ちつつも、実施に実際にビジネスの現場を経験されたゲストの方々との交流を楽しんでいる様子が見られ、日本語力の向上にとどまらず、様々な背景の日本語母語話者と話すことで、着実に経験を積み、自信をつけたようであった。

今後も、忙しいビジネスコースに通う学生たちに負担がかかりすぎることのないよう配慮しつつ、学生にとって学びの大きい授業内容、セッション運営を心掛けていきたい。

## <Business Japanese A>

担当者名：保坂明香、富倉教子、長谷川孝子、小森由里、泉大輔

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 1 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。



## 授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの3本柱で展開した。

本授業では、ゲストセッションに向けて課題を設定し、その課題が達成できるようにさまざまな表現を導入し、実際の現場で使えるようにしている。本年度の課題は「新製品の売り込み」「新製品販売状況報告」「取引先への謝罪と説明」「問題の対応策の検討（社内会議）」「自社説明（プレス）」等である。

## 結果と課題

今学期は、モチベーションを維持し続けられ、授業に熱心に取り組む学生であり、ロールプレイやゲストセッションなども素直にかつ誠実に取り組んでいた。毎回の授業がGSにどう繋がるかを意識させることで、学習者はその日の学習内容の意義を理解し、より効果的に学ぶことができた。授業で表現や文型を学び、GSで実践を繰り返すことで、ビジネス場面で使用する日本語力が飛躍的に向上し、それが大きな自信に繋がったと思われる。また、ビジネス経験豊富なゲストとのセッションは実践的で意義深く、学生は受けたフィードバックやコメントから多くのことを学んだようである。

学生が1名しかいない場合は、モチベーションの維持が難しいこともあるが、今回の成功ケースの「再現性」をどのように担保していくかは課題としたい。ゲストセッションの準備に追われ、言語学習（文法・語彙）が十分に行えなかった点も課題である。

## 2024年度 大学生の日本語／総合日本語6－8 授業記録

### コースの概要

「大学生の日本語」は正規学部生の1年生が大学における学習を日本語で行えるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。「総合日本語6－8」として特別外国人学生、正規大学院生、NEXUS、PEACEの学生も履修可能であり、様々な背景をもつ学生が、共に学ぶ機会を提供している。各科目の詳細は次に示す通りである。

### <大学生の日本語 A6、7、8>

#### コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

#### 授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。

「ニュースの紹介と用語の定義（引用）」、「グラフの説明」、「調査の引用」、「アンケート調査」という4つのテーマで、それぞれ必要な機能表現を導入・練習し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを行った。各回の主な目標となる機能表現が含まれるスライドの1枚分についてはスクリプトも提出させた。また、ディスカッションのための質問も用意させて、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。

テーマ1と3は個人による発表である。グループに分かれて発表とディスカッションをし、自己評価と学生間評価をさせ、後日、教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて、改めて発表をした。テーマ2と4はグループによる発表である。Google スライドを用いてグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。テーマ4ではGoogle フォームを用いてアンケート調査を実施し、その内容を発表した。

上記の発表の他に、即興で短いスピーチをする練習も取り入れた。その場で与えられたトピックについて準備をして、スライドを使うことなく、グループの中でお互いにスピーチをし合うという活動である。また、キャリアセンターと連携し、留学生のための就職ガイドの動画を視聴させて、リアクションペーパーを書く活動も行った。

## 使用教材

独自教材

## [文学]

担当者名：平山紫帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

## 結果と課題

学期を通じて、学生たちの授業態度は全体的に熱心であり、授業に積極的に取り組んでいた。教師からの問いかけに対しても反応がよく、進んで発言する学生も多かった。また、グループ活動においても、多くの学生が積極的に参加し、活発なディスカッションを行う姿が見受けられた。

一方で、課題もある。今学期の学生の中には、教師からの指示や説明を理解するのに時間がかかる学生がおり、授業の進行に遅れが生じることがあった。また、コミュニケーションが苦手な学生も数名おり、ペアやグループ活動にうまく参加できないケースも見られた。これらの課題を踏まえ、今後は指示や説明を明確にするとともに、学生がグループ活動に参加しやすくするための個別のフォローをきめ細やかにしていきたい。

## [社会・経営]

担当者名：鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名（総合日本語 6-8A 1 名、他 8 名）

### 結果と課題

今学期の履修者のうち、1 名は授業開始から欠席であったが、残り 8 名は全授業に出席した。学生達は熱心に授業を聞き、積極的に活動に参加し、課題にも真摯に取り組んでいた。学生達にとって、日本語での発表は初めてであったが、4 回のプレゼンテーションを通して、資料の探し方、データの読み方、また、口頭表現やパワーポイントの作成方法等を身に付けることができたと思う。さらに、グループワークを通して、相手の意見を聴く力、自分の考えを相手に伝える力等も養えたといえる。授業後の振り返りシートには、回を追うごとにプレゼンテーションスキルが向上したこと、グループワークやリーダーシップに必要なスキルを学んだこと、また、グループワークを通して得られた気づきなどが書かれていた。次の課題としては、学生達が言及したリーダーシップに必要なスキル以外のスキルを獲得していくための授業作りを考えていきたい。

## [経済・理学]

担当者名：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 11 名（総合日本語 6-8A 1 名、他 10 名）

### 結果と課題

本クラスのひとつの課題は、レベル差の対応であった。4 回の発表のうち、2 回がグループ発表であったため、受講生一人ひとりの興味関心や学習スタイルなどを考慮し、受講生全員が積極的に参加できるように、グループ編成に工夫を重ねた。その結果、受講生同士で互いの悩みや課題を共有する姿勢がみられ、かつ教師への質問に積極的な受講生も多かったため、グループ発表を準備する過程にトラブルはなかった。また、多くの学生が課題に一生懸命に取り組んでいたため、最終発表では、全グループが 1 回目の時よりも完成度の高いプレゼンテーションを行った。しかし、どのグループに参加をしても消極的な態度をとる学生が 1 名いたため、常にリーダーシップを発揮する受講生には大きな負担があったのではないかと思われる。レベル差の対応とともに、受講生一人ひとりが大学での学びに積極的に参加できるようにするためには、どのような働きかけが必要なのかについて、今後さらに工夫を重ねていきたい。

## [法学・異文化]

担当者名：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 18 名（PEACE2 名、総合日本語 6-8A1 名、他 15 名）

### 結果と課題

本クラスは、「大学生の日本語 A」の履修者 15 名、「総合日本語 6-8A」の履修者 1 名、「PEACE6E」の履修者 2 名が受講した。他学部のクラスより履修者が多く、国際色豊かであったこともあり、発表テーマが多様であった。出席率、課題提出率が高く、意欲的に授業活動に取り組む学生が多かった点、クラス中で良好で、グループワークでは助け合いながら準備を進め、協働をしながら学生間での学びが深まった点もよかった点である。課題としては、最終発表の準備と聴衆を意識した発表の仕方が挙げられる。最終発表は、グループでの発表準備に重きをおいてほしかったのだが、調査に注力したことにより、準備が遅れてしまったグループがあった。課題導入時に、課題意義をより強調する必要性を感じた。また、スクリプトを見ながらの発表する履修者が多かったため、秋学期は、聞き手を意識した発表の仕方についてより丁寧に指導を行いたい。

## [観光]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名

### 結果と課題

3名が履修登録していたが、2名休学であったため、実質1名の授業となった。学生の取り組み態度は概ね真面目で、各課題に真摯に取り組んだだけでなく、考察部分では思考を深められる能力もあった。そのため、授業ではテーマを追って「機能と表現」が導入されていくにつれて、発表の完成度も高くなっていき、本授業で目標とする大学で求められる基本のプレゼンテーション力を身につけることができたと思う。課題としては、考察が深くなりすぎ、決められた時間に収まらないことが多かったことである。今後は意見の的を絞って、簡潔に述べることを学んでいって欲しい。また、1名であったため、クラスメイトとの質疑応答やディスカッションができなかったことは残念であったが、特例で2度ボランティアに入ってもらえたため、講師以外とのやりとりも少しは体験できたことは良かったと思う。また今回4つのテーマのうち2つは本来グループで行うものであったが、それもできなかったため、今後グループ活動の体験もできると良いと思う。

## [スポーツウエルネス・政策]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

### 結果と課題

学生は快活で、学ぼうとする意欲があり、授業は常に明るい雰囲気を進めることができた。テーマ1では発表の構成など、基本的なことがつかめず、スライドにも発表にも様々な課題が見られたが、テーマを追うごとに発表の形式を身につけて行き、スライドのサンプルや「機能と表現」もよく参照して、整った発表ができるようになった。テーマ1と3のグループ発表やテーマ2と最終発表作成のためのグループ活動では、グループの構成をなるべく入れ変えるようにしたが、グループのメンバーが入れ変わっても、常に良い協働ができていたことは評価できる。課題としては、発表原稿を読みながら発表することが多かったことと質問があまり出なかったことである。今後は発表者、聞き手双方が協力して、良い発表の場が作れるような能力を身につけることを目指してほしい。

## [心理・福祉]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名

### 結果と課題

個性的な学生が多いクラスで、発表テーマの選び方もユニークなものが多く見られた。またレベルにも差が見られた。ややレベルが低い学生は真面目に各課題に取り組み、基本的な発表の形は身に付けられたのではと思うが、日本語表現や図表の説明の仕方などに課題が残った。一方、レベルが高めの学生は、基本の発表の形式が身につけられただけでなく、語彙や文法の間違いも比較的少なく、視点の独自性や既存の知見との関連付けなどにおいても評価できる部分もあったが、課題で定められた発表時間やスライドの枚数をオーバーしてしまうということが多く見られた。今後は各学生が、それぞれのレベルにおいて各人の課題を明確にし、意識を持って改善していくことで大学の授業で形式、内容両面でよりレベルの高い発表ができるようになることを目指してほしい。

## [GLAP]

「大学生の日本語 A」は「Japanese Language and Japanese Society A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society A」部分を参照のこと。

## <大学生の日本語 B6、7、8>

### コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

### 授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レジュメ、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

『上級日本語教科書 文化へのまなざし』のうち「国際共通語」、「フリーターと仕事」に関する2つのテーマを扱った。資料1は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料2はAとBから各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を学び、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて「国際共通語」についてのレポートを作成し、リライトをした。

### 使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

### [文学]

担当者名：小林友美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期9名

### 結果と課題

出席率、課題の提出率が高く、熱心に参加する履修者が大半であったが、一方で、教師の指示や課題指示とは異なる課題作成をする履修者や課題の未提出が続く履修者など不安な点が見られる履修者も一部いた。そのため、授業中には、学習項目の復習と課題指示を繰り返し伝え、心配な履修者には個別に対応することとした。クラスサイズがほどよく、個別に丁寧にフィードバックできた点はよかった点である。引用の仕方については、なかなか定着しなかったため、全体で複数回復習をする他、各自のレジュメやレポートに詳細にコメントを入れ、口頭でも個別フィードバックをした。また、文学的な表現や独特な言い回しを使用する履修者が複数名いたため、秋学期も正確に書き直して改善することの重要性を強調し、読み手に伝わる論理的な文章作成のための指導法を工夫していきたい。

### [社会・経営]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名（総合日本語 6・8B1 名、他 8 名）

### 結果と課題

今学期は、大学生の日本語 B6、7、8 クラスの学生が 8 名、総合日本語 B6-8 クラスの学生が 1 名の合計 9 名がこのクラスを履修した。履修学生は、自主的かつ積極的に活動に取り組み、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていった。また、授業運営に非常に協力的であったので、一学期間を通して順調に授業を進めることができた。

レジュメに関しては、「テキストの文をそのまま書いている」、「資料の必要な情報が抽出されていない」「不必要な箇所を入れている」等、まだ課題も見られるが、見やすくわかりやすいレジュメとは何かを履修者自身が考え、箇条書きや記号などを用いて、構成や視覚的な工夫が見られた。レポート作成では、引用の仕方、根拠の提示、参考文献の書き方、引用文と自分の意見との関連性等、まだ改善しなければならないことはあるが、レジュメの書き方や論理的なレポートの作成スキルの基本を身につけるという今学期の目標は概ね達成したように思われる。

秋学期のクラスでも練習を通して、今学期学んだことをさらに発展させると共に、レジュメやレポート作成のスキルを学生自身で身につけていってもらいたい。

### [経済・理学]

担当者名：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 15 名（総合日本語 6・8B1 名、他 14 名）

### 結果と課題

今学期は「大学生の日本語 B」の履修者 14 名と「総合日本語 6・8B」の履修者 1 名が受講した。内、復学し履修者や再履修の履修者もいたが、学期末までモチベーションを維持して参加することができた。1 限ということもあり遅刻者もいたが、出席率、課題の提出率は比較的よかった。一方で、日本語のレベルが低い学生や指示とは異なる課題を作成してしまう履修者もいたため、課題指示や説明を繰り返し伝え、個別対応を続けた。また、各自のレジュメやレポートに詳細にコメントを入れ、口頭でも個別フィードバックをした。これにより、2 回目のレジュメでは、コツを掴み、改善が見られた。また、専門科目でも本科目で獲得したライティングスキルが活かされたという声も挙がった。この一学期で、大学で学習するスタイルやレポート作成のプロセスにも慣れたと思うので、秋学期の「大学生の日本語 D」でも引き続き、運用力向上に向けて意欲的に取り組んでほしい。

## [法学・異文化]

担当者名：嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 19 名（PEACE 2 名、総合日本語 6-8B 1 名、他 16 名）

### 結果と課題

真面目な学生がほとんどであり、遅刻や欠席もなく、提出物も期日までに出していた。そのような取り組みの中で、アカデミックライティングの基礎は十分に身についたのではないかと考えている。課題としては、人数が比較的多かったため、一人一人に口頭でフィードバックを与えることができなかったことがあげられる。赤ペンで書いたフィードバックが、修正稿で反映されていないこともあり、紙面上で伝えることの難しさを感じた。人数が多い中でも、どのように一人一人に正確にフィードバックを伝えられるかが、教師としての課題である。

## [観光]

担当者名：小林千種

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名

### 結果と課題

休学の学生が 2 名いたため、1 名のみのクラスとなった。早朝に起きることが難しいようで遅刻が目立ったが、学生自身は非常に真面目で、課題等も全て提出し、やる気がある様子だった。教師側が学生役となり 2 人でディスカッションを行ったが、来学期は複数人との発話機会を増やすためにビジターセッション等を設けることを検討しようと思う。

## [スポーツウエルネス・政策]

担当者名：森山仁美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

### 結果と課題

学生たちは大変真面目で、出席率も良好で、課題も全員期日を守って提出した。また、指示されたことをすぐに行動に移してくれたため、大変指導しやすいクラスであった。受講生が 9 人だったため、レジュメやレポートのフィードバックには個別指導を取り入れた。これまで日本語でレジュメもレポートも書いたことのない学生が大半であったが、レジュメに関しては、コースを通して 2 種類の資料を読



み、それぞれの資料に対してレジюмеを書く練習ができたため、2回目のレジюмеは1回目のものより体裁も整い内容を簡潔にまとめることができるようになった。リアクションペーパーも同様に2回練習したため、2回目には書き方のコツが掴めたようで、書くスピードが上がった。レポートは、まずアウトラインを作成させ、次に原稿の作成をさせるなど段階を経て指導した。見出しの書き方、表記ミス、引用の書き方のミスもあったが、概ねフィードバックを活かしよく書けていた。コースの振り返りでは、学生達から、大学で必要な日本語能力を向上させることができ良かった、グループワークやペアワークを通じて他者の意見を尊重しながら自分の考えを表現する方法を学んだという声が聞かれた。今後もできるだけ個別指導を取り入れ、丁寧なフィードバックを心掛けたい。

#### [心理・福祉]

担当者名：小林千種

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期6名

#### 結果と課題

6名全員が真剣に取り組んでおり、課題等も全て提出することができたが、学期途中で1名が体調不良での欠席が目立った。日本語を話すことに自信がない学生が多く、発言を譲る場面が多く見られたことから来学期はより発話機会を設けられるように工夫しようと考えている。

#### [GLAP]

「大学生の日本語 B」は「Japanese Language and Japanese Culture A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture A」部分を参照のこと。

#### <大学生の日本語 C6、7、8>

##### コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

##### 授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、「聴く」「話す」活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションの仕方を身につけることを目指した。

春学期の機能表現を復習しつつ、比較対照、有識者の見解への同意、部分的な同意と反論などの機能表現を導入し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを計4回行った。発表スライドにはディスカッションのための質問も入れて、質疑応答の後でディスカッションをさせた。テーマ1は、各自がまずスライドを作ってグループの中でお互いに発表の練習をして学生間評価をし、さらに教師がスライド

を添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて再度グループの中で発表した。テーマ2とテーマ3はグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。最終課題は個人の発表とし、全員が皆の前で発表した。また、上記のプレゼンテーション以外に、将来の就職活動を見据えて「高校時代に力を入れたこと」というテーマで自己分析をしてグループで共有をし、短い文章にまとめて1分程度のスピーチをするという活動も行った。

## 使用教材

独自教材

## [文学]

担当者名：嶋原耕一

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期10名

## 結果と課題

10名の履修者だったが、1名は1度も出席しなかったため、継続して出席していた学生は9名だった。内8名は春学期からの履修者であり、1名は休学明けの学生だった。コース開始時から、どの学生もアカデミックプレゼンテーションについての基礎的な知識は有しており、どのようにクラスの意義を感じてもらうかが教師としての課題だったと思う。各発表での導入部分を工夫したり、フィードバックをやや厳しくしたりすることで、どうにか「漫然と発表をこなす」ことのないように授業運営をしたつもりである。結果として、全員とはいえないものの、多くの学生が一つ一つの発表に力を入れてくれたと思う。そのような学生には、発表の際の口頭能力の伸長を見ることができた。

## [社会・経営]

担当者名：高嶋幸太

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期8名（総合日本語6-8C1名、他7名）

## 結果と課題

アカデミック・プレゼンテーションを4回実施する機会があったため、どのような発表が望ましいかを回数を重ねるにつれて理解が深まっているように感じた。論理構成やスライドのデザインだけでなく、ディスプレイや原稿を見過ぎずに、聞き手を意識した発表ができるようになっていった。

今後の課題としては、欠席しがちな学生への対応である。特にグループで発表をする場合、欠席が出てしまうと、ほかのメンバーに負担がかかることになるため、そのような事態に備え、メンバー間で密

に連絡などを取っておくことをあらかじめ伝えておく必要があると感じた。

### [経済・理学]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 13 名（総合日本語 6-8C 1 名、他 12 名）

### 結果と課題

13 人の履修者のうち、実際に出席していたのは 12 名であった。出席率が高く、クラスメイト同士協力的で、グループでの発表も概ねうまく取り組んでいた。ただ、学生の中には、積極的に取り組む者、言われるがままに従って主体的に関わらない者がおり、役割分担で発表をすると、自分の担当以外のところの確認が甘く、一つの発表としては、バランスがうまくとれていないものもあった。しかし、指摘した後は、それを改善する力があり、回を重ねるにつれ、発表の質は上がっていった。個別発表では、グループ発表では見られないそれぞれの学生の特徴が出ており、実力を発揮している者もいれば、グループでの発表の方がうまくやっていたように思える学生もいた。今後の課題としては、個々の強みを伸ばしつつも、グループで協力してやっていく力も身に着けることである。

### [法学・異文化]

担当者名：嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 29 名（PEACE 6 名、総合日本語 6-8C1 名、他 22 名）

### 結果と課題

29 名の履修者だったが、4 名はほとんど出席しなかったため、学期末まで出席した学生は 25 名だった。秋学期に入学した学生も多く、最初の頃は知識や能力の差に、クラス運営の難しさを感じることもあった。教師として、グループワークでメンバーの組み合わせを工夫したり、できるだけ新しい学生への声かけを続けたりして、学生らが安心して学び合えるような環境を作ろうと意識したつもりである。結果として、コース中盤からは学生同士の交流も増え、継続して出席していた学生については、着実な能力の向上が見られたと思う。特に秋学期に入学した学生については、アカデミックプレゼンテーションに既に慣れていた春からの学生よりも、能力の伸長が大きかったと感じている。

### [観光]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

### 結果と課題

3名の登録があったが、休学、連続欠席が1名ずつおり、実質1名の履修であった。学生の態度は概ね真面目で、各課題に真摯に取り組む様子が見られた。その結果、本授業で目指した「比較」、「同意」、「同意と反論」などにおいて、資料を引用し、紹介し、自分の考えを深め発表することができ、各テーマの目標は達成できたと思う。春学期に課題としていた時間が超過しがちな問題は、スライドの見直し、「機能と表現」の導入により、整理されてきたが、今後も継続して簡潔な発表を目指すことを意識してほしい。受講者が1名であったため、特例で学期中2度日本人ボランティアの参加を募った。その結果、講師以外から質問を受ける練習やディスカッションの経験もできただけでなく、ボランティアの発言からわかりやすい意見の述べ方なども学べたことは良かったと思う。

### [スポーツウエルネス・政策]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 9 名

### 結果と課題

学生は快活で、授業にも積極的に参加できていた。春学期に発表の基礎を学んでいたため、資料の作成などにおいて大きな問題はなく、本授業で課題とする「比較」「同意」「同意と反論」の各テーマで資料を引用し、意見を述べるという構成での発表は全員ができるようになった。春学期には気になった発表原稿を読みながら発表することも少なくなった。2回目と3回目のグループ発表も、協力的に取り組んでいたため、担当部分の責任を果たすことだけでなく、発表全体の論理展開を確認することなど、グループ活動からの学びもあったのではと思う。課題としては自分達の発表に注力する傾向があり、他社の発表の際、あまり積極的に質問が出なかったことである。テーマ 3 以降はこちらから質問を促したことで、質問が出たが、今後は他社の発表も能動的に聞き、自発的に質問し、良い聞き手となることも目指してほしい。

### [心理・福祉]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 6 名

## 結果と課題

学生は概ね真面目で、各テーマに沿った発表に真摯に取り組む様子が見られた。また春学期に発表の基礎が身につけていたことで、テーマ1から発表らしい発表ができていたと思う。本授業は「比較」「同意」「同意と反論」という各テーマの構成で資料を引用し、考察を深めることを目標に進められたが、いずれの学生もそれぞれのテーマの目指す目標には到達できたと思う。課題としては、テーマ2とテーマ3の資料を引用して意見を述べるというパターン機能表現において、引用と考察が明確でない発表があったことである。また、このクラスでは独自の意見を述べることも多く、その結果、資料と考察との整合性を欠くこともあった。今後は、基本的な引用や意見述べて使われる文末表現をしっかりと身につけるとともに、独自性と既存の知見とがうまく繋がっていることにも気をつけながら発表できるようになると良いと思う。質疑応答の活発なクラスであったが、質問も回答も冗長になり気味であったので、簡潔な質疑応答ができるようになることも目指してほしい。

## [GLAP]

「大学生の日本語 C」 は「Japanese Language and Japanese Society B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society B」部分を参照のこと。

## <大学生の日本語 D6、7、8>

### コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

### 授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、「読む」「書く」活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な力を身につけることを目指した。

学期の前半は『上級日本語教科書 文化へのまなざし』の「個性と学び」、後半は生教材の「AI」に関する読み物を扱った。学期の前半と後半それぞれ、資料1は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料2はAとBの読み物を分担して読み、その内容について発表できるようにレジユメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を指導し、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。春学期の大学生のBでは直接引用を中心に学んだが、秋学期の大学生の日本語Dでは直接引用の復習と共に間接引用も扱い、総合的に引用の練習を行った。

### 使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社。

井上智洋、2018、『人工知能と経済の未来——2030年雇用大崩壊』、文春新書。

小林雅一、2017、『AIの衝撃——人工知能は人類の敵か』、講談社。

## [文学]

担当者名：小林友美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期9名

## 結果と課題

今学期は、春学期の履修者に、1名復学した学生が加わった。全体的に出席率や課題提出率は比較的好かったが、一部、課題を遅れて提出する履修者や課題指示とは異なる課題を提出する履修者もいた。レポート作成やレジュメ作成では、春学期に学習した直接引用は身に着けた印象であったが、間接引用や図表の挿入に関しては課題が残る履修者がいた。授業では、成果物にコメントを付けたファイルを返却するほか、口頭でも個別フィードバックすることにしたため、リライトでは、改善されたように感じた。一年を通して、本科目の目標は概ね達成したように思われる。本科目で習得したアカデミック・ライティングスキルを、専門科目でも発展させてもらいたい。

## [社会・経営]

担当者名：長島明子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期9名（総合日本語6-8D1名、他8名）

## 結果と課題

今学期は全員が春学期からの継続生だった。9名のうち1名は初回から欠席し、もう1名は途中で休学したので、最後まで出席したのは7名だった。この7名は積極的にクラスでの活動に参加し、課題にも熱心に取り組んだ。ただ、コース途中から体調不良で欠席や課題提出が遅れる学生が数名いた。レジュメは2つの資料を読解して2回書いたが、全員2回目のほうが内容の要点を押さえてうまくまとめられていた。レポートは内容、構成、論の進め方などはよくできており、レポートの基本的な書き方は身についたが、引用のしかたや参考文献の書き方には細かいミスがあった。リアクションペーパーについては2回目のほうが資料の内容をよく理解して、自分の意見が述べられていた。ただ、今一歩踏み込んだ意見を述べたのは一部の学生にとどまった。今後は資料を深く読み込めるよう、授業を工夫したいと考えている。

## [経済・理学]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 15 名（総合日本語 6-8D1 名、他 14 名）

### 結果と課題

今学期は、大学生の日本語 D7、8 クラスの学生が 14 名、総合日本語 D6-8 クラスの学生が 1 名の合計 15 名がこのクラスを履修した。履修学生は、春学期に「大学生の日本語 B」「総合日本語 B6-8」を履修しており、授業の進め方についてはすでに把握していたので、ペアやグループ活動を多用し、自主的かつ積極的に課題に取り組んでいてもらった。締め切りまでに課題を提出できなかった学生もいたが、各々の学生は、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていった。

今学期残念だった点は、学期の前半から遅刻が多かったことである。授業開始時にクラスにいたのが数名で、その後遅れて学生が教室に入ってくるが多々あった。このクラス以外の授業の課題も夜遅くまで取り組んでいたようであるが、今後は時間管理の意識を持って授業に臨む必要があるだろう。

秋学期も春学期と同様に、レジュメやレポートの書き方を学んだ。レジュメに関しては、正確な日本語でのまとめ方（要約）、箇条書きにしておらず文章で作成、必要な情報の整理が不十分などの課題も見られたが、構成や視覚的な工夫がなされていて、これまでに学んだことが活かされていた。レポート作成では、引用の仕方や参考文献の書き方、事実なのか自分の意見なのかがわかりにくい、引用した内容と自分の意見との関連性が見られないなどの課題があった。レジュメもレポートも各々課題はあったが、学生は第 1 稿のフィードバックをしっかりと聞いており、修正版ではきちんとフィードバックの内容が反映されていた。

このクラスの目標は概ね達成したように思われるが、今後は自分の課題点を常に意識して、履修課題に自主的に取り組んでいてもらいたい。

### [法学・異文化]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 31 名（PEACE6 名、総合日本語 6-8D1 名、他 24 名）

### 結果と課題

今学期も 30 名近くの学生が履修していた。配慮の必要な学生がいたり、本クラスの履修の意義が見いだせず不満を訴える学生がいたり、数名の学生のケアが必要であった。クラスが大きいために一人一人に向き合う時間は限られており、それ自体がこのような大人数クラスの課題と言える。一方、クラス内課題の提出状況や成果物の内容は非常に高く、指摘したことは次には改善されている人がほとんどであった。一人一人にきめ細かい指導はできなかったが、修正されたレポートやレジュメ、リアクションペーパーなどを見てみるとこちらの意図が伝わって、改善されていることがわかった際は、学生が理解

していることを確認でき嬉しく思った。

#### [観光]

担当者名：山口紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

#### 結果と課題

3名の履修登録があったが、1名が学期のはじめから休学、もう1名は一度も出席せず、春学期に続いて学生1名だけの授業となった。本人から他のクラスと統合してほしいという希望があったが、それが叶わなくても不平を言うでもなく、まじめに課題に取り組んでいた。レジュメやレポートのピアレスポンスやディスカッションは、教師が相手役を務め、他のクラスと同様の授業内容にするよう留意した。深く物事を考え、自分の意見を明確に言える学生で、1名だけでもディスカッションは毎回充実したものだ。提出課題の内容もよく、特にリライト後の改善度が高かった。本授業の目的を達成したと言えるだろう。

#### [スポーツウエルネス・政策]

担当者名：森山仁美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 9 名

#### 結果と課題

全員が春学期から引き続き履修した学生であり、クラス活動には積極的に参加した。課題の提出についても全員が期日を守り、クラス全体で熱心に取り組む姿勢が見られた。その結果、レジュメ作成においては、グラフの説明や一文の長さを工夫し、読み手にとって分かりやすい資料を意識して作成できるようになった。また、レポート作成では春学期の学習を活かしつつ、間接引用や要約にも取り組んだ。アウトライン作成の段階まで何度も学生とやり取りを重ねたことで、構成が整い、論旨が一貫した内容のレポートに仕上がった。引用表現の書き方にはまだ細かいミスが見られるものの、自分の意見を論理的に述べる日本語力は概ね身に付いたと考えられる。今後の課題としては、引用表現の正確な書き方が挙げられる。この点については、さらなる練習を重ねることで、確実に定着させていきたいと思う。

#### [心理・福祉]

担当者名：山口紀子

授業コマ数：週 1 コマ



履修者数：秋学期 6 名

## 結果と課題

履修者は 6 名であった。1 限の授業であったため、遅刻がちの学生もいたが、どの学生も授業中は非常にまじめで、熱心に課題に取り組み、課題の提出率も高かった。全員が春学期からの継続履修であり、レジュメやレポートなどの書き方、グループワークの進め方などがある程度身につけており、スケジュールは順調に進められた。最終日の振り返りでは、「特に成長したと思う点」としてアカデミックな日本語表現の知識・アカデミックな文章を書く力に加え、発表する力・ディスカッション力を挙げた学生が多かった。本授業の目的はおおむね達成したといえるのではないだろうか。授業の内容については、ほとんどの学生がレジュメやアウトライン、レポートの作成と、それに対する教師の FB が「役に立った」と感じていた。ただし、リライトへの評価が低かったことから、今後はリライトによる改善の重要性に注意を向けた指導を心掛けたい。

## [GLAP]

「大学生の日本語 D」 は「Japanese Language and Japanese Culture B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture B」部分を参照のこと。

## 2024 年度 NEXUS 日本語科目 授業記録

### コースの概要

本学では 2022 年 9 月より新しい外国人留学生受け入れ制度「Rikkyo Study Project」を開始し、より多くの外国人留学生を受け入れ、本学内にて一層の国際交流を図ることになった。このうち NEXUS プログラムは、入試時点では日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる日本語能力（日本語能力試験 N3 程度）を目安として求めている。NEXUS 日本語科目は、9 月に入学した正規学部生が 4 月から既存の学部カリキュラム（日本語による授業）で学べるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。各科目の詳細は次に示す通りである。

### <NEXUS 日本語 A>

担当者名：<秋学期>小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

資料を読んでその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加

できるようになることを目指す。

### 授業の方法

読解教材を軸とし、ディスカッション、リアクションペーパーの作成、分担読解、レジュメ作成、プレゼンテーション、小レポート作成など、様々な練習を行った。読解教材は、「若者」、「観光」、「創造性」に関する記事を使用した。授業では、最初に記事を読む前に関連するトピックについて話し合い、その後、各自が読解に取り組む流れで進めた。読解後は、読解内容の確認や前述した様々な練習を通して、読解内容の理解を深め、意見を述べる力に繋げていった。最終課題は、「創造性を育むためにはどのような教育が必要か」というテーマで小レポートを書くことを課し、最終日にレポート内容の発表を行った。

### 結果と課題

履修者は3名であり、全員が大変熱心に授業に参加していた。少々積極性には欠けるものの、指名すると自分の意見や国の状況をきちんと述べることができる学生達であった。リアクションペーパーの作成では、学期前半は、表面的で具体性に欠けたものや、引用と意見の書き分けが不明瞭なものがあったが、回を重ねるごとに改善されていった。最終課題の小レポートでは、構成を意識し、具体的な内容で自分の意見を論述することができたように感じる。引き続き、リアクションペーパーのフィードバックにおける効果的な方法や履修者に合わせたサポートの仕方について考えていきたい。

## <NEXUS 日本語 B>

担当者名：<秋学期>山内薫

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期3名

使用教材：独自教材

### コースの目標

資料を読んだり、調査をしたりして、その内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

### 授業の方法

本クラスでは、近年の消費者行動の話題を軸とし、ディスカッションやプレゼンテーションを行った。具体的には、近年の消費者行動の連載記事について、同一の内容あるいは担当箇所を各自で読解した後、ペアで理解を深めながら要点を整理し、スライドを作成した。また、スライドには、担当箇所に関連する独自の視点から立てたディスカッションの問いを盛り込んだ。作成後は、一人10分程度の発表を行った。連載記事の読解後は、定期的にリアクションペーパーの作成を行った。

また、学期中盤には、アンケート調査活動を行った。まず、近年の消費者行動の話題に関する各自のテーマと問いを考え、アンケート調査を実施した。その上で、スライドを作成し、日本人学生 3 名の参加のもとで 20 分程度のプレゼンテーション及び質疑応答を行った。また、プレゼンテーション後に、小レポートの作成及びリライトを行った。本活動においては、毎週、担当教師からフィードバックを受けながら、段階的に進めた。

## 結果と課題

本クラスは大変和やかで、学生間の関係性も良好なクラスであった。自発的に発言する学生は少なかったものの、3 名とも担当教員からの問いかけに的確に応答し、各自の意見や考えを示すことができていた。断続的に欠席した学生 1 名はスケジュールどおりに課題を進めることができなかったが、授業に出席する際には大変授業態度が良く、積極的な活動態度は、他の学生達に大変良い学びとなっていた様子が窺われた。また、スケジュール通りに進められていた学生たちにおいては、担当教員からのフィードバックを積極的に取り入れ、それぞれの日本語力の強み、弱みを理解し、段階的に日本語力を伸ばしていく様子が窺われた。特に印象的であったのが、本クラスだけではなく、NEXUS の全科目における学びと日本人学生たちとの交流などを関連付けていることであった。例えば、本クラスの読解や要約作成、発表において、本クラスの担当教員からのフィードバックに加え、NEXUS の他クラスの課題や発表で学んだことやフィードバックを取り入れることで、さらにより良い内容をつくろうとする姿勢で挑んでいた。

現在も NEXUS ではコーディネーターの先生のもとで、授業報告などを通じた連携があるが、本学期の学生たちの様子より、連携の重要性を強く感じた。今後はさらに学生たちが NEXUS の全科目における学びと日本人学生たちとの交流などを関連付けて、各学生のペースで学習を進められるような工夫を考えていきたい。

## <NEXUS 日本語 C>

担当者名：<秋学期>小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

### コースの目標

視聴覚教材を視聴してその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

### 授業の方法

10 分ほどのテレビ番組を視聴覚教材とし、番組内容に関する練習問題をして内容の理解を確認したうえで、ディスカッションしリアクションペーパーを作成させた。コースを通して、「市役所の仕事」「高

度経済成長」「SDGs」「男女平等」「少子高齢化」「選挙」と6つのテーマを取り上げた。「市役所の仕事」に関しては、ビジターセッションを設け、日本人学生とディスカッションを行った。「男女平等」では、テレビ番組に関連させて学生の国における男女の在り方について分析し、PPTを用いたプレゼンテーションを行い、小レポートを作成させた。小レポートはフィードバックをして修正稿を提出させた。

## 結果と課題

履修学生3名はみな熱心で、どのテーマにも前向きに取り組んでいた。コース開始当初は、聞く力が弱かったりディスカッションでも1~2文でしか自分の意見を述べたりすることができない学生もいたが、出席の回数に比例して、日本語の力が徐々に伸びていった。ディスカッションではまとまった内容を話すことができるようになり、クラスメイトの意見に対してコメントをしたり、クラスメイトに発言を促したりすることができるようになった。リアクションペーパーも、10分の時間を与えても3文ほどしか書けなかったのが、コース後半には番組の内容に言及した上で、印象に残った点とその理由、日本と学生の国との比較などを簡潔にまとめることができるようになった。ビジターセッションに参加してくれた日本人学生とも個人的に交流を深めていたようで、クラス外での日本人学生とのやり取りも学生たちの日本語力向上に貢献したと思われる。

## <NEXUS 日本語 D>

担当者名：<秋学期>小森由里

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期3名

使用教材：独自教材

## コースの目標

視聴覚教材を視聴したり、資料を読んだりして、その内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

## 授業の方法

「都市問題」と「メディアリテラシー」という2つのテーマを取り上げた。「都市問題」については、20分ほどのテレビ番組3本を視聴覚教材とし、聞き取った内容をメモさせたり内容に関する練習問題をさせて番組の理解を確認したうえで、ディスカッションを行いリアクションペーパーを作成させた。また、オーディエンスとして日本人学生を招き、学生の国の都市問題についてPPTを用いたプレゼンテーションを行い、小レポートを作成させた。「メディアリテラシー」に関しても同様に、20分のテレビ番組を教材として聞き取り練習、ディスカッションを行った。さらに、メディアリテラシーについての資料を分担読解し、担当箇所の内容を授業内でPPTにまとめて発表させた。

## 結果と課題

履修学生 3 名は真面目に授業に臨んでいた。学生たちは、次の学期から日本人学生と共に学部で学ぶことを常に意識しており、日本語をしっかりと身につけたいと大変意欲的だった。それは学びの姿勢に顕著に現れていた。一度注意された点は二度と間違えないようにしようと心がけており、レポートでの引用の仕方や参考文献の書き方、PPT スライドのまとめ方など、教員からの注意に留意し、レポートの書き直しやスライドの作成を行っていた。

学生たちの聞く力も話す力も確実に向上しており、コース終盤に行った分担読解から、読む力も身につけていることがわかったが、書く力はさらに伸びる余地があったのではないかとみられる。レポートの修正稿は非常によく書けていたが、もう 1 本レポートを書く練習ができれば、日本語の表現力に加え、構成や内容などについてもさらに指導できたのではないかと思われる。

## <NEXUS 日本語 E>

担当者名：<秋学期>数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

学部の学修のために必要な日本語力、姿勢、行動について理解し、実践することができる。また、所属学部が扱う専門書を活用して日本語学習を行い、学部での学修のための日本語力と学習ストラテジーを身に付ける。

## 授業の方法

学期開始時は、各学生が所属学部または学科で指定された図書を読み進められるよう、漢字語彙リストやオンラインツールの利用方法、学部の先輩であるチューターとの活動の進め方、読解ストラテジーなどについて指導した。また、自律的に学ぶ姿勢を養成するために、学期開始時に日本語学習の目標と課題を考える時間を設け、学期中盤と最終日にこれまでにできるようになったことを振り返って、今後の目標と課題を考え、それをクラスで共有させた。

水曜日の NEXUS 日本語 E は金曜日の NEUS 日本語 I と連動して進めており、例年は I クラスの授業までに学部・学科指定の課題図書を読んでワークシートを解き、チューターと活動し、I クラスでその内容について確認しているが、2024 年度秋学期の授業は金曜日始まりだったため、E と I の授業内容を一部入れ替えた。2024 年度は E クラスの授業までに課題図書の予習をしてきて、E クラスでその内容について教師と 1 対 1 で話した。その間、他の学生は発表準備を進め、I クラスで課題図書の内容について発表とディスカッションをし、最後にリアクションペーパーを書くという流れである。

冬休みは、次学期からの講義に備え、各学部に関連のある動画を4つ視聴してノートを取り、リアクションペーパーを書くことを宿題とした。また、春学期からの履修計画についても説明し、春休み中のチューターとの活動についても指導した。

## 結果と課題

3名とも課題に熱心に取り組む学生で、学期を通して日本語力が大きく伸び、専門分野の内容についての基礎的な知識も身につけ、関連する母国の状況について説明したり、自身の意見を述べたりすることができるようになった。

このうち2名は漢字が苦手で、事前に課題図書を読んできてワークシートを解いていても、学期前半は1対1で内容を確認する際、キーワードとなる言葉や易しめの漢字語彙も読めなかったり間違えたりすることがたびたびあった。また、質問に対しても短い答えが多かったり、話すのが非常にゆっくりだったりしたが、学期後半には漢字力も日本語力もついて、難易度の高い漢字以外は読めるようになり、口頭で説明する際もそれらの漢字語彙も使いながらわかりやすく話せるようになった。

学期開始時から漢字力のあった1名も、当初は内容把握を確認するための質問に対して、課題図書の文章を抜き出して答えるだけであったが、次第と自分の言葉でまとめて説明できるようになり、意見もしっかり述べられるようになっていった。

今回は2学部の学生が履修したが、このうち1学部は複数の課題図書を部分的に読むことになっていた。学期中盤にかなり抽象度・難易度の高い読み物があり、その後、またわかりやすい読み物があったので、次年度はこの学部の課題の順番を見直したい。また、NEXUSプログラムは2022、2023年度4名、2024年度3名であったが、次年度は学生数も所属学部も増える見込みのため、課題図書の内容確認の進め方は工夫が必要となるだろう。

## <NEXUS 日本語 F>

併置科目のJ4、5、6文法を参照

## <NEXUS 日本語 G>

担当者名：<秋学期>任ジェヒ

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期3名

使用教材：独自教材

## コースの目標

漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

## 授業の方法

今学期は次の4つの漢字を扱った。

- 1) (入学前課題) 漢字テストの実施 (1週目、2週目)
- 2) シラバスの漢字 (1週目、2週目)
- 3) 漢字に関する基本的な情報 (部首、音符など) (2週目以降、隔週)
- 4) NEXUS 日本語科目の漢字語彙 (2週目以降)

以下、1) から4) について、その詳細を述べる。

1) 入学前課題としていた漢字語彙のクイズを3つ行った後は、今年度も2023年度と同様に、NEXUS生が所属学部で専門科目を受講するときに困難を感じることがないように、学部指定の専門図書にある漢字語彙の習得を最も重要な目標とした。毎週、個々の専門図書を1~2ページ程度音読してもらい、読み間違えた漢字語彙はその場で一緒に確認し、「私のリスト」を作成するようにした。その後は、特に覚えたい漢字語彙を選んでもらい、読み方と筆順、例文を調べてもらった。他のクラスメイトにも覚えてほしい(専門用語以外の)漢字語彙は板書してもらい、例文とともに紹介してもらった。全受講生がリストアップした漢字語彙は毎回教員もメモをし、翌週にクイズ形式で復習を行った。

2) その他、大学生として知る必要があるシラバスの漢字や、漢字学習に必要な基本的な知識も取り入れた。シラバスの漢字は1週目と2週目に扱ったが、大学生として知る必要があるシラバスの漢字や履修登録に必要な漢字を確認した。立教大学の履修要綱にある「単位」「履修」などの漢字語彙やNEXUS日本語科目のシラバスに繰り返して出てくる「目標」「参考文献」「適宜」などの漢字語彙の読み方を確認した。

3~4) 2週目以降は、隔週で音読み・訓読み、漢字の成り立ち、部首、音符、書き順、二字熟語の読み方、接頭辞、連濁を扱い、漢字に対する理解を深めるようにした。また、例文には専門図書以外の日常生活の漢字を使うようにし、多様な漢字語彙に触れるようにした。

また、2週目以降はNEXUSのC、D、Hクラスで扱った、または扱う予定の漢字語彙の読み書きについてクイズを実施した。コーディネーターより各クラスの語彙リストを事前にいただき、JLPTのN2に相当する漢字語彙を中心に毎週読み書き10問を実施した。N1に相当する漢字語彙も一部は扱ったが、学生間にレベル差があったため読みの問題としてのみ出題した。

## 結果と課題

昨年度と同様に全員向上心があり、漢字学習に熱心な学生だった。学期のはじめに感じていた課題は、学生間にみられるレベル差であった。本クラスは個人活動が中心になるため、レベル差対応の必要性をそれほど多くは感じていなかったが、教員とのやり取りや全体で行う復習の際に、漢字に弱い学生が自信をなくし、学習意欲を失ってしまうのではないかと懸念していた。そのため、専門図書の音読や全体で行う復習の時間には、前回または以前より改善できている点を必ずあげてから、今後に向けての個々の課題についてアドバイスするように心がけた。また、「筆順を意識して書く」など、それぞれ

が得意なことをいかして、授業に参加できるようにした。例えば、筆順を意識して書く学生には、板書の機会を多く与えたりするといったことである。教員が心配をしていた学生も自身に不足している点を認識していたようで、漢字学習に割く時間を徐々に増やし、学期の後半に入ってからには多くの漢字が読めるようになっていた。また、「来週先生と一緒に確認する（復習リストの）漢字語彙にこの漢字も入れてほしい」というリクエストが学生から出ることもあった。日本語をはじめ、多くの言語学習においては、教員と学習者両者の努力が重要だということを改めて感じる1学期であった。

昨年度のGクラスの報告では、漢字の読み書きをバランスよく指導すること、受講生が日本で留学生活を送るうえで必要不可欠な漢字をより楽しく学べるようにさまざまな活動を工夫すること、の2点を課題としてあげていた。今学期は音符や筆順など漢字学習に関するさまざまな知識を、2週目から取り入れ、日常生活の漢字語彙を使った例文とともに確認できるようにした。時間に限りはあったものの、多様な漢字の読み書きに触れるようにした点で、少しは改善ができたのではないかと思われる。しかし、「楽しい」漢字クラスであったかどうかについては、学生に調査をしていないため検証できないが、この点については継続課題として今後も工夫を重ねていく必要がある。

## <NEXUS 日本語 H>

担当者名：<秋学期>沢野美由紀

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期3名

使用教材：独自教材

### コースの目標

日常生活と大学生活における聞く力、話す力、書く力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。適切な待遇表現を用いたコミュニケーションをすること、プレゼンテーションをして小レポートを書くことができるようになることを目指す。

### 授業の方法

Hクラスではさまざまな聴解教材を用いて依頼、説明、誘い、許可を求めるなどの場面の聞きとりとロールプレイ、ディスカッションを行い、後半は日本の高校生のための長めのインタビュー教材を使用した。また、コミュニケーションをテーマに自分で質問を設定、日本の学生にインタビューを行って発表し、それをもとにレポートを作成した。

### 結果と課題

今期は3名が受講した。このうち1名は何度か体調を崩すことがあったが、2名はコンスタントに授業に出席し、真摯に課題に取り組んでいた。

話す力を伸ばすため、さまざまな場面を設定しロールプレイを行ったが、学期開始時には表現そのも



のは知識として持っているものの、実際にどのような状況で誰に対して使えるのかについては明確に理解・区別ができておらず、丁寧さが足りなかったり、逆に丁寧すぎたりということもあった。聞き取り練習を行って練習を重ねることで徐々に整理されて適切に表現を選ぶことができるようになった。聴解では語彙そのものを知らなかったり、長音や促音を正確に聞けないこともあったが、忙しい中きちんと復習をしていたようで、語彙数が徐々に増えていた。

インタビュープロジェクトでは、最初に質問を設定する際、どのような回答を求めているのかわからない質問や抽象的すぎる質問、個人の見解なのか一般的な考えを聞いているのかわからない質問などが多く出ていた。そこで、答えられない／答えにくい質問とはどのようなものか、なぜ答えられないのか、望んでいるデータを取るためにはどのように聞けばいいかということを考え、互いの質問を確認し合うなどして調査というものについて学び、データを取ることの難しさ、重要性を認識していった。さらに、それらをまとめたうえでスライドを作成して発表、最後にレポートにしたが、問題の背景の説明、どのように問題提起をすればいいか、本論、結論に至るまでの書き方について学ぶのは大変な作業だったようである。限られた時間の中でそれを何とか形にできたのは学習意欲の高さゆえである。最初は自信なさげに話していた学生たちだが、ディスカッションをする際に小声でも積極的かつ明確に自分の意見を述べることができるようになった。

今後の課題としては、インタビューでの質問のしかたや、発表する際の構成についてどのように指導すればいいかという点である。どうすれば効果的に伝わるかを考えたい。

## <NEXUS 日本語 I>

担当者名：<秋学期>aクラス：数野恵理、bクラス：開講なし

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期 aクラス 3名、bクラス 開講なし

使用教材：独自教材

### コースの目標

所属学部が扱う専門書を活用して日本語学習を行い、学部での学修のための日本語力と学習ストラテジーを身に付ける。

### 授業の方法

金曜日の NEUS 日本語 I は水曜日の NEXUS 日本語 E と連動して進めており、例年は I クラスの授業までに学部・学科指定の課題図書を読んでワークシートを解き、チューターと活動し、I クラスでその内容について教師とチュートリアル形式で話し、他の学生はその間にリアクションペーパーを書いているが、2024 年度秋学期の授業は金曜日始まりだったため、E と I の授業内容を一部入れ替えた。

2024 年度は E クラスの授業までに課題図書の予習をしてきて、E クラスでその内容について教師と 1 対 1 で話し、その間、他の学生は発表準備を進め、I クラスで課題図書の内容について発表とディスカ

セッションをし、最後にリアクションペーパーを書くという流れである。

学期末には授業内で大学のキャリアセンターによる NEXUS プログラム生向けのキャリアガイダンスがあり、日本での就職活動の流れや基礎知識を学んだ。

## 結果と課題

2024 年度は履修者が 3 名で、時間に余裕があったので、水曜日までに読んできた課題図書の内容についてほぼ毎週、発表とディスカッションをすることができた。水曜日にスライドの作成を進め、I クラスの授業開始時にその内容について教師がフィードバックして少し修正をさせたあとで、発表とディスカッションをさせた。内容に間違いがある場合に修正させるだけでなく、背景の紹介が不足している場合に情報を追加させたり、流れがわかりにくい場合には流れを見直させたりすることもできたので、わかりやすい発表につながった。

発表後のディスカッションも学期前半はクラスメイトの意見を聞くだけで終わってしまうことがあったが、学期後半には、意見を聞いた後でそれに対してコメントしたり、ディスカッションを深めたりすることができるようになった。また、専門が異なる学生も発言しやすいように、具体例を述べてから意見を求めるというような相手を思いやったやり取りもできるようになった。

リアクションペーパーも最初は、学んだことをまとめるだけで意見がほとんど述べられていないことがあったが、特に印象に残った部分について取り上げ、課題図書には書かれていない具体例を挙げたり、自身の考えを述べたりして、内容のしっかりしたリアクションペーパーを書くことができるようになった。

昨年度は一度ボランティアの学生を呼んで発表を聞いてディスカッションにも参加してもらったが、2024 年度はボランティアを呼ぶことができなかった。今後はまた学期に一度程度、日本人学生も交えてディスカッションができるといいだろう。2025 年度は NEXUS プログラムの入学生が増える見込みのため、発表の機会は減ると思われるが、リアクションペーパーを毎回書く活動は継続するなどして、課題図書で学んだことについて説明したり意見を述べたりする機会は確保したい。

## <NEXUS 日本語 J>

担当者名：<秋学期>黄慧

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

## コースの目標

資料を読んでその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようにすることを目指す。

## 授業の方法

この授業では、読解力の向上と内容理解の正確性を目指し、精読や輪読を取り入れた。また、ジグソーリーディングやインフォメーションギャップを活用し、資料を深く理解する練習を行った。さらに、記事要約の方法を学び、情報を簡潔にまとめる練習を実施した。グループディスカッションでは、与えられたテーマに基づいて自分の意見を論理的に表現する練習を行った。毎回、前週の読解文から語彙をピックアップし、クイズで確認した。授業の最後には、リアクションペーパーを作成し、意見の述べ方や書き言葉の練習を行った。

## 結果と課題

精読や輪読を通じて、資料の理解が深まり、読解スキルを活用することで情報を整理し、把握する能力が向上した。記事要約を学んだことで、情報を簡潔にまとめるスキルも向上し、要点を把握する力がついた。グループディスカッションでは、論理的に意見を表現することや、他者の意見を尊重しながら議論を進めることができるようになった。この活動を通じて、コミュニケーション能力や批判的に考える力も向上した。また、毎回の語彙確認クイズを通じて語彙の定着が進み、語彙力も向上した。リアクションペーパーを書く活動では、自分の意見を明確に表現する力が養われ、書き言葉のスキルも向上した。

一方で、いくつかの課題が明確になった。まず、情報を迅速かつ正確に整理する力にばらつきがあり、効率的に情報を整理し、要点を素早く把握するスキルを強化する必要がある。次に、グループディスカッションにおいて議論の進行が遅れる学生が見受けられたため、議論を円滑に進める指導方法や発言のタイミングを調整する工夫が求められる。また、語彙の定着については、実際の会話や文章で新たに学んだ語彙を活用する機会が不足しており、語彙を実践的に使用する場を増やすことが課題となる。

## 2024 年度 NEXUS プログラム 学びの精神科目 授業記録

### コースの概要

NEXUS プログラムの学生向けに 2022 年度秋学期に立ち上げた科目である。NEXUS プログラムの学生が、大学で学び始めるにあたり、大学で学ぶこと、また立教大学という場で学ぶことの意味を理解することを目標とする。

### <多文化共生社会と大学—やさしい日本語でともに学び、ともに生きる—>

担当者名：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 2 名

## コースの目標

多文化共生社会とはどのような社会かを自分の言葉で説明することができる。また、日本が目指している多文化共生の形や実現のための方法をヨーロッパやアメリカ、アジアの国々と比較し、それぞれの特徴を知ることによって、日本に暮らす多様な人々が真の意味で共生していくことを可能にするためには、日本に暮らす一人ひとりがどのような態度を持ち、どのように行動していくべきかについて考え、自分の言葉で表現することができる。そして、そのような日本の多文化社会の実現のために、日本の大学は何をすべきかについて考え、自分の言葉で提案することができる。

## 授業の方法

授業は全学共通科目（多彩な学び）「多文化共生社会と日本—やさしい日本語とともに学び、ともに生きる—」（以下、「多文化共生社会と日本」）と一体的に運営した。

「多文化共生社会と日本」の受講生、NEXUS プログラムの学生、教員（「多文化共生社会と日本」の担当者と「多文化共生社会と大学」の担当者）、TA で、週 2 回、やさしい日本語による講義、協同学習（ディスカッション）、個人及びグループ発表などの活動を行った。

また、学期末には本コースの目標が達成できているかを確認するために、日本が目指していくべき多文化共生社会とそのための課題についてレポートを作成することを最終課題として課した。

## 結果と課題

今学期の受講生は同じ学部には所属している 2 名だった。高校を卒業したばかりの受講生が日本の大学で学ぶ力を身につけ、日本における多文化共生について理解を深めることができるように、講義内容のノートテイキング、リアクションペーパーの作成、グループディスカッション、個人及びグループ発表、レポートの作成、資料の読解など種々の課題を課し、その都度フィードバックを行った。また、日本語教育センターで運営している「日本語相談室」学生アドバイザー枠の積極的な利用を推奨し、教室外でも日本人学生との交流を通して日本語を学ぶことができるように促した。

学生アドバイザー枠の利用は昨年度も推奨していたが、今学期は利用の必要性や重要性をさらに強調し、受講生、教員、学生アドバイザー三者間の協力体制の構築にも力を入れた。授業終了後に教師から学生アドバイザーに授業内容やリアクションペーパーのお題、特に確認してほしい点などを事前に伝え、受講生が学生アドバイザー枠 50 分をより効率的に使用できるようにした。また、学生アドバイザーや受講生からも 50 分間の活動についてフィードバックをもらい、教師の介入が必要だと判断した場合は、学生アドバイザー、受講生とも積極的に連絡を取るようにした。その結果、教員の指示がないときも受講生が学生アドバイザー枠を利用し、日本語学習のリソースを活用しようとする積極的な姿が見られた。

なお、昨年度、講義の内容を教員が要約し、その都度共有することが学習意欲に負の影響を与えてし

まうことがあるという点を課題として挙げていたが、受講生から復習に活用できたという声があがったため、今学期も継続した。ただし、受講生と共有するタイミングについては改善を図った。今学期は各自が一人で整理できる時間を与えるために、基本的には3週間に1回のペースで Canvas を介して共有したが、授業内容を振り返ったうえで発表の準備をする必要がある週などは事前に要約を共有するなどして柔軟に対応した。その結果、受講生が教員の要約だけに頼り、メモをとらなかつたり、授業に積極的に参加しなかつたりするといった姿は見られなかった。

今学期の受講生2名も活動に非常に熱心に取り組む学生だったが、グループディスカッションで積極的に発言をするまでは時間がかかった。受講生が日本語の間違いや周囲からの評価を気にせず、積極的に発言し、また楽しくグループに参加できるようにするためには、どのような働きかけが必要なのかについて、今後さらに検討を重ねていく必要がある。

## 2024 年度 国際的協働のためのキャリア実践 授業記録

### コースの概要

教室での学びと就業体験を通して、自分と社会とのつながりを意識する。

### <国際的協働のためのキャリア実践>

担当者名：丸山千歌

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期3名

使用教材：独自教材

### コースの目標

就業体験を通して、大学4年間の学びの先にあるキャリアプランを考えるとともに全学での学び、また所属学部での学びがどう社会と結びついているのかを知る。教室での学びだけではなく、教室外での経験を通して、自分と社会とのつながりを意識するようになる。

### 授業の方法

事前学習、インターンシップ、事後学習の3部により構成する。具体的には春学期中に履修者の選考及び事前研修を経て、夏季休暇中に各企業にインターンとして派遣する。外国人入試による入学者は日本での就業体験、それ以外の学生は日本語非母語話者との協働体験が可能な日本での就業体験を予定している。派遣期間は10日～14日で、秋学期に事後研修を実施する。

## 結果と課題

3名の学生が履修し、2名がインターンシップを行った（計2社）。留学生の就職支援を専門とする方をゲストスピーカーとしてお招きし、事前学習と事後学習に各1回行った。履修動機は、留学生が参加できるインターンシップの機会があまりないから、日本で働くことも視野に入れているので経験してみたい、昨年度とは違う企業でインターンシップをしてみたいというものであった。インターンシップの実施に至るまでの過程では、日程の調整や派遣先の調整等、各学生に変則的な出来事が生じたが、それを通じて感じたことは、インターンシップを経験することと同じくらい、調整が必要になったときの関係者とのコミュニケーションをいかに進めるかという点が重要だということである。これは留学生に限らない話であるが、次年度の授業に盛り込んでいきたいと考えている。

## 2024年度 PEACE プログラム 日本語科目 授業記録

### <PEACE 日本語 1>

#### コースの概要

日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週5日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。なお、J1のコースに準拠する。

#### コースの目標

日本語の表記や発音などを含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすること、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約500語の単語を学習することである。その中で、文法1クラスの目標は、名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、および基本的な助詞、動詞や形容詞の基本的な活用を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることである。

- 1A：文法1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。
- 1B：文法2：文法1で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。
- 1C：聴解・会話：文法1で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。
- 1D：トータルスキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。
- 1E：読解・作文：文法1で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って400字程度の作文を書けるようになること。

## 文型リスト

PEACE1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレッスン	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Exchanging greetings</li> <li>• Learning some survival expressions</li> <li>• Learning the writing system of Japanese language</li> <li>• Learning basic numbers</li> <li>• Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence)</li> <li>• Learning basic words(Date、 Time expressions)</li> </ul>
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Noun sentence ～は～です</li> <li>• Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど</li> <li>• Noun modification(kinking nouns) ～の</li> <li>• Particle “also、 too” ～も</li> <li>• Particle(question marker) ～か</li> <li>• Interrogatives なに・だれ・どこ</li> <li>• Pronominal “one” ～の</li> <li>• ”please give me ---“ ～をください</li> <li>• Counterword ① ～円、個、才、ひとつ</li> <li>• Sentence ending particles ～よ、ね</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Polite speech and casual speech</li> <li>• い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。</li> <li>• Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも</li> <li>• い／な Adjectives as noun modifiers</li> <li>• Interrogatives どんな、どう</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。</li> <li>• Adverbs indicating ‘degree’</li> <li>• Explaining reasons ので、から</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Verb groups、 dictionary form of verbs</li> <li>• Polite and casual verb sentences</li> <li>• Particle を(Object marker)</li> <li>• ～は～を V sentences</li> <li>• Particle で(Location marker)</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Particle で(Instrument marker)</li> <li>• Particle に/で(Destination/direction marker)</li> <li>• Mimetic words ① Eating、 drinking</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Giving and receiving something ①</li> <li>• ~は Space/area/pass を V(motion verbs)</li> <li>• て form of verbs</li> <li>• Making requests ~てください/～ないてください</li> <li>• の : Noun equivalent marker</li> <li>• V て、 V て、 V。</li> <li>• Asking permission/Giving permission/prohibition ~てもいい/～てはいけない</li> <li>• Mimetic words ② Watching、 seeing、 speaking</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ~は Object に V sentence</li> <li>• Topic は V(Intransitive verbs)</li> <li>• Particle に(Time marker)</li> <li>• ~から～まで</li> <li>• Duration on time ~間</li> <li>• Approximate time/approximate quantity ごろ、 ぐらい</li> <li>• Time expressions まえに、 あとで、 てから</li> <li>• ~と思う</li> <li>• ~だろう/だろうと思う</li> <li>• Mimetic words ③ Condition of the body</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Sentence of existence and locatives いる、 ある</li> <li>• Counter word ② ~人、 枚、 冊、 本、 匹、 階</li> <li>• だけ/しか</li> <li>• N1 か N2(or)/N1 も N2 も(both、 neither)</li> <li>• N1 は A、 N2 は B(Contrast は)</li> <li>• Noun と/や、 Noun/adjective/verb て form、 V-たり V-たり Adjective/verb し</li> <li>• ~かもしれない</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>• V-ている(Continuous action、 state)</li> <li>• Verb with clothing 着る、 はく、 ぬぐ、 かぶる、 かける、 する</li> <li>• が used to describe a condition、 scene before one's eyes</li> <li>• ~中(during、 while、 through)</li> </ul>



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう／まだ</li> <li>・～ませんか、～ましょう</li> <li>・Questions word + か／も</li> <li>・～んです ①</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Giving advice ～たほうがいい</li> <li>・ Particle に(amount of frequency per time unit)</li> <li>・ Adverbial usage of adjectives</li> <li>・ Noun になる</li> <li>・ Conditional ① : と</li> <li>・ Chang of state、 condition(adjective + なる)</li> <li>・ Mimetic words ④ Pain</li> </ul>

### <PEACE 日本語 1A>

担当者名：<春学期>開講なし

<秋学期>鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

### 授業の方法

<春学期> 開講なし

<秋学期>

J1 のテキストを使用し、テキストに沿って文法項目を導入した。導入の際、その文型の意味や使い方を確認し、基礎的な活用練習や口頭練習を行って定着を図った。宿題シートは、予習と復習で使用し、毎回の語彙クイズは各自で語彙リストを再度確認した後、実施した。

### 結果と課題

<春学期> 開講なし

<秋学期>

今回は、3名の学生が履修した。学生自ら率先してお互いコミュニケーションを図り、心地よく学ぶための環境作りを行っていた。授業態度も良く、毎回、意欲と目標を持って授業に参加する真面目な学生達であった。ただ、各学生の日本語学習歴や学習スタイルが異なったため、文法項目を理解する上でのスピードに差異が見られた。今後は、その差異をできるだけ縮め、授業内でストレスを持たせないように、授業の工夫を行っていきたい。

## <PEACE 日本語 1B>

担当者名：<春学期> 開講なし

<秋学期> 富倉教子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 3名

使用教材：独自教材

### 授業の方法

<春学期> 開講なし

<秋学期>

このクラスでは教科書に従い各ユニットの文型を導入、かつそれを使った口頭練習を中心に実施。合わせて語彙クイズと語彙の練習を授業の一貫として行った。語彙の練習としては当日扱う課に関連する語彙の文作（元は宿題として用意されていたものを、カリキュラムに沿って当日授業で扱った）。導入はPPTでターゲット項目を含んだ例文や会話文などを提示。学生に読んでもらったり、また質問に対して、ターゲット項目を使って回答してもらったりした。必要に応じて活用表やハンドアウトを配布し、口頭だけでなく、書いて確認するという作業も行った。

### 結果と課題

<春学期> 開講なし

<秋学期>

元々日本語の経験がゼロではない学生達であったせいか、新しい文型について理解に戸惑うといった様子はあまり見られなかったが、やはりその文型を使用しての産出は難しかったようで、正しく文型を使えなかったり、また他の文型と混同してしまったりとなかなか定着できなかった。特に活用に関しては最後まで苦戦をしていた様子が窺えた。また語彙についても頻度が落ちるせいか、定着が難しいようであった。中にはひらがな、カタカナがまだ十分でない学生も見られた。活用は繰り返しクイズなどを行い継続して練習するよう促し、多少の改善は見られたものの、やはり定着するには今後も引き続き使用していくことが要求されるであろう。語彙に関しても同様に、新しい文型と一緒に組み込んで練習するなど、触れる機会を多くしていく必要が感じられた。また今回語彙は宿題として課すことはなかったが、教室外で自律して学習に向かうという意味では今後は宿題として提示していくのも一つかと思われる。一方学生達は毎回授業に熱心に臨み、メモを取るなどして集中して行っている学生も見受けられた。3名と少人数ではあったが、それぞれ考えや意見を発言し、質問なども活発に行い、クラスの活動も積極的に行っていた。

## <PEACE 日本語 1C>

担当者名：<春学期> 開講なし

<秋学期> 森井あずさ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 3名

使用教材：独自教材

### 授業の方法

<春学期> 開講なし

<秋学期>

文法項目を復習してから、クラス内で会話やリスニングの練習を行った。宿題シートはクラスで使用し、問題を解いてもらった後、文法説明を行った。

### 結果と課題

<春学期> 開講なし

<秋学期>

他のクラスと少し違って、学生も緊張感が少なく楽しんでクラスを受けていた。従って文法をどんどん積み重ねていくというよりも、まずは楽しんで練習し、日本語に親しんでもらうことを心掛けた。今後の課題は、楽しむだけでなく、もっと日本語を習得したいという意識を持ってもらうことであると思う。

## <PEACE 日本語 1D>

担当者名：<春学期> 開講なし

<秋学期> 富倉教子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 3名

使用教材：独自教材

### 授業の方法

<春学期> 開講なし

<秋学期>

今学期このクラスではその週に導入された新しい文型や語彙を使って実践的な練習を中心に行った。具体的には導入された文型や語彙、フレーズを使用しての発表や日本人学生との交流を通してのインタビューなどである。日本人学生との交流では毎回ターゲット文型を使った質問事項を事前に用意し、そ

れらを質問したり、また日本人学生からの質問に回答したりするといったような形式で行った。また最後の発表では各自自由なテーマを選び、それに関するアンケート調査を日本人ゲストに実施。その結果を踏まえて発表を行ってもらった。毎回クラスでは文法クイズも実施し、導入された文型を振り返った。

## 結果と課題

<春学期> 開講なし

<秋学期>

履修者は少人数であったが、毎回活発に意見を述べ、積極的に意見交換を行っていた。それは日本人ゲストとの交流も同様に見られ、日本人ゲスト2名に対して履修1名という状態であっても、会話は途切れることなく続けられていた。使用言語としては英語が多くなってしまっている学生もいたが、最初から最後まで日本語だけでコミュニケーションを取ろうと努力している学生の姿も見られた。発表では履修者の能力以上のものを提示してくるケースも一部の学生で見受けられたが、大半は習った文型を上手に使って奮闘しているのが窺えた。総合的には細かいミスなどは見られたが、概ね各自伝えたいことは伝えられていたようであった。クラスの活動全体を通して、文法や語彙、フレーズに関してはまだまだ練習や使用頻度を高めることが必要ではあるが、日本語を聞いたり、話したりすることには少しずつ慣れていったように感じる。

## <PEACE 日本語 1E>

担当者名：<春学期> 開講なし

<秋学期> 武田聡子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 3名

使用教材：独自教材

## 授業の方法

<春学期> 開講なし

<秋学期>

J1の教材を使用して、作文と読解の授業を実施。家庭学習の宿題は基本的には出さず、授業中に実施することとした。しかし実際は、一部の学生が授業中に書き終えることができず宿題とした。

## 結果と課題

<春学期> 開講なし

<秋学期>

3人の学生がいたが、それぞれの弱みと強みが異なっていたため、指導は個別に対応することが多かった。3人の学生の関係はよく、終始いい雰囲気の中で授業は行われた。今後の課題として、複数の学生がいた場合、それぞれの能力に差があることが予想されるため、同様の形式での指導になることだろう。

## <PEACE 日本語 2>

### コースの概要

PEACE 日本語 2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。2024 年度春学期より PEACE 日本語 2 は Task-based 型にコースデザインを変更し、コースを運営している。

### コースの目標

PEACE 日本語 2 では、言語知識やストラテジーの習得を目標とする「言語目標」と、日本に関わる知識や社会文化的な知識、さらには複眼的な視点の習得を目標とする「教養目標」を以下のように設定している。

- ① 言語目標：日本社会において日本語で円滑なコミュニケーションを行うための言語的な目標
  - ・簡単な日本語のコミュニケーションによって、日本で生活する上で最低限必要なことを達成できるようになる。
  - ・わからないことや困ったことに直面した際に類推したり対処したりするためのストラテジーを身につける。
- ② 教養目標：日本の社会文化（＝その週のトピック）に関する理解を深めるための教養的な目標
  - ・日本と自国（あるいはクラスメイトの国）を比較し、自国の文化を相対的・客観的・複眼的に捉えられる。
  - ・その上で、日本と各国の社会文化的な共通点・相違点を（当該レベル相応の）日本語で説明できるようになる。

### 文型リスト

PEACE 日本語 2 で扱った文法項目は以下の通りである。文法項目の提出は J2 に準拠している。J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention: I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです②

	5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形</li> <li>2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~</li> <li>3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」</li> <li>4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N</li> <li>5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」</li> <li>6. のに: Although、Even though *Review のに、が/けど、ても</li> <li>7. Mimetic words ⑥ Feelings</li> </ol>
3	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. V-方 How to V</li> <li>2. Vながら V : Doing two things simultaneously</li> <li>3. Have something with/on、possession、own ~がある</li> <li>4. Obligation: Must / Have to ~なくてはいけない/なくてはならない</li> <li>5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ~ ~なくてもいい</li> <li>6. By (time) : までに / Until (time) まで</li> <li>7. Mimetic words ⑦ Weather</li> </ol>
4	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. When~: ~とき~</li> <li>2. Noun が要る・役に立つ</li> <li>3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・~のなかで一番</li> <li>4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応</li> </ol>
5	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Try doing something and see: ~てみる</li> <li>2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる</li> <li>3. Noun modifiers 名詞修飾</li> <li>4. Mimetic words ⑧ Nature</li> </ol>
6	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞</li> <li>2. Vてある</li> <li>3. Intransitive Vている vs Transitive Vてある</li> <li>4. Mimetic words⑨ : Sleeping</li> <li>5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける</li> </ol>
7	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Vておく</li> <li>2. ~が V みえる・きこえる・する</li> <li>3. Giving and Receiving (favours、some acts) ~てあげる・もらう・くれる</li> <li>4. Want someone to do some action: Vてほしい・もらいたい・いただきたい</li> </ol>

	<p>5. ～が・けど (けれども)</p> <p>6. Imitative words : Caught a Cold ?</p>
8	<p>1. あいだ VS あいだに</p> <p>2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る</p> <p>3. い-adjectives derived from verbs Vにくい/Vやすい</p> <p>4. Expressing Purpose: ために・ように</p> <p>5. Review: Various expressions for purpose</p> <p>6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける</p>
9	<p>1. 伝聞 Hearsay、 Conveying information getting from another person、 media ～そうだ・ということだ・とのことだ</p> <p>2. Vてしまう</p> <p>3. Review: Vている、Vである、Vてみる、Vおく、Vてしまう</p> <p>4. [Question words] か / ～かどうか</p> <p>5. V1 ないで V2 without doing V1、 do V2</p> <p>6. Imitative words : Hitting、 Breaking</p> <p>7. Compound Verbs ③Vなおす・Vかえす</p>
10	<p>1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ</p> <p>2. Decisions: ～ことにする・～ことになる</p> <p>3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている</p> <p>4. 比喩の表現 Expressing Resemblance、 Figurative expressions ～ようだ・ みたいだ</p> <p>5. V-て いく・くる do V and come/go</p> <p>6. Imitative words : Animals、 Birds</p>

<PEACE 日本語 2A>

担当者名 : <春学期> 栃木亜寿香

<秋学期> 高嶋幸太

授業コマ数 : 週 1 コマ

履修者数 : 春学期 2 名、秋学期 4 名

使用教材 : 独自教材

授業の方法

<春学期>

A クラスは「ポストタスク」「プレタスク」「ことばクイズ」「文法学習①」を実施した。「ポストタスク」

では、前週設定した目標や前週の活動に対する振り返りや到達目標を全体で話し、その内容をポートフォリオに記入する活動を行った。また、前週ポートフォリオを作成する際に個人ごとに生じた語彙・表現を「ことばリスト」に記入した。リストから抽出した語彙を「ことばクイズ」として学生ごとに作成し、翌週実施した。「プレタスク」では、トピックに関する背景知識の活性化や、トピックに関する個人ごとの目標設定をおこなった。ポートフォリオ上にトピックごとに設けた共通 QA をもとに、学生同士でディスカッションを行い、ポートフォリオに記入した。また、「文法学習①」ではトピックに関連する J2 文法項目を扱った。文法の用法の確認後、トピックに関連付けた会話練習や短文練習を行った。

#### <秋学期>

PEACE 日本語 2A の基本的な流れとは、トピックの導入とまとめ、そして文法の理解であった。本コースでは、10 個のトピックを扱ったのだが、最初に先行オーガナイザーの活性を目的として、各トピックに関連する質問に答え、クラスメイトと共有する活動を行った。また、各トピックの最後にはまとめとして、振り返りや内省をし、それもクラス間で共有した。また、授業では、トピックのタスクを達成できるよう文法の理解や語彙クイズの実施なども同時に行った。

### 結果と課題

#### <春学期>

トピックに関連した背景知識の拡張や活性化のために、共通の QA を用意し学生同士のディスカッションをおこなった。本コースの目標である個人ごとの目標設定や、個人ごとのストラテジーの習得の足がかりとして大変有効であった。2 名という少人数のクラスではあったが、学生同士が発表しあうことで他者の意見に触れることができた。

また、プレタスクではトピックに関する認識が曖昧であった学生たちも、ポストタスクでは 1 週間の授業を経て堂々と日本語でアウトプットできるようになった。

課題として、トピックに対する個人の興味関心の度合いによって完成度が影響したことである。学生個人の自己評価やモチベーションを第一にする授業形態であるため、トピックに関連した重要語彙であっても、自己評価が高い学生にとっては活動に消極的な場合もあった。

興味が薄いトピックであっても、背景の活性化をする中で新たな学びごとを発見できるよう工夫が必要である。

#### <秋学期>

本コースの履修者は全体的におとなしめで、特にコースの最初のほうではアウトプットをしようとしていたり、自己表現しようとするに関しては、それほど積極的ではなかったが、コースが進むにつれ、アウトプットしようとしていたり、自身と関連させた例文を提示してくれたり、できるようになることの幅を広ったように感じた。また、クラスの後半に取り入れたワードマップやショー・アンド・テルなどの



活動にも進んで取り組んでいた。

今後の課題としては、学習者のエンゲージメントを高めるようなタスクや課題をいかに提示できるかだと思う。授業の前半のほうではお互いにまだ距離があることもあり、学習者から自己表現を引き出そうとしてもなかなかできない場面もあった。学習者との距離感も大切にしつつ、エンゲージメントが高められるような授業を考えていくことが重要だと思われる。

## <PEACE 日本語 2B>

担当者名：<春学期>泉大輔

<秋学期>泉大輔

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 2 名、秋学期 4 名

使用教材：独自教材

### 授業の方法

<春学期>

文法教科書の 1 つの課の文法項目・文型を日本語 2A クラスと連携して導入し、毎週 1 課ずつのペースで進めた。PPT を用いて文法や文型を説明し口頭練習を行ってから、Comprehension check sheet を使用し文法・文型の理解を促した。各課の新しい文型の定着を図るために、毎回 Canvas 上で文法クイズを実施した。

<秋学期>

春学期と同様である。

### 結果と課題

<春学期>

2 名とも熱心に取り組んでいた。一名は PEACE 日本語 1 から J1 相当の文型をしっかりと積み上げており、J2 相当の文型も理解が早く正確な運用ができていた。もう一名は継承語の学生ということもあり、知らない文型がほとんどなく運用も問題がないようであった。ただし、文字が得意ではなく、その点で漢字圏出身のもう一名の学生と互いに得意なことを教え合いながら学びを深められていた。

PEACE 日本語 2B クラスは唯一タスクベース型の本コースの中で通常の文法の授業と同じ形式をとっているが、もう少しその週のトピックに関連する例文などを挙げられるとクラス間の連携にもつながったのではないかと思われる。

<秋学期>

4名の学生は熱心には取り組んでいたが、どんどん練習問題をこなしていく学生と、少しずつしっかり教科書に立ち返って練習問題を解いていく学生に分かれていた。レベル差はほとんどなく、間違えやすい問題も似通ってくるので、理解や産出の難しいものから優先的にクラス内で重点的に扱った。なかなか定着しない文型は翌週も復習を行うといった工夫もしつつ、スパイラル的に一学期の文型学習が進むようにした。タスクベース型コースに移行して以来の課題ではあるが、なかなかことばノートへの記入がBクラスでは難しいため、次学期の課題としたい。

## <PEACE 日本語 2C>

担当者名：<春学期>三浦綾乃

<秋学期>小澤咲

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 2 名、秋学期 4 名

使用教材：独自教材

### 授業の方法

<春学期>

当該週で扱うトピックに関する聴解練習と会話練習を行った。聴解練習は、自作音源・市販の聴解教材・動画サイトで公式チャンネルが公開している動画を使用した。会話練習では学習した項目が日常生活で使えるようになることを目標に、ロールプレイを中心に練習した。聴解練習も会話練習も、履修者が実生活で見たり、聞いたり、話したりできる素材を使用することを心掛けた。授業で学んだ語彙や表現は、次の週の授業でディクテーションクイズを実施することで定着を図った。また、より実践的な練習のために、今学期はビジターセッションを3回行った。履修者の到達度を測るために、学期の中盤と最後に、ロールプレイと質疑応答のパフォーマンスチェックを実施した。

<秋学期>

授業は大きく2部構成で行った。まずはクラスの最初に先週の学習内容からディクテーションクイズを実施し、その後、当該週のテーマに合わせた聴解・会話の活動を行った。聴解のテーマに沿って、実際の学生生活で役に立ちそうな語彙を広げてから会話練習に発展させるなど、学生たちの興味関心やニーズに沿った内容となるよう留意した。

### 結果と課題

<春学期>

履修者は日本語の学習歴や知識量に差がある2名だったが、個々が自分自身の課題・目標に向き合っ

て学びを深め、成長できた一学期であったと感じる。授業では、クラスメイトか教師の限られた人と

しか会話練習ができないので、ビジターセッションで実践的な練習ができたことは履修者にとって有意義であったと思う。学期の前半は学習意欲に波があり、ロールプレイが上手く進まないこともあったが、中間パフォーマンスのFB以降は、履修者が積極的に活動に参加し、楽しんでいる姿が見られた。授業を準備するうえで、前日Aクラスや同日3限のBクラスの授業内容を反映させることが難しかったと感じる。履修者が当該トピックでどのような語彙や表現を学びたいと考え、自分のポートフォリオやことばのリストに記入するかは予想できない。履修者が新たに学んだ語彙や表現を聴解練習や会話練習に取り入れられたら一番いいのだが、準備時間の関係で毎回取り入れることはできなかった。しかし、履修者は授業中、ことばリストの語彙や表現を見返して、自分のロールプレイで使うことがたびたびあった。このようなことばリストの使用は理想的だと言える。今後は、他の曜日の授業内容とどう関連付けながら授業を組み立てられるかを検討したい。また、履修者にことばリストの積極的な活用を促すような会話練習や活動を考えていきたい。

#### <秋学期>

今学期は4名が履修した。5限という時限もあり時折眠気と戦う様子も見られたが、簡単すぎるものよりも少しチャレンジングな課題の方が合う学生が多く、より積極的に、かつ楽しく取り組めるようであった。普段のクラスではそれぞれに学び方が異なりマイペースなところもある4人であったが、聞き取り練習や会話練習への取り組みは真剣で、また試験に対してもクラス内だけに留まらず、クラス外でも互いに協力しながらロールプレイのペアワークの完成度を上げるなど積極的で真摯な取り組みが見られた。学生同士、互いに仲が良いクラスであったため、クラス内だけでなくクラス外での試験勉強等も円滑で、雰囲気も良いクラスであった。一方、5限ということもあり、時折眠気に負けそうになったり会話が中弛みしてしまったりするような場面も見られた。今学期は課題の難易度を調整したり、机間巡視する中で対応したりしたが、今後は適宜学生ボランティアなども活用し、より緊張感と動きのあるクラス運営も検討していきたい。

#### <PEACE 日本語2D>

担当者名：<春学期>末松史

<秋学期>末松史

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期2名、秋学期4名

使用教材：独自教材

#### 授業の方法

<春学期>

- ・メインタスク：当該週のトピックに関連する

- ・当該週のトピックに関連する文章の読解

#### 活動一例

- 会話文の内容理解を確認する読解
- 食べログ等のサイトを使い実践的読解練習
- やさしい日本語ニュースを読み、ディスカッション

- ・漢字学習タスク

- ・「にほんごノート」の漢字リストの漢字を用いたクイズ
- ・毎週単漢字を10個以上見つけて漢字リストに入力する。

#### <秋学期>

- ・メインタスク：その週のトピックに関連する文章を読み、話し合いを通して理解を深める活動を行った。
- ・漢字学習タスク：毎週の学習でわからなかった語彙をリストアップし、自分の「ことばリスト」を作成。翌週にはそのリストから漢字クイズを実施した。

### 結果と課題

#### <春学期>

一言に読解活動といっても、レアリアを使った実践的活動や、ニュースを読んで行うディスカッションといったアカデミックな活動、様々な角度からアプローチから取り組むことができた。結果として彼らの元々持っている能力を引き出し、さらに広げられるような活動ができたと思う。また、日本と自国（あるいはクラスメイトの国）を比較し、文化を相対的・客観的・複眼的に捉え、日本と各国の社会的な共通点・相違点を簡単な日本語で説明する力も身に付けることができた。課題の設定：彼らのレベルに合わせようとすることに必死になり、振り返るともう少し難易度をあげて、彼らにとって挑戦になるような読解活動があってもよかったと思う。例えば、小説を読む、やさしい日本語ではないニュースを読む等。

#### <秋学期>

授業では、レアリアを使った実践的な活動や、ニュースやエッセイを読んで行うディスカッションなど、多様なアプローチを試みた。その結果、学生の既存の能力を引き出しつつ、さらに広げることができた。また、日本と自国（またはクラスメイトの国）の文化を相対的・客観的に捉え、日本と各国の共通点や相違点を簡単な日本語で説明する力を身につけることができた。

一方で課題として、漢字圏の学生にとって該当レベルの読解問題が簡単すぎるため、語彙の難易度を上げる工夫をしたが、それでも読解問題が早く終わってしまうケースが多かった。難易度設定が非常に難しく、より高度な取り組みが求められた。これに対して、既存の教材ではなく、学生が興味を持つ小説や

エッセイを使い、一つの題材をじっくり読む活動を試してみるのも良いかもしれないと考えている。

## <PEACE 日本語 2E>

担当者名：<春学期>嶋原耕一

<秋学期>栃木亜寿香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 2 名、秋学期 4 名

使用教材：独自教材

### 授業の方法

<春学期>

授業は毎回、その週のトピックについて、1週間を通してどのようなことを考えたのか話してもらうことから始めた。メインタスクが「会話」のときはそのままロールプレイやディスカッションに移行し、「作文」のときはその最初の会話をブレインストーミングとし、作文活動へと移行した。書いた作文は教師が修正した後でピアリーディングをしてもらい、学生同士の学び合いや交流も促した。さらに、学期を通してプロジェクト活動も実施した。プロジェクト活動は、テーマの選定、質問項目の作成、日本人学生へのインタビュー、インタビュー結果のまとめ、スライド作成、発表という順に進めた。

<秋学期>

本クラスでは、関連のメインタスクとプロジェクトの2本柱で構成された。各週のトピックに関連するメインタスクとして作文活動を実施し、作文を元としたミニ発表を通じてトピックで得た知識や考えを産出する活動を行った。プロジェクトでは、学生がトピックを選定し、日本人学生へのインタビューや調査を経てPPTを作成し、最終プレゼンテーションを実施した。

### 結果と課題

<春学期>

直前に2Dのクラスがあったため、そのクラスで学んだことや考えたことを会話や作文の活動に活かすように心掛けた。結果として、毎週2Dでどんな読解資料を読んだのか話してくれるようになり、そこからスムーズに会話や作文の活動に入れたと考えている。プロジェクトも初の試みだったが、学生が積極的に取り組んでくれたので、いい発表につながった。自分の興味のあるテーマを選ばせるということが、その後の自律的な取り組み、発表への責任感につながったのではないかと考えている。

<秋学期>

4名のクラスであったが、どの学生も熱心で精力的に課題に取り組んだ。授業当初は学生からの発言やアクションが少なく、タスクへの取り組みも消極的な面がみられたが、ボランティア学生との交流や自らの興味に基づくトピックへの取り組みが進むに連れ、クラス内での会話や質問、ピア活動が活発になり、非常に良い雰囲気となった。本クラスの取り組みが自身の興味・関心を深める自律的学習意欲への刺激となったことは確かであるが、授業内での作文やミニ発表やディスカッション活動が、自信をもって日本語でプレゼンテーションするための礎を作り上げたと考えられる。課題として、文化的背景が同一または近い学生同士のクラスであったためか、他学生への関心や積極的な質疑が講座を通じて乏しかった点が挙げられる。ピアワークや日本語での活発なやりとりを促進させる為、サブトピック提供の工夫をすることが担当教員としての課題である。

## <PEACE 日本語 3>

### コースの概要

PEACE 日本語 3 は、日本語の基礎動詞・形容詞の活用などを習得している者（1,000 語程度の語彙、初級前半の文法等、日常生活の基本的活動（買い物や依頼など）が日本語でできる者を対象とする。2024 年度春学期より PEACE 日本語 3 は Task-based 型にコースデザインを変更し、コースを運営している。

### コースの目標

PEACE 日本語 3 では、言語知識やストラテジーの習得を目標とする「言語目標」と、日本に関わる知識や社会文化的な知識、さらには複眼的な視点の習得を目標とする「教養目標」を以下のように設定している。

①言語目標：日本社会において日本語で円滑なコミュニケーションを行うための言語的な目標

- ・簡単な日本語のコミュニケーションによって、日本で生活する上で最低限必要なことを達成できるようになる。
- ・わからないことや困ったことに直面した際に類推したり対処したりするためのストラテジーを身に着ける。

②教養目標：日本の社会文化（＝その週のトピック）に関する理解を深めるための教養的な目標

- ・日本と自国（あるいはクラスメイトの国）を比較し、自国の文化を相対的・客観的・複眼的に捉えられる。
- ・その上で、日本と各国の社会文化的な共通点・相違点を（当該レベル相応の）日本語で説明できるようになる。

以下、それぞれのコースにおけるコース目標である。

PEACE 日本語 3A：やや複雑な初級文型などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになる。

PEACE 日本語 3B : 文法で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになる。

PEACE 日本語 3C : 文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようにし、未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身に着ける。

PEACE 日本語 3D : 実践的な読解力を身に着ける。具体的には、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して、文章の内容を理解できる力を身に着ける。

PEACE 日本語 3E : 文法で習った文型や語彙を正確に運用できるようにし、未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身に着ける。

### 文型リスト

PEACE 日本語 3 で扱った文法項目は以下の通りである。文法項目の提出は J3 に準拠している。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようにする 3. V-ようにしたができなかった、V-ようにしてもできない 4. Fraction 三分の一、五分の一 5. Review : 条件 Conditional
5	1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ

	<p>2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture</p> <p>3. ～の多く</p> <p>4. ～以外、以内、以上、以下</p> <p>5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて</p> <p>6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに</p>
6	<p>1. 受身 Passive Verbs</p> <p>2. Direct Passive Sentences 直接受身</p> <p>3. Indirect Passive Sentences 間接受身</p> <p>4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence</p> <p>5. Compound Particle ② ～によって</p> <p>6. Sentence ending particles 終助詞</p>
7	<p>1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない</p> <p>2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止</p> <p>3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む</p> <p>4. Review : Expression for Cause、 Reason</p> <p>5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて</p>
8	<p>1. 使役 : Causative Sentences</p> <p>2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる</p> <p>3. ～のは～です (emphasizing)</p>
9	<p>1. 使役受身 Causative Passive Sentences</p> <p>2. Causative V-てもらう／くれる／あげる</p> <p>3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる</p> <p>4. ～ことに one's feeling、 emotion</p> <p>5. Noun のこと VS Noun</p>
10	<p>1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる</p> <p>2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions)</p>

### <PEACE 日本語 3A>

担当者名 : <春学期> 保坂明香  
<秋学期> 保坂明香

授業コマ数 : 週 1 コマ

履修者数 : 春学期 1 名、秋学期 1 名

使用教材 : 独自教材



<春学期>

### 授業の方法

Aクラスは課の初回クラスであるため、当該テーマの背景知識の活性化、タスクの達成に必要な語彙の導入、テーマについての個人目標の設定をした。

背景知識の活性化の際には、まず既有知識を確認し、そのうえで語彙や知識を得るために情報サイトや簡単な読み物を視聴して、このテーマについてのスキーマを構築した。また、気づきを促す問いをし、このテーマについての興味や問題意識を引き起こせるように図った。

個人目標はポートフォリオのプレタスク欄に記述させ、学習者自身が目標や進捗、到達を可視化できるようにした。また、語彙学習には「ことばリスト」というファイルを用い、新出語彙を書き込み、意味や使い方、語彙を用いた短文を書かせた。学期中盤の到達確認の際には、「ことばリスト」を整理、グルーピングや共起する単語などを考えさせ、語彙の定着と拡張をした。

Aクラスではまた、一週間の到達確認を実施している。前の週に設定した目標と一週間の活動を振り返り、ポートフォリオのポストタスク欄に到達度を記入させた。また、「ことばリスト」から語彙を選択して、ことばクイズや敬語クイズを実施した。

### 結果と課題

上述のようにAクラスでは、気づきを促す問いかけをし、そのテーマについて考える機会を与えることや興味や問題意識を引き起こすこと、さらにはこの課の学習への意欲づけをすることに重きを置いている。当該学生は学習を進めるなかで、テーマを身近に感じるようになったり、日本文化や日本社会についての知識を深めたりする様子が見られ、学習前との考えの変化がうかがえた。ただ、テーマそのものやテーマについての問いから、十分に興味を引き出せなかったこともあったため、今後はテーマの見直しに合わせ、発問の内容にも検討が求められる。今後もこの点に考慮と工夫を重ねていきたい。

Aクラスで行なう到達確認の際には、1週間の学習によって、当該テーマについての知識や日本語力を、総合的に身につけたことが見て取れた。今後もクラス間で連携を図り、タスク達成に必要な言語力や社会文化的能力が育成できるようコース内容を調整していきたい。

<秋学期>

### 授業の方法

Task-Based型デザインのPEACE日本語3コースにおいて、Aクラスはプレタスクの段階にある。そのため、トピックについての背景知識の活性化、タスクの達成に重要だと思われる語彙の学習、学生ごとの目標設定を実施した。

背景知識の活性化の際には、質疑応答で既有知識を確認し、そのうえで語彙や知識が得られるようウェブサイトの視聴や簡単な読み物の読解をした。そして、当該テーマについての興味や問題意識が生まれるよう試みた。

語彙学習には「ことばリスト」というファイルを用い、タスク達成のために学生が必要だと考える語彙を記入させた。ことばリストからは語彙クイズを実施した。学期中盤にはことばリストを整理し、グルーピングや共起する単語などを考えさせ、語彙の定着と拡張を図った。また学期末には、学期を通して身につけた語彙を振り返り、今後の学習について考える機会を持った。個人目標はポートフォリオのプレタスク欄に記述させ、学習者自身が目標や到達を可視化できるようにした。

先述したように A クラスはプレタスクの段階であるが、タスクの到達確認も実施している。前週に設定した目標と一週間の活動を振り返り、ポートフォリオのポストタスク欄に到達度の自己評価を記入させた。

## 結果と課題

一学期間の語彙学習を通し、学生はこのレベルにおいて重要な語彙を一定程度身につけられたように思う。リストを作成させたことは、語彙の蓄積の面では効果があったが、実際の文脈や場面において、学生が十分に使用に結びつけられたかに関しては課題が残る。今後は文脈や場面の中で語彙を導入し、運用練習も実施をして、新出語彙がタスクの中で正確かつ適切に使えるようにしていきたい。

A クラスでは、教師からの質問によって、テーマについて考えること、興味や問題意識を引き起こすこと、このトピックの学習への意欲づけをすることを目指している。学生達は質問に答えることを通して、テーマについての考えや日本文化や社会についての興味を持つようになり、トピック学習前との思考の変容がうかがえた。ただ、テーマについて興味を持てない、学習意欲が湧かないといった様子も一方で見られた。今後はテーマを再検討するとともに、教師の発問内容とファシリテーションにも工夫が求められると言えるだろう。

## <PEACE 日本語 3B>

担当者名：<春学期> 長谷川孝子

<秋学期> 長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

<春学期>

### 授業の方法

毎回その週の目標を確認してから、文法項目の導入と練習を行った。毎週 1 課ずつのペースで進め

た。各回は PPT やテキストを用いて文法や文型を確認、Comprehension check sheet を使用し文法・文型の再確認と理解を促した。各課の内容確認のために、毎回文法クイズを実施した。また、授業内課題として新しい文法・文型を取り入れた文の短文作成や口頭練習なども行った。

### 結果と課題

1名のクラスであったが、学生は毎回熱心に授業に参加していた。毎回多くの文型や表現を勉強したが、日本語を使う機会がある学習者であったため、問題なく授業を進めることができた。あまり遭遇しないような文脈、また、英語にない概念は定着するのが難しかったが、繰り返しの練習により、少しずつ正確なアウトプットができるようになった。文法項目が多く、すべてを網羅するのは難しいが、状況をイメージさせながらの練習を続けていくことが大切だと思われる。

#### <秋学期>

### 授業の方法

毎週週の目標を確認してから、文法項目の導入と練習を行った。毎週1課ずつのペースで進めた。各回はスライドやテキストを用いて文法や文型を確認、Comprehension check sheet を使用し文法・文型の再確認と理解を促した。各課の内容確認のために、毎回文法クイズを実施した。また、授業内課題として新しい文法・文型を取り入れた文の短文作成や口頭練習なども行った。

### 結果と課題

学生たちは非常に熱心に授業に参加していた。毎回、多くの文型や表現を学習したため、課によっては予定していた時間内で内容をすべて扱うのが難しい場合もあった。特に、普段あまり遭遇しない文脈や英語には存在しない概念については、定着に時間がかかったが、繰り返し練習を重ねることで徐々に理解が深まってきたように感じる。

一方で、自宅学習の時間がほとんどとれない学生だったため、理解できた内容を次の授業までに忘れてしまうケースが多く見受けられた。このため、復習の時間をどのように確保するかが大きな課題となっている。今後は、時間が限られている中でも、少しでも復習の時間を確保し、それが学生の達成感につながるよう工夫していきたい。そして、言語学習を継続したいという学生の意欲を支えるサポートを行っていければと考えている。

#### <PEACE 日本語 3C>

担当者名：<春学期> 平山紫帆

<秋学期> 嶋原耕一

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期1名、秋学期3名

#### <春学期>

##### 授業の方法

授業では、その週のトピックの Can-do を達成できるようにするための聴解練習と会話練習を行った。具体的には、聴解では、インターネットのサイトなどを利用し、ニュースやインタビュー、会話などのまとまった長さの話を聞いて、その内容を理解する練習を行った。また、シャドーイングなども行った。会話では、モデル会話やモデルスピーチを使って表現や談話の流れを学習したあと、ロールプレイをしたり、自分の関心がある内容について話したりする練習をした。

また、学期の途中で、日本人のボランティア学生に参加してもらい、お互いにインタビューをしたり、トピックについて話し合ったりする活動も行った。

その他、毎回、「にほんごノート」の語彙や、その日に学習した表現に関して、ディクテーションを実施した。

##### 結果と課題

この授業は5限という遅い時間に行われたため、学生に疲れが見える時もあったが、それでも意欲的に授業に取り組んでいた。聴解に関しては、当初、語彙量の不足から、内容がなかなか理解できないこともあったが、練習を重ねるうちに聴解力が大幅に向上し、概要だけでなく細かい点まで聞き取れるようになった。会話に関しては、その週のトピックにあまり関心を持っていないこともあったようだが、それでも自分なりに興味を持てる部分を見つけて、楽しんで取り組んでいる様子が見られた。ロールプレイの練習では、ユーモアを交えた、自然でまとまりのある長い会話ができるようになった。

課題としては、今回のように受講生が一人の時に授業活動のバリエーションを持たせることと、モチベーションを下げずに取り組ませることが挙げられる。今後はこれらを改善し、さらに充実した授業を行っていきたい。

#### <秋学期>

##### 授業の方法

授業は毎回、1週間何をしたかの報告から始め、少しでも話しやすい雰囲気を作るように意識した。その後の授業では、各回の文法項目を用いた口慣らしや変形練習、ロールプレイなどの応用練習を実施し、話す練習を重ねた。授業後半は市販教材や生教材（やさしい日本語のニュースなど）を用いた聴解練習を行い、その日に触れた文章のディクテーションで、各回の授業を終えた。ロールプレイや聴解教材は、できる限り、その週の目標タスクに沿ったものを使用した。

##### 結果と課題

授業開始時のカジュアルな会話の練習は、みな伝えたいことが多く、積極的な交流の場となった。そ

ういった練習や、毎週の聴解練習の積み重ねから、少しずつではあるが流暢さや聴解力の向上、話すことへの苦手意識の低下が全員に見られた。ただ一方で、ターゲットとなる文法を一度明示的に提示してしまうと、ロールプレイでもその文法にばかり注意が行ってしまい、他の表現や自然さがおろそかになる傾向が見られた。何を目標としたロールプレイなのか毎回確認するようにしたが、今後も、自然さを保ちつつ句型練習にもなるようなかたちを模索していきたい。

## <PEACE 日本語 3D>

担当者名：<春学期> 栃木亜寿香

<秋学期> 森山仁美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

<春学期>

### 授業の方法

D クラスでは、各週のトピックに関連した様々な読み物（旅行サイトの口コミ、メール文、新聞など）の読解をした。内容理解の確認後、内容に関するディスカッションをした。

また、「にほんごノート」内の漢字リストの作成も行った。毎週学習者が生活の中で見つけた漢字を含む写真や媒体を Padlet で共有し、使用されている漢字の意味や関連の熟語などを学んだ。翌週に漢字リストからクイズを出題した。

### 結果と課題

トピックに関連した読解ではリーディングチュウ太などのツールを用いての読解を許可したが、回を重ねるごとに効率的にツールを用い、全体把握の時間が大幅に短縮した。また学習者は D クラスに至るまでにトピックに関する学習を重ね内容を熟知しており、オーセンティックな読解文にスムーズに取り組むことができた。

一方で、学生のトピックへの関心の度合いによって読解後のディスカッションの充実度に差が生じた。受講学生が 1 名だったこともあるが、どのトピックでも十分な内容理解やディスカッションができるよう、問題の提示方法や展開を工夫したい。

<秋学期>

### 授業の方法

授業では、トピックに関連する文章読解を中心に進めた。まず、読み物に入る前に、漢字の読み方と言葉の意味の確認、文節分けの練習を行った。その後、教材の読み物を読み、読解問題を通じて内容理

解を確認した。内容理解の確認後には、読み物に関するディスカッションを実施し、学生には、読み物の内容に関する意見や、それに似た話を共有してもらった。さらに、宿題として、読解教材に出てきた漢字を学生が毎週選び、漢字リストを作成する活動を取り入れた。

## 結果と課題

秋学期の履修者は3名で、そのうち非漢字圏の学生が2名だった。学期当初から最後まで、学生たちはとても熱心に授業や課題に取り組んでいた。授業では、トピックに関連する文章読解を中心に行った。読解活動では、課題や問題の解答を学習者同士で協力して導き出そうとする姿勢が見られた。細部の読み取りが難しい場合もあったが、大まかな内容はほぼ毎回理解できていたようだった。ただし、読解教材には難易度の高い漢字が使用されていたため、一部の学生には少し負担が大きいと感じられる場面もあった。そのため、毎回授業で漢字と読解内容の確認を丁寧に行った。また、読解後の意見交換では、自分の体験談や自国の状況を共有するなど、クラスで話が盛り上がることも多く、非常に良い雰囲気の中で授業が進んだ。一方で、いくつかの課題もある。まず、学生が作成した漢字リストの難易度が人によって異なっていたため、漢字クイズ作成時に問題の難易度がばらついてしまった。また、読解教材に漢字が多く使われていたので、学生たちは読解後に疲れを感じることもあった。これらを踏まえ、今後は、語彙、文法、漢字のさらなる練習が必要であると感じている。

## <PEACE 日本語 3E>

担当者名：<春学期> 黄慧

<秋学期> 黄慧

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

<春学期>

### 授業の方法

毎週 60 分間、当該週のトピックに関連するメインタスクとして作文活動を行った。PEACE 日本語 A～D で学んだ語彙、文法、表現を活用し、より発展的な活動に取り組んだ。

また、毎週 40 分間を使って日本と自国の社会・文化を比較し、共通点や相違点、その理由について考察し、学期末のプロジェクト発表に向けて準備を進めた。さらに、ボランティア学生へのインタビューや調査を通じて、自分の意見をまとめて発表原稿を作成した。発表会では、プレゼンテーションを行い、日本人学生のボランティアから質疑応答を受けた。

## 結果と課題

作文：学生は毎回設定されたトピックに基づき、文法、語彙、読解の活動を通じて内容を理解し、作文に必要な語彙や文型を学習していた。作文の授業前の学習効果もあり、学生は語彙や文型をしっかりと把握し、ほとんど問題なく作文を書くことができた。各回のトピックは実生活に関連しており、学生は飽きることなく積極的に取り組んでいた。コース全体は、トピックの難易度が徐々に上がるように設計されており、学生に過度な負担をかけないよう工夫されていた。学期の前半には文法の誤りが多く見られたが、回を重ねるごとに正確な文章を書く力が向上した。また、新しい単語や表現を習得し、作文の内容も一層充実していった。その結果、学生は自分の感想や意見を明確に述べられるようになり、さらに作文を通じて自己表現の方法を学び、文章に個性が表れるようになった。

しかしながら、フィードバックの方法や学生のモチベーション維持には課題が残る。学生が自分の誤りを理解し、改善するためには、具体的で建設的なフィードバックだけでなく、その効果を常に確認する必要があると考えられる。また、金曜日の5限という時間帯の影響もあり、疲労から作文の記述量が少ない回もあったが、適切なフィードバックを行うことで改善が見られた。来学期においては、学生のモチベーションを維持しつつ、作文活動を効果的に進める方法をさらに検討する必要があると考えている。

プロジェクト：プロジェクト型授業において、学生は自身の興味に基づいたトピックを選び、リサーチを通じて専門的な語彙や表現を習得し、それを効果的に運用する能力を向上させたと思われる。また、調査内容を適切に伝えるための言葉選びや表現力も向上した。同時に、プレゼンテーション技術、インタビューの実施方法、質疑応答への対応も習得した。プロジェクトを完成し、プレゼンテーションを行うことによって得られる達成感は、学生の日本語に対する自信を大いに向上させた。このリサーチスキルおよびプレゼンテーションスキルは、他の授業での活動や就職後にも大いに役立つと考えられる。

しかしながら、この授業にはいくつかの課題も存在する。まず、時間管理の難しさが挙げられる。教員および学生が時間管理を適切に行わなければ、プロジェクトと作文の授業との両立が困難になるため、計画的に進められるよう支援する必要がある。また、学生の興味関心と実際のリサーチ内容およびプレゼンテーションの効果を、如何にバランスを取るかも課題である。プロジェクト型授業を初めて担当し、経験が浅いため、学生の興味関心を最優先にした結果、テーマが絞り込めず焦点が定まらないことがあった。このため、トピック選定の段階で十分な指導とサポートを提供することが必要であると考えられる。

プロジェクト型授業は学生の多様なスキルを総合的に伸ばすために非常に有効である一方、その実施には綿密な計画と適切な支援が必要である。こうした課題に対応するための施策を講じることで、学生の学習効果を最大限に引き出し、より一層効果的な授業運営を実現することができると考えられる。

<秋学期>

## 授業の方法

この授業では、ライティング活動とプロジェクト準備の二つを中心に進めた。授業の前半 60 分はライティング活動に取り組み、その週に学習した文法や語彙の正確性に重点を置きながら、自己紹介文やメール文、意見文などの文章を書く練習を行った。その後、添削やフィードバックを通じて、学生が自分の文章を見直し、表現力を高められるよう支援した。授業の後半 40 分はプロジェクト準備に充て、学期末に予定されている発表に向けた具体的な準備を進めた。学生は「日本と母国の文化や生活の違い」をテーマに設定し、インタビュー項目の作成、情報の収集と整理、スライドの作成を行った。また、授業内ではプレゼンテーションの練習を実施し、発表会ではボランティア学生を招いて発表を行った。さらに、発表後には質疑応答の場を設け、学生が調査内容や自らの考えを他者に分かりやすく伝える力を養うことを目指した。

## 結果と課題

ライティング学習では、学んだ文法や語彙を実際の文章で使うことで、正確な日本語を使う力が身についた。また、自己紹介やメール、意見文を書くことで、表現力が高まり、日本語表現の幅を広げることができた。さらに、フィードバックを受けることで、自分の文章を見直し、改善する力がつき、自己修正能力も向上した。しかし、複雑な文章を書く際には文法の誤りが増える傾向があり、段階的な指導が求められる。また、語彙力の向上と正確なコロケーションの習得が課題として残った。

プロジェクト学習では、いくつかの学びがあった。まず、テーマに基づいて情報を集め、整理する過程で、質問の作り方やインタビュー時の注意点を学んだ。次に、集めた情報を整理し、発表資料を作ることで、論理的に考える力が育まれた。また、スライド作成を通じて、情報をわかりやすく伝える能力や、発表後の質疑応答を通じて、コミュニケーション能力が向上したように感じた。さらに、質疑応答を通じて、テーマへの理解が深まり、日本語で批判的に考える力も身についた。一方で、授業時間内にタスクを完了できず、プロジェクト進行に遅れが生じることがあった。今後は計画をより柔軟に設定し、進行状況を見ながら調整する必要があると思われる。また、学生の体調不良や疲労が授業に影響する場面があったため、欠席した際のサポート体制を強化することも重要であると考えられる。

## 2024 年度 法政日本語 授業記録

### <法政リーディング&ライティング>

担当者名：<春学期> 鹿目葉子

<秋学期> 鹿目葉子

### コース概要

法学部での学びに関連した内容の文章を読み、その内容を自分の言葉で説明する。また、理解した内容を基礎として、自分なりの意見をまとめて書くことにつなげる。「書く」ことに関しては、①読んだ



内容をふまえ、さらに文献などを調べて、レポートにまとめる、②読んだ内容を理解し、出された問に文章で制限時間内に回答する、という2つのスキルに焦点をあてて扱う。さらに、日本語で書くために必要な語彙や文型についても扱う。授業後半には、専門科目でのレポートや試験を想定した筆記テストを行い、法学部での学びに十分な日本語力が身に着いたかを各自が確認する。

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 6名、秋学期 3名

使用教材：参考図書ならびに独自教材

#### コースの目標

法学部の学生が、法学部における講義の理解に必要な日本語のリーディングスキルを身に着ける。また、法学部におけるレポート作成、試験問題への回答などのために必要なライティングスキルを身に着ける。

#### 授業の方法

授業は「日本語で書くために必要な語彙や文型」練習と「読んで書く」練習の2部構成で進めた。前者においては、アカデミックライティング用のフレーズ練習を用い、後者においては、法学部での学びに関連した内容の文章を読ませ、その内容について、①説明する、②論じる、③意見を述べる、に分けて、「書き方」を身に付けさせた。また、毎回、「書く」課題を提示した。さらに、後半ではレポートの書き方と試験を想定した筆記テストを行い、最終日はテストのフィードバックを行った。

#### 結果と課題

<春学期>休学者を含む6名のうち、最後まで授業に参加したのは2名であった。2名の学生は真剣に授業と課題に取り組み、参加意欲の高さが窺えた。授業が進むごとに、学生が書くレポートの質が向上していった。今学期は、昨年の授業に対する課題を踏まえて授業を実施した。学生からは、論理的に文章を書くためのスキルが学べたこと、書く上でさらに身につけるべきスキルに気づけたことなど、肯定的な声が聞かれた。今後の課題としては、アカデミックライティング用のフレーズ練習のみではなく、レポートに必要な基礎的スキルを学習するための教材を考えてみたい。

<秋学期>休学者を含む3名が授業に登録していたが、初回から授業に参加した学生はいなかった。

## 2. 2024 年度 Placement Test 実施報告

### 【春学期】

#### 2024 年度春学期 日本語プレースメントテスト受験者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学学生	新入生	在学学生	新入生	在学学生	
3月26日 特別外国人学生 正規院生対象	-	-	145	10	15	9	0
3月28日 正規学部生 対象	58	1	-	-	-	-	-
4月3日 (特別措置)	17	0	1	0	0	0	-
全受験者数 180 名							

#### 春学期プレースメントテスト対象者 レベル判定結果 (特別外国人学生・正規大学院生)

J0	65			
J1	11			
J1S	13			
J2	5			
J2S	7			
J3	6			
J3S	13			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	9	9	11	11
J5	17	10	15	15
J6	20	17	20	15
J7	13	12	13	20
J8	8 (うち条件付き 4 名)			

#### <春学期総評>

対面での実施、さらには、RSP 入試のスタートに伴い様々なステイタスの学生が受験する中で、しっかりとプレースメントテストを実施することができた。Web テストにおいても、事前に教員がしっかりと確認をすることで、円滑な実施が可能であった。

結果により全員のレベルを適切に配置することができた。

【秋学期】

2024 年度秋学期 日本語プレイスメントテスト受験者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	新入生	在学生	
9月5日 9月入学者 正規学部生 特別外国人学生 継続正規院生対象	20	1	187	0	0	13	1
9月12日 新規正規院生 特別措置	1	3	3 ※	0	13	0	0
全受験者数 242名（実人数）							

※：9月5日に受験したが学生が試験前の説明をしっかりと確認しておらず、適切な手続きが踏めなかったため、9月12日に再受験した。

秋学期プレイスメントテスト受験者レベル判定結果（特別外国人学生・正規大学院生）

J0	76			
J1	20			
J1S	13			
J2	12			
J2S	4			
J3	12			
J3S	2			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	9	9	9	9
J5	28	28	28	28
J6	18	18	18	18
J7	15	15	15	15
J8	5名			

<秋学期総評>

秋学期は、250名以上の学生が受験し、過去最大規模での実施となったが、事前の準備をしっかりと行い、円滑にテストを進めることができた。J0、J1を希望する学生に対するひらがなテストに学生が集まり、やや対応が滞ったこともあったが、何とか無事に終えることができた。ひらがなテストの在り方については、今年度検討を行い、来年度から改善を行うこととなった。

2024年度の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。（履修者数は、継続生も含む。ここでいう「継続生」とは、前学期に日本語科目を履修した者。継続生は日本語プレイスメントテスト対象者には含まない。）

## 【2024 年度春学期】

## 【2024 年度秋学期】

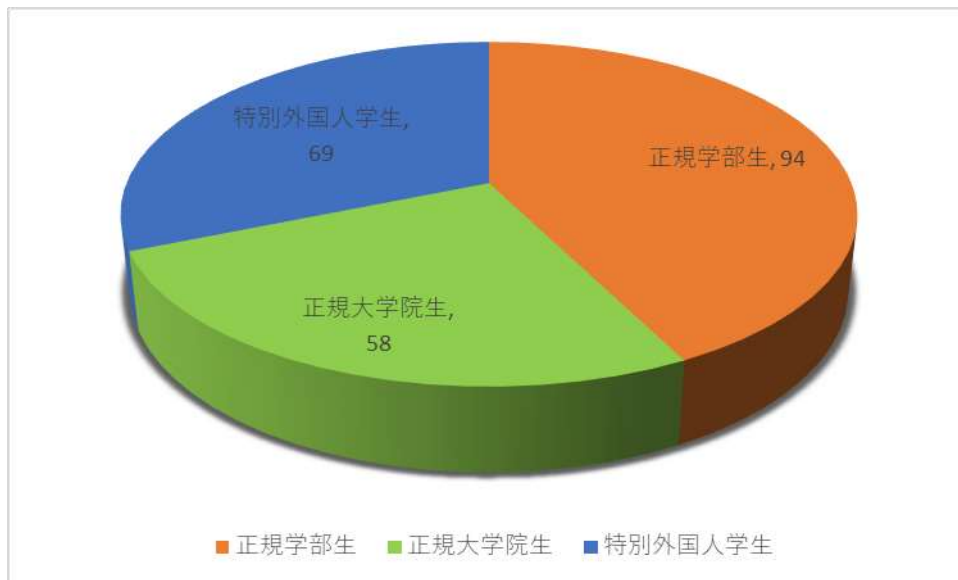
	【2024 年度春学期】		【2024 年度秋学期】	
	国 籍	人 数	国 籍	人 数
特別外国人学生	アイルランド	1	アイルランド	2
	アメリカ	42	アメリカ合衆国	13
	イギリス	8	イギリス	18
	イタリア	4	イタリア	2
	インドネシア	3	インドネシア	1
	ウクライナ	1	オーストラリア	6
	オーストラリア	9	オランダ	7
	カナダ	7	カナダ	9
	韓国	6	韓国	18
	ギリシャ	1	ギリシャ	1
	シンガポール	3	クロアチア	1
	スウェーデン	2	スイス	5
	スペイン	6	スウェーデン	2
	スロベニア	2	スペイン	9
	台湾	14	スロベニア	1
	中国	21	タイ	1
	ドイツ	11	台湾	6
	日本	5	チェコ	1
	ノルウェー	2	中国	11
	ハンガリー	1	ドイツ	15
	フィンランド	2	日本	7
	フランス	18	ノルウェー	1
	ベトナム	3	フィンランド	2
	ベラルーシ	2	フランス	16
	ベルギー	1	ブルガリア	2
	ポーランド	3	ブルネイ・ダルサラーム	2
	ポルトガル	1	ベトナム	2
	マダガスカル	1	ベルギー	1
	マレーシア	1	ポーランド	2
	メキシコ	2	マレーシア	1
モンゴル	2	ルーマニア	1	
特別外国人学生合計		185		166
正規留学生 (大学院)	インドネシア	1	ガーナ	2
	カナダ	2	カナダ	1
	中国	12	ジンバブエ	1
	日本	1	スイス	1
	フランス	1	ドイツ	1
	ポーランド	1	フランス	1
	ホンジュラス	1	中国	15
正規留学生(大学院)合計		19		22
日本語履修者 合計	2024 年度春学期	204	2024 年度秋学期	188

\* 本学では正規留学生は在留資格「留学」を有している者としているが、日本語教育センター科目は、正規大学院生は、特に日本語学習の必要性が認められれば履修を認めているため、上表に記載する。

### 3. 2024年度日本語相談室実施報告

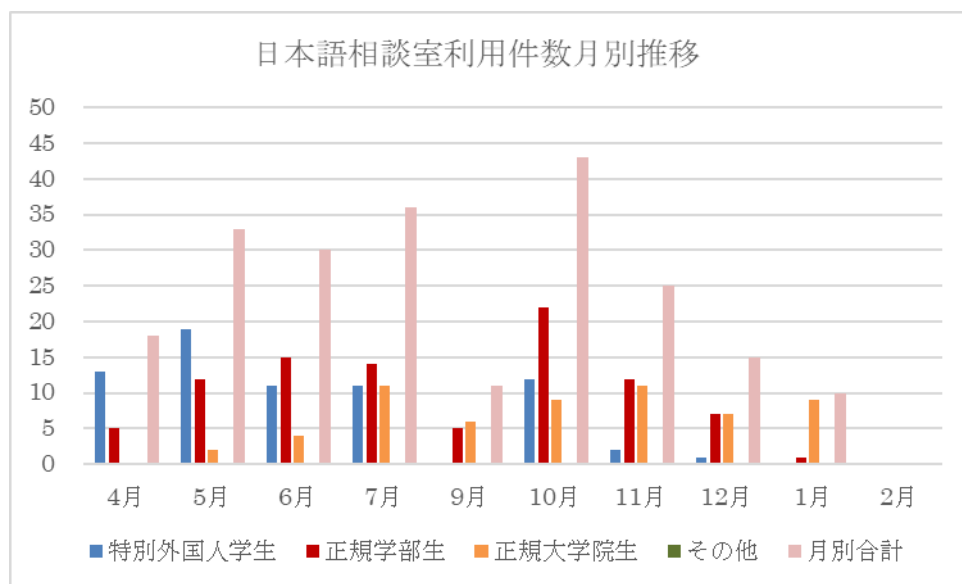
2024年度 日本語相談室利用状況（2024年4月10日～2025年2月3日）

#### 【相談者所属別利用件数】



#### 【月別推移】

相談者属性	予約枠	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
特外	教員	12	13	9	7	0	12	2	1	0	0	56
	学生アドバイザー	1	6	2	4	0	0	0	0	0	0	13
	小計	13	19	11	11	0	12	2	1	0	0	69
学部	教員	5	12	13	11	4	12	7	2	1	0	67
	学生アドバイザー	0	0	2	3	1	10	5	5	0	0	26
	小計	5	12	15	14	5	22	12	7	1	0	93
大学院	教員	0	2	4	11	6	9	11	7	9	0	59
その他	教員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月別合計		18	33	30	36	11	43	25	15	10	0	221



【所属別利用件数】

		実質 利用人数	合計 利用回数	キャンパス		オンライン	
				池袋	新座	教員	学生 アドバイザー
特別外国人学生		15	69	44	12	0	13
正規 学部生	文学部	2	7	4	0	2	1
	異文化コミュニケーション学部	6	29	22	0	4	3
	経済学部	7	24	18	0	1	5
	経営学部	2	17	0	0	0	17
	理学部	0	0	0	0	0	0
	社会学部	1	1	1	0	0	0
	法学部	3	8	8	0	0	0
	観光学部	2	5	0	2	3	0
	コミュニティ福祉学部	2	2	0	1	1	0
	現代心理学科	0	0	0	0	0	0
	スポーツウエルネス学部	0	0	0	0	0	0
	GLAP	0	0	0	0	0	0
正規 大学院生	キリスト教学研究科	0	0	0	0	0	
	文学研究科	3	4	3	0	1	
	異文化コミュニケーション研究科	8	34	13	0	21	
	経済学研究科	0	0	0	0	0	

	経営学研究科	2	4	4	0	0	
	理学研究科	0	0	0	0	0	
	社会学研究科	1	6	6	0	0	
	法学研究科	0	0	0	0	0	
	観光学研究科	2	2	1	0	1	
	コミュニティ福祉学研究科	0	0	0	0	0	
	現代心理学研究科	0	0	0	0	0	
	スポーツウェルネス研究科	0	0	0	0	0	
	ビジネスデザイン研究科	1	1	1	0	0	
	社会デザイン研究科	3	8	6	0	2	
	人工知能科学研究科	0	0	0	0	0	
	<b>特別外国人学生 計</b>	15	69	44	12	0	13
	<b>正規学部生 計</b>	25	93	53	3	11	26
	<b>正規大学院生 計</b>	20	59	34	0	25	
	<b>その他 計</b>	0	0	0	0	0	0
	<b>合計</b>	60	221	131	15	36	39

## 2024年度 相談室の稼働状況

春学期

●教員/曜日・時限別 利用件数・平均稼働率 (OL:オンライン)

	月			火			水			金		
	場所	件数	平均稼働率	場所	件数	平均稼働率	場所	件数	平均稼働率	場所	件数	平均稼働率
1限	池袋			池袋	1	6.3%	池袋			池袋		
	新座			新座			新座			新座		
	OL			OL	1		OL			OL		
2限	池袋	5	16.0%	池袋	5	19.4%	池袋	6	21.7%	池袋	9	43.8%
	新座			新座			新座			新座		
	OL	0		OL	2		OL	1		OL	4	
3限	池袋	3	10.8%	池袋		31.9%	池袋	5	18.5%	池袋	15	57.3%
	新座			新座	9		新座			新座		
	OL	0		OL	2		OL	1		OL	2	

4 限	池袋	7	30.2%	池袋		21.9%	池袋	9	36.3%	池袋		
	新座			新座	4		新座			新座		
	OL	3		OL	3		OL	2		OL		

\*教員枠は 月・火・水・金

●学生アドバイザー/曜日・時限別 利用件数

	月	火	水	木	金
1限-1				2	
1限-2			0		
2限-1	0				3
2限-2				0	
3限-1		5		6	
4限-1					
4限-2				0	2

秋学期

●教員/曜日・時限別 利用件数・平均稼働率

	月			火			水			金		
	件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率	
1限	場所		11.1%	場所		11.1%	場所		11.1%	場所	4	
	池袋			池袋			池袋			池袋		
	新座			新座			新座			新座	0	
2限	OL	6	20.8%	OL	4	11.7%	OL	10	33.2%	OL	4	20.4%
	池袋			池袋			池袋			池袋		
	新座	2		新座	1		新座	3		新座	3	
3限	OL	3	8.3%	OL		2.1%	OL	12	28.5%	OL	11	29.3%
	池袋			池袋	0		池袋			池袋		
	新座	0		新座	0		新座	2		新座	1	
4限	OL	6	12.5%	OL		5.0%	OL	6	13.3%	OL		
	池袋			池袋	2		池袋			池袋		
	新座	0		新座	2		新座	1		新座		



●学生アドバイザー/曜日・時限別 利用件数

	月	火	水	木	金
1限-2	0		6		
2限-1				1	
3限-1		1			3
4限-1					5
4限-2				1	4

【2011年度—2024年度 利用件数推移】

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268
その他	0	0	0	1	8	0	2
合計	144	153	181	237	424	428	407
増減	100	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
特別外国人学生	42	63	5	2	38	57	69
正規学部生	92	126	153	180	175	132	93
正規大学院生	304	205	167	177	179	88	59
その他	0	0	2	0	0	0	0
合計	438	394	327	359	392	277	221
増減	304.2	273.6	227.1	249.3	272.2	192.4	153.5

日本語相談室担当者コメント

今年度の日本語相談室も、昨年度と同様に教員枠と学生アドバイザー枠を設けて開室した。学生アドバイザー枠は、本学の大学院生と学部生の学生アドバイザーが担当し、日本語を母語としない学部生のみを対象とする。相談できる内容としては、正規科目のレポートと発表、リアクションペーパー、日本語資

料の内容確認、日本語クラスの宿題の他、今年度は話す練習も追加された。一方、教員枠は、基本的に日本語を母語としない学部生と大学院生を対象とし、話す練習以外のさまざまな相談を受け付けている。なお、スピーチコンテストのための準備については、教員枠、アドバイザー枠のいずれも利用可能とした。開室形態は、教員枠はオンラインと対面で開室し、学生が選択できる形態にした。学生アドバイザー枠は、オンライン相談室として開室した。

また、多くの学生に日本語相談室を利用してもらうため、図書館のラーニングアドバイザーのカウンターで日本語相談室のチラシを配布していただいた。

以下、教員枠、学生アドバイザー枠の利用について、順に見ていく。

### <教員枠>

#### 【相談内容内訳】

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）	56
就職活動（エントリーシート等）	5
レポート（授業、ゼミ等）	14
奨学金関係（申請書類、面接練習等）	15
学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）	43
スピーチコンテスト	26
発表指導（授業、ゼミ等）	4
学会発表・予稿集・投稿論文	5
その他	14
合計	182

#### 【稼働率】

##### 春学期

	4月	5月	6月	7月	計
相談件数	17	27	26	29	99
相談枠	72	96	96	116	380
稼働率（%）	23.6	28.1	27.1	25.0	26.1

##### 秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
相談件数	10	33	20	10	10	0	83
相談枠	36	108	102	78	84	6	414
稼働率（%）	27.8	30.6	19.6	12.8	11.9	0	20.0

全体の利用件数は、昨年度の 226 件から大幅に減少し、182 件となった。相談内容で最も多かったのは「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」で 56 件、次いで、「学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）」43 件、「スピーチコンテスト」26 件であった。

昨年度の相談内容と比較すると、増加したのは、20 件から 43 件に増えた「学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）」と、20 件から 26 件に増えた「スピーチコンテスト」、7 件から 14 件に増えた「その他」である。

全体の相談件数が大幅に減少している中、学習方法指導に関する相談件数が増加した背景には、その相談内容から、次の授業に向けて学習した内容をしっかりと定着させて臨みたいという真摯な態度と日本語学習への意欲の高さが窺える。また、その他の相談内容をみると、インターンシップやゼミの申請書類に関するものが大半を占めており、今後も継続的に需要があると考えられる。

一方で、全体の相談件数が減り、特に論文やレポートに関する相談が減少した原因としては、昨年と同様に生成系 AI の存在が大きいと推察される。また、就職活動に関する相談件数が減少した理由の一つには、授業内で学生にキャリアセンターを紹介したことが考えられる。

さらに、学生が相談室を利用する時間帯に偏りが見られたことから、相談室の開室時間帯に授業が入っているなど、学生が利用しづらい時間割となっていた可能性も挙げられる。

今後は、上述で挙げた相談件数の減少原因を踏まえて改善するとともに、多くの学生に利用してもらえよう、相談室の在り方を再考して新たな相談室の可能性を探っていく必要がある。

なお、日本語相談室を利用する際のルールは概ね守られてきているが、引き続き事前資料の提出期日や利用方法についても周知する必要がある。

## <学生アドバイザー枠>

### 【相談内容内訳】

相談内容	件数
リアクションペーパー	11
レポート	5
発表指導	5
スピーチコンテスト	5
話す練習	12
日本語資料の内容確認	1
合計	39

### 【稼働率】

春学期

	4月	5月	6月	7月	計
相談件数	1	6	5	6	18
相談枠	24	32	32	35	123
稼働率 (%)	4.2	18.8	15.6	17.1	14.6

## 秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
相談件数	1	10	5	5	0	0	21
相談枠	12	33	27	25	27	1	125
稼働率 (%)	8.3	30.3	18.5	20.0	0.0	0.0	16.8

2022年度に開始した学生アドバイザーによるオンラインの日本語相談室は3年目となった。学生アドバイザーは毎学期、事前研修を受けたうえで日本語相談室を担当し、学期中の中間報告会2回、学期終了後の事後研修にも参加し、振り返りを行っている。

2023年度に続き、2024年度は4名体制で週8枠対応した。4名のうち2名は前年度から担当していた学部生で、2024年度の春・秋学期と継続した。2名は新たに加わった大学院生と学部生である。秋学期は学部生の1名が継続できないということで、新規の学部生と交代した。

2024年度の変更点は、2023年度秋学期に受付を開始した「日本語クラスの宿題」の代わりに「話す練習」を追加した点である。春学期は、特別外国人学生のリピーターが「話す練習」で利用していた。相談件数は2023年度の51件から39件に減少し、稼働率も低下した。これは、NEXUS1年生のリアクションペーパーの相談や、NEXUS2年生と学部生の利用が減少したためと考えられる。2025年度はNEXUS生の新入生が増えるため、利用者の増加が見込まれる。そこで、来年度も今年度同様、学生アドバイザーが入れる時間帯をNEXUSの授業の時間帯と重ならないように調整する必要がある。また、引き続き、利用者獲得に向けて周知していきたい。

## 4. 2024 年度立教大学漢字検定試験実施報告

	試験日	申込締切日	申 込		受 験		合 格		
			種別	人数	種別	人数	種別	人数	
第1回	5月29日(水)	5月1日(水)	特別外国人学生	52名	特別外国人学生	45名	特別外国人学生	36名	
			上級	3名	上級	3名	上級	3名	
			中級	28名	中級	24名	中級	20名	
			初級	21名	初級	18名	初級	13名	
			正規学部生	2名	正規学部生	2名	正規学部生	2名	
			上級	1名	上級	1名	上級	1名	
			中級	1名	中級	1名	中級	1名	
			初級	0名	初級	0名	初級	0名	
			正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	
			上級	0名	上級	0名	上級	0名	
中級	0名	中級	0名	中級	0名				
初級	0名	初級	0名	初級	0名				
申込合計			54名	受験合計		47名	合格合計		38名
第2回	7月10日(水)	6月19日(水)	特別外国人学生	44名	特別外国人学生	37名	特別外国人学生	24名	
			上級	2名	上級	2名	上級	1名	
			中級	27名	中級	23名	中級	18名	
			初級	15名	初級	12名	初級	5名	
			正規学部生	0名	正規学部生	0名	正規学部生	0名	
			上級	0名	上級	0名	上級	0名	
			中級	0名	中級	0名	中級	0名	
			初級	0名	初級	0名	初級	0名	
			正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	
			上級	0名	上級	0名	上級	0名	
中級	0名	中級	0名	中級	0名				
初級	0名	初級	0名	初級	0名				
申込合計			44名	受験合計		37名	合格合計		24名
第3回	11月20日(水)	10月23日(水)	特別外国人学生	25名	特別外国人学生	20名	特別外国人学生	17名	
			上級	1名	上級	1名	上級	0名	
			中級	15名	中級	14名	中級	12名	
			初級	7名	初級	5名	初級	5名	
			正規学部生	1名	正規学部生	1名	正規学部生	0名	
			上級	1名	上級	1名	上級	0名	
			中級	0名	中級	0名	中級	0名	
			初級	0名	初級	0名	初級	0名	
			正規大学院生	1名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	
			上級	0名	上級	0名	上級	0名	
中級	1名	中級	0名	中級	0名				
初級	0名	初級	0名	初級	0名				
申込合計			25名	受験合計		21名	合格合計		17名
第4回	1月15日(水)	12月18日(水)	特別外国人学生	24名	特別外国人学生	17名	特別外国人学生	13名	
			上級	0名	上級	0名	上級	0名	
			中級	18名	中級	14名	中級	10名	
			初級	6名	初級	3名	初級	3名	
			正規学部生	0名	正規学部生	0名	正規学部生	0名	
			上級	0名	上級	0名	上級	0名	
			中級	0名	中級	0名	中級	0名	
			初級	0名	初級	0名	初級	0名	
			正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	
			上級	0名	上級	0名	上級	0名	
中級	0名	中級	0名	中級	0名				
初級	0名	初級	0名	初級	0名				
申込合計			24名	受験合計		17名	合格合計		13名

漢字クラスの履修資格の減甲により、漢字クラスの履修者が適正な数になったため、適切な数で推移した。今後は、漢字クラスを履修していない学生に対して、受験を促していくことが課題である。

## 5. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

2024年度は、11月30日に「第13回立教大学留学生による日本語スピーチコンテストーセントポールライオンズクラブ杯」を対面で実施した。当日は、初級から上級まで16名の学生が参加した。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ<https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/13th.default.aspx>を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第13回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ースピーチ文集』を刊行した。

## 6. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

24年7月13日に「正規学部留学生受け入れの新時代 3ー留学生のキャリア支援はこれでいいのか？ー」というテーマで実施した。立教大学がスタートさせた新しい外国人留学生受け入れ制度「RIKKYO STUDY PROJECT (RSP)」によって入学し、本学で学ぶ外国人留学生の学びについて、「キャリア」に焦点を当てて全体討議などを行った。

登壇者は松井秀征氏（国際化推進機構長、法学部教授）、小島緑氏（キャリアセンター職員）、瀬下龍太郎氏（東京外国人雇用サービスセンター就職支援ナビゲーター）、蕭 培恩氏（本学卒業生）、ダム ティラン アイン氏（異文化コミュニケーション学部 4年）であった。

シンポジウムの詳細は、日本語教育センターホームページ (<https://cjle.rikkyo.ac.jp/symposium/default.aspx>) を参照されたい。

また、当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える 14』として刊行（オンライン）した。[https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=50&sort=custom\\_sort&search\\_type=2&q=904](https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=50&sort=custom_sort&search_type=2&q=904)

## 7. 日本語教育センターニューズレター発行報告

昨年度にひきつづき「日本語教育センターニューズレター」を発行した。今年度は、学生が利用する図書館などについて情報を発信した。

詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/default.aspx> を参照されたい。

## 8. 短期日本語プログラム報告

今年度は、新型コロナウイルスの影響により 21 年度以降オンライン実施となっていた夏のプログラムも対面に戻し、夏・秋・冬ともに対面で実施した。夏については、2 週間で池袋実施、日本文化社会講義ではなく学生団体とのコラボレーションという形式で実施したが、いずれのプログラムも参加学生の満足度は高かった。

### 【春学期】

#### 1 プログラム概要

##### 1) 開催期間

2024 年 7 月 23 日 (火) ~ 8 月 2 日 (金)

チェックイン：2024 年 7 月 22 日 (月)、チェックアウト 8 月 3 日 (土)

##### 2) 開催場所・宿舎

池袋キャンパス ・ サクラホテル池袋

##### 3) コースデザイン

単位数：2 単位 (2,800 分)

\*単位数内訳：日本語科目 2 単位 (2,800 分) 50 分×56 回

##### 4) 開講クラス及びクラス数

2 レベル 2 クラス (入門 Beginner、初級 Elementary)

##### 5) 日本文化ワークショップ (実施順)

①和楽器 (協力：合唱団アヒル会<和楽器サークル>)

②書道 (協力：書道研究会)

## 2 実施詳細

1) 応募・採否件数： 応募：49、採用：21（うち辞退・キャンセル11）、不採用：28

2) 参加学生：10名

	大学間協定校	GLAP
授業料免除枠 (9名)	ダグラス大学(3)、 リヴァプール大学(4)	ヴァージニアウェスレヤン大学 1名 ノーザンアリゾナ大学 (1)
一般枠 (1名)	華東師範大学 1名	

## 3) 学内の協力

学生団体	合唱団アヒル会、書道研究会	
学生	住み込みアルバイト	文学部 (4)、経済学部 (1) 観光学部 (1)、現代心理学部 (1) 【計7名】
	イベントサポーター (池袋キャンパスツアー)	文学部 (2)、経済学部 (1)、理学部 (1)、コミュニティ福祉学部 (1)、異文化コミュニケーション学部 (1) 【計6名】
	日本語授業ボランティア	文学部 (5)、経済学部 (3)、社会学部 (5)、法学部 (1)、観光学部 (1)、異文化コミュニケーション学部 (1) 【計16名*】*延べ25名
事務・運営補助	教務事務センター、国際センター、財務部、人事部、図書館、保健室、PRAC、メディアセンター	

## 3 成果

- ・ 協定校との派遣・受入インバランス解消
- ・ 本学のプレゼンスの強化
- ・ 対日関心・理解の向上
- ・ 本学学生との国際交流の促進

国際センター協力のもと、グローバルラウンジ企画と連携して以下のイベントを実施。参加者数は以下の通り。

イベント名称／実施日	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数*	合計参加者数 (延べ人数)
Japanese Traditional Card Games / 7月24日(水)	8	9	17
Japanese Café / 7月30日(火)	5	8	13



#### 4 今後の課題

- ・協定校との連携強化、授業料免除枠の有効活用
- ・立教生への短プロ周知強化（日本語授業ボランティア、イベントサポーター等）

#### 5 授業

##### 日本語クラス 1（入門）

担当授業者名：小森、任、野尻、野口

履修者数：6名

使用教材：独自教材

##### 日本語クラス 2（初級）

担当授業者名：小林、嶋原、栃木、三浦、長谷川

履修者数：4名

使用教材：独自教材

2024年度春学期の短期プログラムは、10名が受講した。日本語クラスは2クラス体制で8日間の短いコースで行われた。クラス1は、日本語学習歴のない学生対象のクラスとし、6名が受講生した。クラス2は、既習者で、4名が受講した。

両クラスとも独自の教材を使用し、短期プログラム期間中に受講生が遭遇しそうな場面に焦点を絞って、日常会話の指導を行った。両クラスで取り上げたトピックは「初めて会って人に自己紹介をする」、「お店やレストランで注文をする」、「友達に予定を聞く」、「週末したことについて説明する」、「日本で感じたことや考えたことを伝える」などである。両クラスで使用した教材の構成は同じであるが、クラス1はローマ字付き、クラス2はローマ字なしのものを用意した。また、独自の教材を用いて、クラス1ではひらがな、クラス2ではカタカナの導入も行った。教室活動では日本語ボランティアにも参加してもらい、受講生が実際に日本人の大学生と会話できる時間を設けた。最終発表は短期日本語プログラムが対面に戻ったこともあり、受講生の日本語レベルを考慮し、自己紹介を行うとともに「プログラムでの経験」についてスピーチをした。

なお、上記の日本語クラスだけでなく、本学の学生団体の協力のもと、日本文化体験講座も2回実施した。それぞれ「書道」と「和楽器」をテーマに、クラス1、2合同で行った。受講生が実際に体験できる参加型であり、本学の大学生と交流できる時間が多く設けられていたため、受講生も満足できたようである。

【秋学期】 (秋期プログラム)

1 実施の概要

1) プログラム期間

2024 年 11 月 26 日 (火) ~12 月 13 日 (金)

チェックイン：2024 年 11 月 25 日 (月)、チェックアウト 12 月 14 日 (土)

2) 開催場所・宿舎

新座キャンパス、池袋キャンパス (※4 日間)

デイリーホテル新座店、デイリーホテル志木店

3) コースデザイン

単位数：4 単位 (4,300 分)

\* 単位数内訳：日本語科目 2 単位 (2,800 分) 50 分×56 回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2 単位 (1,500 分) 50 分×30 回

4) 開講レベル及びクラス数

2 レベル 3 クラス (入門 Beginner Class：3 クラス)

5) 日本文化社会講義 (実施順)

① Small Business in Japan (経済学部 小澤康裕先生)

② Foreign Language Education and Achievement Motivation (異文化コミュニケーション学部 マーティン・ロン R. 先生)

③ From Edo to Tokyo: Economic History of the City (経済学部 田島夏与先生)

2 実施詳細

1) 参加学生 シドニー大学 38 名 (※シドニー大学が学内選抜を実施)

2) 学内の協力

学部(日本文化社会講義)		経済学部、異文化コミュニケーション学部
学 生	住み込みアルバイト	文学部(5)、法学部(1)、観光学部(3)、コミュニティ福祉学部(5)、 経営学部(3)、現代心理学部(1)、異文化コミュニケーション学部(1) <b>【計 19 名】</b>
	イベントサポーター (キャンパスツアーガイド)	文学部(1)、経済学部(1)、観光学部(11)、コミュニティ福祉学部(2)、 現代心理学部(1) <b>【計 16 名】</b>
	日本語授業ボランティア	文学部(1)、法学部(1)、経済学部(1)、理学部(1)、観光学部(6)、 コミュニティ福祉学部(5)、経営学部(1)、現代心理学部(3)、スポーツ ウェルネス学部(2) <b>【計 14 名】</b>
事務・運営補助		教務事務センター、国際センター、財務部、人事部、図書館、保健室、 メディアセンター

### 3 成果

- ・本学への留学パターン多様性の促進
- ・多様な日本語レベル及びバックグラウンドに対する柔軟な受け入れ態勢
- ・本学学生の国際交流の促進(国際センター協力のもと、グローバルラウンジ企画と連携して以下を実施。)

イベント名称／実施日	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	参加者数合計 (延べ人数)
Japanese Culture Presentation & Talking Event / 11月27日(水)	14	5	19
Japanese Café / 12月2日(月)	14	13	27
Japanese Traditional Card Games / 12月11日 (水)	9	5	14
参加延べ人数合計	37	23	60

### 4 今後の課題

- ・シドニー大学との短期日本語プログラム実施にかかる協定に基づく団体受入は今年度をもって終了し、また来年度以降は実施期間やキャンパス等が変更にはなるが、これまでの短プロ参加者からの評価が高い本学学生との交流をさらに強化するとともに本学学生により多くの交流の機会を提供するべく、本学学生への短プロ周知の強化を引き続き検討していく。

### 5 授業

#### 日本語クラス 1 (入門 1)

担当授業者名：野尻、末松、斉藤、小林  
履修者数：13名  
使用教材：独自教材

#### 日本語クラス 2 (入門 2)

担当授業者名：数野、袁、長谷川、野口  
履修者数：13名  
使用教材：独自教材

#### 日本語クラス 3 (入門 3)

担当授業者名：高嶋、川野、武田、和田、任

履修者数：12名  
使用教材：独自教材

2024年度秋学期、秋の短期プログラムは、37名が受講した。日本語クラスは3クラス体制で3週間のコースで行われた。3クラスとも日本語学習歴のない学生対象のクラスで、クラス1とクラス2が各13名、クラス3が12名だった。クラス編成ではさまざまなバックグラウンドの学生が交流できるように、受講生の専門や学年などを考慮した。

日本語クラスでは、独自の教材を用いて、ひらがなの導入および短期プログラム期間中に受講生が遭遇しそうな場面で使える日常会話の指導を行った。会話のトピックとしては「初めて会って人に自己紹介をする」、「お店やレストランで注文をする」、「友達に予定を聞く」、「週末したことについて説明する」、「日本で感じたことや考えたことを伝える」などを取り上げた。また、日本語のクラスが長時間続く日は、日本文化に関連する活動として書道を取り入れるなど、受講生が学習意欲を維持できるように工夫した。

最終発表は昨年度の反省を踏まえ、自己紹介を行うとともに「プログラムでの経験」についてスピーチを行った。その結果、3週間に訪れた場所や出会った人たち、また日本での気づきなどについて、授業で学んだ表現を積極的に使って伝えようとする姿が多く見られた。最終発表については次回以降も受講生の日本語レベルを十分考慮し、達成感を得ることができる難易度のテーマを用意する必要があると考えられる。

なお、秋学期も日本語ボランティアが参加し、スピーチのサポートなど多いに活躍した。

秋に受講した37名は全員、学習意欲が高く、授業活動に熱心に参加する学生であった。しかし、終日日本語のクラスが続く日は、集中力を維持することが少々難しく、学習意欲が低下してしまう受講生も見られた。このような課題を解決するために、秋のプログラムでは日本文化に関連する活動を取り入れたり、ひらがなのゲームを取り入れたりしたが、次回に向けて教室活動についてさらに検討をする必要がある。

#### 日本文化社会講義

担当授業者名：野尻、末松、斉藤、数野、袁、長谷川、野口、高嶋、川野、武田、和田、小林、任  
履修者数：37名  
使用教材：独自教材

2024年度秋学期の日本文化社会講義は、テーマ1「Small business in Japan」（経済学部、小澤康裕先生）、テーマ2「Foreign Language Education and Achievement Motivation」（異文化コミュニケーション学部、マーティン・ロン先生）、テーマ3「東京の歴史—江戸から東京へ—From Edo to

Tokyo: Economic History of the City" (経済学部、田島夏与先生) の3つのテーマで行われた。3つのテーマに対する理解を深めることを目的に、本学の学部教員による講義とフィールドトリップの前後に事前学習と事後学習を行った。フィールドトリップとして、テーマ1は浅草を訪問し、テーマ2は学内で本学の学生と活動を行い、テーマ3は神田川クルーズを行った。事前学習、講義、事後学習では、授業での気づきや疑問点などをリアクションペーパーに英語または日本語で書くという課題を課した。事後学習では、学部教員の指示により、テーマに関連したエッセーの作成が課された回もあった。

秋学期は、昨年度、課題として挙げた1) 各担当教員のリアクションペーパーの捉え方が違った、2) テーマごとに日本文化社会講義のためのクラスを編成したため、教員の毎回の授業記録が少々煩雑になった、という2点の改善を試みた。そのために、1) 担当教員全員が集まる連絡会にて、本プログラムにおけるリアクションペーパーの位置づけについて説明し、全員が共通認識のもと、指導に取り組めるようにした。また、リアクションペーパーの文字数、リアクションペーパーを書かせる最大の時間、時間内に提出できなかった学生の対応の仕方について改めて説明を行った。2) テーマごとにクラスの編成をするのではなく、日本語クラスと日本文化社会講義のクラスを同じものとし、教員の授業記録も各自が担当する日本語クラスの受講生についてのみ記録をするように依頼した。その結果、1) リアクションペーパーの指示が統一され、どのクラスも全く同じ条件でリアクションペーパーを書かせたため、公平性を保つことができた。2) 受講生がテーマが変わるたびに新しいクラスを覚えなければいけないという負担がなくなり、教員が受講生の管理および授業記録において感じていた負担も軽減された。

今回は、今学期行った新たな試みを再検討するとともに、さらに多様化する受講生一人ひとりが達成感を得ることができるようにするためには、どのような運営方法がより適切か、工夫を重ねていく必要がある。

## 【秋学期】 (冬期プログラム)

### 1 実施の概要

#### 1) プログラム期間

2025年1月14日(火)～1月31日(金)

チェックイン: 2025年1月13日(月)、チェックアウト 2月1日(土)

#### 2) 開催場所・宿舎

新座キャンパス、池袋キャンパス (※4日間)

デイリーホテル新座店、デイリーホテル志木店

#### 3) コースデザイン

単位数: 4 単位 (4,300 分)

\*単位数内訳: 日本語科目 2 単位 (2,800 分) 50 分×56 回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2 単位 (1,500 分) 50 分×30 回

4) 開講レベル及びクラス数

3 レベル 3 クラス (入門 Beginner Class、初級 Elementary、  
初中級 Pre-intermediate)

5) 日本文化社会講義 (実施順)

- ① Motivation to learning a foreign/second language: A historical overview (異文化コミュニケーション学部 マーティン・ロン R. 先生)
- ② Tanizaki Jun'ichiro's "In Praise of Shadows" in the context of Japanese aesthetics and Japanese residential design (GLAP キヴァニー・クリストファー先生)
- ③ Sports cultures at the Japanese university: Case of Rikkyo University students (スポーツウエルネス学部 川端雅人先生)

2 実施詳細

1) 参加学生 : 32 名\*

\*うち1名はプログラム期間中に帰国したが、最終発表にはオンラインで参加

(応募者:53名、採用者:40名、不採用者:13名、辞退・未入金:8名(含:免除枠採用後の辞退者:1名))

	大学間協定校	学部間協定
授業料免除枠 (10名)	マードック大学 (8) ライデン・ユニバーシティ・カレッジ(1)、 ユニバーシティ・カレッジ・ユトレヒト(1)	
一般枠 (22名)	RMITメルボルン校(7)、漢陽大学校ERICA キャンパス(4)、ラトローブ大学(3)、ウェリントン ヴィクトリア大学(1)、高麗大学校(1)、ニュー サウスウェールズ大学(1)、ライデン・ユニバー シティ・カレッジ大学(1)、ラドバウド大学*(1)	シドニー大学(3)

\*ラドバウド大学は学部間協定もあり

2) 学内の協力

学部(日本文化社会講義)	GLAP、異文化コミュニケーション学部、スポーツウエルネス学部	
学生団体	体育会テニス部	
学 生	住み込みアルバイト	文学部(4)、法学部(2)、観光学部(3)、コミュニティ福祉学部(1)、経営学部(1)、現代心理学部(2)、異文化コミュニケーション学部(2) 【計20名】
	イベントサポーター (キャンパスツアーガイド、フィールドトリップ同行)	文学部(2)、社会学部(1)、観光学部(5)、コミュニティ福祉学部(3)、経営学部(1)、現代心理学部(2) 【計14名】

日本語授業ボランティア	文学部(1)、観光学部(3)、コミュニティ福祉学部(2)、経営学部(1)、現代心理学部(1)、異文化コミュニケーション学部(2) 【計10名】
事務・運営補助	教務事務センター、国際センター、財務部、人事部、図書館、保健室、メディアセンター

### 3 成果

- ・協定校とのインバランス解消
- ・本学のプレゼンスの強化
- ・本学学生との国際交流の促進

国際センター協力のもと、グローバルラウンジ企画と連携して以下のイベントを実施。参加者数は以下の通り。

イベント名称／実施日	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	参加者数合計 (延べ人数)
Japanese Culture Presentation and Social Event / 1月15日(水)	11	5	16
Japanese Café / 1月20日(月)	13	10	23
Rikkyo Tennis Club Event / 1月25日(土)	7	7	14
Japanese New Year's Game Fest / 1月29日(水)	13	6	19
参加延べ人数	44	28	72

### 4 今後の課題

- ・協定校とのさらなる連携強化、授業料免除枠の有効活用
- ・参加者に対するプログラム参加に必要な英語運用力の周知
- ・池袋キャンパス実施への変更に伴う立教生に対するプログラム周知及びボランティア登録者の無断欠席等への対策

### 5. 授業

日本語クラス1（入門）

担当授業者名：野尻、末松、野尻、高嶋、東平

履修者数：11名

使用教材：独自教材

## 日本語クラス 2 (初級)

担当授業者名：数野、川野、武田、川野、斉藤、小林  
履修者数：14名  
使用教材：独自教材

## 日本語クラス 3 (初中級)

担当授業者名：藤田、栃木、長谷川、野口、任  
履修者数：7名  
使用教材：独自教材

2024年度秋学期、冬の短期プログラムは、32名が受講した。日本語クラスは3クラス体制で3週間のコースで行われた。クラス1は日本語学習歴のない学生対象のクラスとし、ローマ字付きのテキストを使用し、クラス2はひらがなの読み書きができる学生対象のクラスとし、ローマ字なしのテキストを使用した。また、クラス3はひらがなとカタカナの読み書きができる学生対象のクラスとし、ひらがな、カタカナ、漢字（ルビ付き）で表記されているテキストを使用した。

クラス1とクラス2は独自の教材を用いて、短期プログラム期間中に受講生が遭遇しそうな場面で使える日常会話の指導を主に行った。両クラスで取り上げた会話のトピックは「初めて会って人に自己紹介をする」、「お店やレストランで注文をする」、「友達に予定を聞く」、「週末したことについて説明する」、「日本で感じたことや考えたことを伝える」などである。クラス3では受講生が遭遇しそうな場面で使える日常会話の指導とともに、最終発表に向けての練習も行った。クラス3で取り上げたトピックは「大学や町についてスピーチをする」、「旅行中に起きたトラブルに対応する」、「母国と日本の食文化について説明する」、「友達を食事に誘う」、「友達の誘いに応じる/誘いを断る」、「許可を求める」、「お別れの挨拶をする」などである。クラス3はひらがなとカタカナの読み書きができる受講生だったため、会話の指導だけでなく、お礼の手紙を書く活動や会話の穴埋めなどの活動も取り入れた。また、クラス1ではひらがなの導入を、クラス2ではカタカナの導入も行った。

なお、日本語のクラスが長時間続く日は、秋学期と同様に日本文化に関連する活動として書道を取り入れるだけでなく、復習の時間を多めにしたり、日本語クラスと文化社会講義の区切りを考慮して午前と午後の授業内容を決めたりし、改善を図った。

最終発表はクラス1と2は自己紹介を行うとともに「プログラムでの経験」についてスピーチを行った。クラス3はそれに加え、さらにリサーチをするように求めた。「プログラムでの経験」について説明をし、感想を述べるだけでなく、各自がさらに関連する資料などを読んだうえで、比較、考察などを行うように指示した。たとえば、日本の食文化についてスピーチする受講生には、日本と母国の食文化を比較したうえで、意見を述べるように指導した。その結果、どのクラスの受講生も、自身が話せる範囲内で、3週間の出来事を日本語で話そうとする積極的な姿勢が多く見られた。受講生から、達成感を



感じる事ができたという声もあがった。特に既習語彙や文法が限定的である入門クラスの受講生には、3週間でスピーチができるようになったことが、プログラムでの学びを可視化し、学習意欲を高めるのに役立ったようである。

なお、冬のプログラムでも会話の練習や最終発表の準備活動などに日本語ボランティアが参加し、多に活躍した。

冬の短期日本語プログラムは、受講生の母国、出身校、学年などが秋よりもさまざまであった。秋の課題として挙げた「多様な受講生に対応できるクラス運営」を意識し、受講生一人ひとりが楽しくプログラムに参加し、日本語学習に対してさらに学習意欲を高めていけるように、3クラスで扱うトピックや活動、最終発表のお題などに差をつけた。その結果、学習意欲が高く、協力的な学生が多かったため、どのクラスも毎回の授業活動に積極的に参加し、最終発表も非常にわかりやすいスピーチをすることができた。

しかしクラス2とクラス3の日本語レベルの差が大きいと感じた学生もいたようである。カタカナの読み書きはできないが、クラス2で扱ったトピックについて話したり、聞いたりすることに対してはあまり難しさを感じなかったという。短期日本語プログラムでは、初日のオリエンテーションにて基本的には本人の希望を優先し、クラス分けを行っている。今回は文字の読み書きを主な基準とし、クラス2と3のテキストを見せながらクラスで求められることについて説明を行い、三日間クラス移動が可能であると伝えた。今後、各クラスのレベル差をどのように調整するか、またクラス分けの基準をどのように設け、短時間でどのように伝えるかなどについて、さらに検討をする必要がある。

#### 日本文化社会講義

担当授業者名：野尻、武田、藤田、高嶋、川野、嶋原、佐々木、長谷川、斉藤、東平、小林、  
任

履修者数：32名

使用教材：独自教材

2024冬の日本文化社会講義は、テーマ1「Motivation to learning a foreign/second language: A historical overview」(異文化コミュニケーション学部、マーティン,ロン先生)、テーマ2「Tanizaki Jun'ichirō's "In Praise of Shadows" in the context of Japanese aesthetics and Japanese residential design」(文学部、キヴァニー,クリストファー先生)、テーマ3「Sports cultures at the Japanese university: Cases of Rikkyo University students」(スポーツウエルネス学部、川端雅人先生)の3つのテーマで行われた。

3つのテーマに対する理解を深めることを目的に、本学の学部教員による講義とフィールドトリップの前後に事前学習と事後学習を行った。フィールドトリップとして、テーマ1は学内での本学の学部生と活動を行い、テーマ2は日本民家園を訪問し、テーマ3は「A trip to observe the legacy of Tokyo

Olympic 2020 Games in the Tokyo Bay area」をテーマとし、レインボーブリッジ周辺で散策を行った。事前学習、講義、事後学習では、授業での気づきや疑問点などをリアクションペーパーに英語または日本語で書くという課題を課した。事後学習では、秋と同様に、テーマに関連したエッセーの作成が課された回もある。また、冬は来日前課題があり、事前に英語の論文や資料の読解が課題として課された回もある。

冬のプログラムでも日本文化社会講義は日本語クラスと同じ受講生で事前、事後学習を行い、受講生および教員がテーマごとにクラスが変わるという負担を感じずに、活動に集中できるようにした。また、リアクションペーパーに関しても引き続き、教員同士が共通の理解のもと、指示をするように徹底した。その結果、どのテーマに関しても問題なく、すべての活動を進めることができた。

ただ、秋のプログラムにはなかった事前課題があり、英語力の問題で負担を感じた学生もいた。また、エッセーを授業時間内に書くということに対して不安を抱えている学生もいたようである。本プログラムは、英語での活動が多いことを事前に伝えているが、英語で学術的文章を読んだり、ディスカッションしたりすることには慣れていない学生もいるため、担当教員としてどのようなサポートができるか、毎回慎重に考える必要があった。昨年度も挙げたことであるが、日本語クラスでの学習内容のみを評価の対象とすべきかに関しては、過去の経緯を踏まえ、十分に時間をかけて慎重に検討を行っていく必要があると思われる。

## 9. センター員活動報告

日本語教育センターセンター員 教育研究業績一覧

池田伸子

研究論文

1. 「共同教育を基盤とした授業活動は大学生の学びに対する意識を変えるか—自律性・主体  
的学びに焦点を当てて—」、『共同と教育』19号、日本協同教育学会（印刷中）
2. 「大学の日本語教師養成課程における教育実習前学習としてのケースメソッドの有効性—PCK 向  
上の視点から—」、『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育セ  
ンター、2025年、1-22頁
3. 「学生は統合型協同授業をどう受け止めたか—大学の一般教養課程での事例研究—」  
（任ジェヒ、藤田恵との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センタ  
ー、2025年、23-43頁

研究助成

1. 2021.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育質保証を担う評価人  
材育成：発展的評価を実践できる日本語教師への研修」（研究分担者）（課題番号：21K0063）

丸山千歌

研究論文

1. 「多声モデル生成法としての複線径路等至性アプローチのための試論 (2)」(小澤伊久美との共同執筆)『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センター、2025年、45-61頁

研究発表

1. 「日本語教育と日本語研究の促進におけるイノベーションと戦略—社会変化と日本語教育・日本語研究の発展—」、『The 6th ICJSLE 2024—日本語教育と日本語研究の促進におけるイノベーションと戦略』、2024年8月24日、インドネシア日本語教育学会、於 The ibis styles Bali Denpasar (基調講演)、<https://s.id/icjsle2024>
2. 「日本語力の向上を目指して—JF スタンダード A1-A2 会話編—」(数野恵理との共同発表)、『AGBJI The 4<sup>th</sup> Safari Education International Seminar and Workshop』、2024年10月26日 (オンラインによる招待講演)

研究助成

1. 2020.4～現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「日本とつながって生きる」選択から見える日本語教育の新時代(研究代表者)(課題番号:20K00707)
2. 2021.4～ 科学研究費助成金(基盤研究(C))「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成:発展的評価を実践できる日本語教師への研修」(研究分担者)(課題番号:21K0063)

任ジェヒ

研究論文

1. 「待遇コミュニケーション研究からの社会貢献—特集 談話研究の社会貢献:身近な現場から世界まで—」(蒲谷宏、アドゥアヨムアヘゴ・希佳子、徳間晴美との共同執筆)『社会言語科学』27巻1号、社会言語科学会、2024年、47-62頁
2. 「学生は統合型共同授業をどう受け止めたか—大学の一般教養課程での事例研究—」(池田伸子、藤田恵との共同執筆)『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センター、2025年、23-43頁
3. 「韓国語を母語とする日本語学習者の聴解困難点—「日本語非母語話者の聴解コーパス」の分析に基づいて—」『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センター、2025年、79-96頁

調査報告

1. 「日本語能力試験N3程度で入学した正規学部留学生の集中日本語科目修了後の一年発展的評価—」(数野恵理との共同執筆)『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センター、2025年、177-193頁

## 研究発表

1. 「人生型の主体的な学び」につながる実践のあり方」、日本語教育アクティブラーニング研究会 (ALJE) 第 5 回 (2024 年度)、Zoom によるオンライン開催、2024 年 5 月 18 日
2. 「韓国語を母語とする日本語学習者の聴解における困難点」、2024 年度日本語教育学会春季大会、Zoom によるオンライン開催、2024 年 5 月 26 日
3. 「待遇コミュニケーションの視点で捉える日々の実践」(平松友紀との共同発表)、第 13 回待遇コミュニケーション学会研究会、Zoom によるオンライン開催、2025 年 3 月 1 日

## その他

1. ウェブ版日本語読解教材「日本語を読みたい!」

<https://www.nihongo-tai.com/japanese/yomu/about.php>

## 研究助成

1. 2020. 4 ~ 至現在 科学研究費助成金 (若手研究) 「日本語学習者の多様な言語生活に対応したバリエーション教育開発のための基礎研究」(研究代表者) (課題番号: 20K13092)
2. 2022. 4 ~ 至現在 科学研究費助成金 (基盤研究 (B)) 「聴解コーパスの構築による日本語学習者の聴解困難点と推測技術の実証的研究」(研究協力者) (課題番号: 22H00669)

## 数野恵理

### 報告

1. 「ハンガリーの日本語学習者が書いたナラティブ作文の評価—上位群と下位群の比較から—」(影山陽子・坪根由香里・トンプソン美恵子との共同執筆)、『ヨーロッパ日本語教育』27、2024 年、309—320 頁
2. 「日本語能力試験 N3 程度で入学した正規学部留学生の集中日本語科目修了後の一年 発展的評価—」(任ジェヒとの共同執筆)、『日本語・日本語教育』第 8 号、立教大学日本語教育センター、2025 年、177—193 頁

### 研究発表

1. 「日本語ライティングにおけるナラティブ作文の評価と教育: フローチャートを用いて」(坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同発表)、『第 62 回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会』、立教大学、2024 年 6 月 15 日 (講演)
2. 「日本語力の向上を目指して—JF スタンドア A1—A2 会話編—」(丸山千歌との共同発表)、『AGBJI The 4th Safari Education International Seminar and Workshop』、2024 年 10 月 26 日 (オンラインによる招待講演)
3. 「タイの大学で教える日本語教師のナラティブ作文評価時の意識を探る: 発話思考法による分析」(坪根由香里・影山陽子との共同発表)、『海外日本語教育学会 2024 年度第 3 回研究例会』、シラパコーン大学 (タイ)、2025 年 2 月 9 日

小林友美

報告

1. 「中級日本語会話クラスにおける自己会話分析と他者会話分析を通じた学習者の学び」『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センター、2025年、133-144頁

研究発表

1. 「大学生の初対面交流会話における参加者の調整行動—母語場面と接触場面の先輩と後輩の関係性に着目して—」、現代日本語研究会2024年度研究集会、オンライン、2024年6月30日
2. 「相互作用を意識した口頭表現能力育成のための教材開発と授業実践」、韓国日本語教育学会第67回国際学術発表大会、於国立順天大学（韓国）（オンラインでの配信と併せたハイブリッド形式）、2024年9月28日

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金（若手研究）「相互作用を意識した会話教育のための教材開発」（研究代表者）（課題番号：20K13089）

泉大輔

研究論文

1. 「会話データにおける「文の包摂」の出現状況」『言語資源ワークショップ2024発表論文集』、国立国語研究所、2024年、9-23頁
2. 「「文の包摂」研究の課題と展望—野田春美（2024）「書評：泉大輔著『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』」をめぐって—」『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センター、2025年、63-78頁

報告

1. 「初級日本語科目「PEACE日本語」におけるタスクベース型のコースデザイン」（保坂 明香との共同執筆）『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センター、2025年、117-132頁

研究発表

1. 「会話データにおける「文の包摂」の出現状況」、言語資源ワークショップ2024、2024年8月28日
2. 「日本語の「文の包摂」と英語の “phrasal compounding” の共通点と相違点」（細谷諒太との共同発表）、日本言語学会第169回大会、2024年11月9日
3. 「第1部 日本語の語構成における逸脱—「文の包摂」を対象に—／第2部 逸脱的な造語法から広がる言語研究」、日本語用論学会第27回大会シンポジウム「言語コミュニケーションのなかの逸脱と創造性」、2024年12月1日（招待講演）
4. 「逸脱的な造語—そんなことないよ待ちするかまってちゃん vs 話しかけるなオーラ

全開の絶対関わりたくないマン—」、言語学フェス 2025、2025 年 2 月 1 日

5. 「漫才における逸脱的な造語「文の包摂」の使用—「EXILE オーディション二次審査 で落ちる顔」—」、第 49 回社会言語科学会研究大会、2025 年 3 月 2 日

その他

#### 1. ラジオ番組出演

特集名 「国語に関する世論調査 新しい言葉が広がる背景は」(2024 年 9 月 19 日放送)

放送局 NHK ラジオ第 1 放送

番組名 『N らじ』

研究助成

1. 2022. 11 ~ 至現在 国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」(研究代表者: 小磯花絵)

鹿目葉子

調査報告

202

1. 「日本語の授業におけるシェアド・リーダーシップの育成の提案—韓国アイドルグループ Stray Kids の発話から—」(大橋真由美、榎原実香との共同執筆)『日本語・日本語教育』第 8 号、立教大学日本語教育センター、2025 年、161—176 頁

研究発表

1. 「日本語授業における「主体性」を引き出すための対話の手法—Stray Kids の発話データを手がかりに—」韓国日本研究団体第 13 回(韓国日本学会第 108 回)国際学術大会、2024 年 8 月 22 日

小松満帆

報告

1. 「アニメをテーマとした初級学生対象の日本社会・文化コース—学習者がアニメを通じた学びに期待すること—」、『日本語・日本語教育』第 8 号、立教大学日本語教育センター、2025 年、145—160 頁

研究発表

1. 「アニメ『で』学ぶ日本社会・文化コースの実践—初級日本語学習者の日本語力向上への気づきに注目して—」、ポスター発表、日本語教育方法研究会、於桜美林大学、2025 年 3 月 15 日(予定)

保坂明香

報告

1. 「初級日本語科目「PEACE 日本語」におけるタスクベース型のコースデザイン」（泉大輔との共同執筆）『日本語・日本語教育』第8号、立教大学日本語教育センター、2025年、117-132頁  
研究発表

1. 「大学における日本語教員の学習者支援—半構造化面接から見てきた教員の工夫と困難点」（武田知子・澁川晶との共同発表）、ポスター発表、日本語教育国際研究大会 於メモリアルユニオン 米国、2024年8月2日

#### その他

1. 「発達障害等の特性がある日本語学習者支援と情報提供のためのウェブサイトについての意見交換」（武田知子・澁川晶との共同発題）、グローバルにつながるオンライン日本語教育シリーズ 世界中の日本語教育関係者のためのオンライン交流会、2025年3月22日

#### 研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「認知特性により学習に困難を示す日本語学習者への支援体制構築に向けた基礎的研究」（研究分担者）（課題番号：20K00703）

## 10. 2024年度FD記録

### 1. FD委員会の開催日

第1回	7月	19日	第2回	9月	2日
第3回	2月	14日	第4回	2月	28日

### 2. 2024年度の課題の達成状況

#### 課題1：PEACE日本語プログラム

24年度は、PEACE日本語入試（学校長推薦、英語トラック入試）で入学してくる学生が増えたため、PEACE日本語1～3まで春学期、秋学期ともに開講することができた。PEACE日本語2、3では、タスクベースのコースに改善を行い、コースコーディネーターが中心となって、教材開発に取り組んだ。同時に、履修者に対してアンケート調査等も実施し、英語トラックであるPEACEの学生にとって有用なコースにするべく、日々改善を行っている。PEACE日本語1～3では、日本に由来のある学生もいるため、「読む、書く」と「話す、聞く」の技能間の能力差が問題になりつつあるため、今後、そのような学生にどう対応していくのかも考えていく必要があることが見えてきているが、今後も履修者の状況を丁寧に把握しながら、授業改善につなげていきたい。

第1回及び第3回で共有されたPEACE日本語の運用状況については、以下の通り。

- ①PEACE2 及び 3 については、上述のようにタスクベースのコース運営を継続していく。担当教員及び受講生からのフィードバックから、この形での授業運営に対して満足していることが示されたため、学生の状況を見ながら引き続き教材開発、評価方法の改善などを行っていく。
- ②PEACE 1 については、タスクベース型の授業の実施は当面は見送る。PEACE は確かに英語で学位を取得していくトラックではあるが、日本での長期の生活、さらには日本での就職を目指す学生のことを考えた場合、最初の基礎をしっかりと固めておく必要がある。そのため、タスクベースではなく、文法シラバスを基本とした授業デザインを継続すべきだからである。
- ③日本語力が J4 以上の学生に対して、どのような形で全カリ言語（必修）を履修させていくべきなのかは、引き続き大学と協議を続けていく。日本語で学位を取得していかなければならない留学生の日本語が 4 コマであり、英語で学位を取得していく PEACE 学生の日本語が 10 コマというのは、やはり改める必要がある。今後は、全カリ、教務事務センターとも引き続き情報を共有し、どのように改善していくか早急に決定していく必要がある。

第 2 回と第 4 回の拡大 FD では、PEACE 日本語を担当する教員全員でコースの目的やクラス運営について意見交換を行い、抱える課題について解決策を話し合うとともに、円滑な授業運営ができるようコーディネーターを中心に活動を行った。特に、日本語レベルが中級以上の PEACE 学生の場合、日本語学習に対するモチベーションの維持が課題となっているため、授業を担当する教員とも個々の学生の状況を共有し、円滑な授業運営をしていく必要性について確認した。

## 課題 2 : NEXUS 日本語プログラム

2024 年度は、ベトナム、モンゴルから 1 名ずつ、合計 2 名の新生を迎え、昨年度不合格だったウクライナの学生 1 名を加えた 3 名が NEXUS 日本語を履修した。

再履修となったウクライナの学生も含め、3 名全員が半期の NEXUS 日本語を修了し、4 月から学部のプログラムへと合流することができている。

各学部から提供された書籍をもとに個々の学生が学ぶ「専門の日本語」については、今年度の入学者が経営学部、異文化コミュニケーション学部であったことから、過去の経験を活かし、より効率的に学生が学んでいけるように授業運営ができている。また、学生が 3 名だったことから、「専門の日本語」は 1 クラス体制で実施した。今後、NEXUS の学生が増えてくることも鑑み、チュートリアル形式ではなく、履修者が増えても対応できる形での運営に切り替えている。

第 1 回、第 3 回の FD においては、NEXUS 日本語のコーディネーターから今年度の授業運営や課題について共有され、さらにプログラムについて充実させていく方向で話し合いがもたれた。また、第 2 回の FD においては、NEXUS 日本語科目を担当する教員で情報共有を行い、効果的なプログラム実施に向けて話し合いを行った。NEXUS 日本語の履修者は全員が学校長推薦で入学してくる学生であり、非常に意欲的で熱心な学生であるが、個々の学生の日本語力（語彙力、漢字力）に差があることから、今後、漢



字圏の学生が入学してきた際の授業運営、教材等をどのようにしていくか、教員全体で話し合いを持った。

### 課題3：日本語相談室拡充

23年度に続き、24年度も教員枠、学生アドバイザー枠ともに相談室の利用率が減少し続けており、特にレポートや論文の相談件数が減っていることが報告された。第1回と第3回のFDにおいて、その現象の原因の1つに学生たちがChat GPTなどの生成AIを利用していることが挙げられ、それについて教員全体で意見交換を行った。

話し合いの結果、稼働率の低い学生アドバイザー枠については、25年度の春学期は休止とすること、さらに、これまでは正規学部留学生、正規大学院留学生を対象としていた相談内容を、特別外国人学生の日本語学習相談—具体的には授業でよく理解できなかった点の確認や、自分が書いた作文の確認等—にまで広げた形で広報しながら、引き続き利用率について追っていくこととなった。

また、25年度の春学期中には、今後の日本語相談室の教員枠についても検討を行い、26年度以降の相談室の在り方について考えていくこととなった

### 3. 2024年度の課題と計画

2024年度の授業運営から、PEACE日本語においては日本語力の高い学生の日本語履修についてまだ課題があること、NEXUS日本語においては、学生数の増加に対応できる授業運営の方法についてさらに検討が必要なこと、日本語相談室においては、利用率に応じた相談室の展開の在り方について検討が必要なことから、24年度のFD課題3点については25年度も継続して取り上げていくこととした。

加えて、新座で展開している「総合日本語4-6」、「漢字」の科目でのTA活用について検討していくことを決定した。これらの科目は、異なるレベルの学生が1つの教室で学ぶ科目であること（総合日本語4-6）、履修者数が多いこと（漢字）から、TAを活用する形で授業運営を行っているが、近年、日本語教育を学んだことがあるTAを継続的に見つけることが難しくなっていることから、TAを用いない形での授業運営、さらには、日本語教育を学んだことがないSAでの授業運営の可能性について考えていくこととした。

以上から、25年度の課題と計画は以下の通りである。

#### 課題1：PEACE日本語プログラム

タスクベース型のプログラムの状況（PEACE2, 3）

J4以上の学生の状況

#### 課題2：NEXUS日本語プログラム

履修者数が増えた場合に対応可能な「専門の日本語」の授業運営

漢字圏の学生に対する授業運営

課題 3 : 日本語相談室

稼働率に応じた展開の仕方

課題 4 : 「総合日本語 4-6」「漢字」クラスの運営

## 2024年度 日本語教育センター運営体制

### 運営会議

センター長：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：舩谷 鋭	(観光学部教授)
運営委員：浅妻 章如	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、法学部教授)
運営委員：菊池 雄太	(国際センターから、経済学部教授)
運営委員：小澤 康裕	(経済学部准教授)

### 実務委員会

センター長：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：舩谷 鋭	(観光学部教授)
センター員：小澤 康裕	(経済学部准教授)
センター員：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員：数野 恵理	(特任准教授)
センター員：小林 友美	(特任准教授)
センター員：任 ジェヒ	(特任准教授)
センター員：小松 満帆	(教育講師)
センター員：鹿目 葉子	(教育講師)
センター員：泉 大輔	(教育講師)
センター員：保坂 明香	(教育講師)
事務局：澤村 亜生津	
事務局：佐野 美奈子	
事務局：小菅 奈那	
事務局：鶴見 佳積	
事務局：宮本 杏子	

### 兼任講師

藤田 恵	長谷川 孝子	東平 福美	平山 紫帆	黄 慧
井上 玲子	小森 由里	森井 あずさ	森山 仁美	長島 明子
小澤 咲	斉藤 紀子	三浦 綾乃	沢野 美由紀	嶋原 耕一
末松 史	高嶋 幸太	武田 聡子	瀧澤 あゆみ	栃木 亜寿香
富倉 教子	和田 晃子	山口 紀子	山内 薫	袁 シュ
小林 千種				

## 2024 年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	12	第 1 回実務委員会
	17	第 1 回運営委員会
5	17	第 2 回実務委員会
	22	第 2 回運営委員会
6	14	第 3 回実務委員会
	19	第 3 回運営委員会
7	19	第 4 回実務委員会
	24	第 4 回運営委員会
9	20	第 5 回実務委員会
	25	第 5 回運営委員会
10/11	10/25	第 6 回実務委員会
	11/6	第 6 回運営委員会
12	6	第 7 回実務委員会
	11	第 7 回運営委員会
1	27	第 8 回実務委員会
2	14	第 9 回実務委員会
	19	第 8 回運営委員会

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局運

営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長

からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2024 年度日本語教育センター活動報告  
CJLE Program & Activity Reports (2024)  
2025 年 3 月発行

---

編集兼発行者 日本語教育センター  
発行責任者 池田伸子  
発行所 立教大学日本語教育センター  
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1  
Tel: 03-3985-4202